

Stage Seven

「皇子」

Stage Seven

「お母さん、お母さん！」

小さい子の泣き叫ぶ声が聞こえる。いや、あれは自分、いまの自分の声か。何もできない子どものように震えるばかりの自分の声か。

「いいえ、お父さま！ 私はもう子どもではありません。自分が選びます。押しつけられての結婚など、ましてあのような男性などお断りいたします！」

そこで彼女は目を覚まして、堅い寝台の上に起き上がった。寝慣れていないせいで節々が痛い。目が覚めたのはそのためでもある。

室内はとうに明るくなっており、扉がそつと開いた。

「ラウニーさま？」

「シータ？ 何の用です？」

「いいえ、お声が聞こえたものですから、何かあったのかと思ひまして」

「何でもないわ。夢を見たのでそれで声をあげてし

まったの。私、ずいぶんと寝坊してしまつたようね」

「はい、もうじき正午です。鐘を鳴らしますけれど、ラウニーさまはまだお休みになってください」

「もうそんな時間？ 全然気づかなかつたわ」

「お疲れなのですわ。マラノからずつと辛い旅を続けてこられたのですもの」

その時、彼女らの頭上で高らかに鐘が鳴り響いた。正午の聖課を告げるロシユフォル教会の鐘である。

「私も聖課におつき合ひさせていただくわ。いつまでも寝ているのも格好が悪いし、これからのことも考えなければならぬもの」

本当はそれだけが理由ではないが、ラウニーの言葉に純朴な僧侶の娘は心底嬉しそうな顔をした。

だが、彼女らが揃つて廊下に出ると、絹を引き裂くような悲鳴が入り口の方から聞こえてきた。教会の静寂は破られ、荒々しいだみ声が続く。

たちまち足を止め、見た目にもはつきりと震えだしたシータの手をラウニーは引つ張つた。

「この部屋に隠れておいでなさい。きつと私を捜しているのだわ。片をつけてくるから」

「ラウニーさま、おやめください。裏口からお逃げてください！」

「いいえ、たとえお父さまが追つてこれようと、私は逃げることなんてできない。いいわね、あなたは隠れているのよ!」

そう言いながらラウニーは槍だけ取った。聖騎士になった祝いにその父から贈られた名槍オズリックスピアである。

「聖騎士の名にかけて私は戦わなくてはならないのよ。あなたはそこにおいてなさい!」

「ラウニーさま!」

悲鳴とだみ声がさらに入り交じる。

追っ手に父は混じつていないようだ。そうと気づき、彼女は内心胸をなで下ろす。ハイランド王国一、ゼテギネア帝国一の騎士と讃えられた父に、自分がかんうはずのないことを彼女はよく承知していたからだ。

だがそればかりではない。ラウニーはまだ父を敬愛していた。父以上の騎士を知らないし、父を尊敬する思いは同じ道を歩むと決めた時から強くなつていく一方だ。しかも彼女は一人娘だったし、母も幼いころに病で倒れている。親類縁者を除けば父はただ一人の肉親だったのだ。

「乱暴狼藉はおやめなさい! ここをロシユフォル教会と知つての暴挙ですか?!」

槍をかまえ、彼女は堂々と口上を述べた。

しかし返礼は下卑た笑い声と魔法による攻撃だ。

「無礼者! 私が話しているのですよ!」

「あなたの口上なんてどうだっていいんだよ、お嬢さま? 俺が請け負つたのはあんたを多少痛めつけてもいいからマラノに連れて帰ることなんだ、あんたのそのきれいな顔にはン千万ゴートつて大金がかかつてるのさ!」

ロシユフォル教会の僧侶たちに乱暴をはたらいてるのは黒い翼のレイブンとその手下たちだ。見覚えのある顔ではない。だが連中は彼女のことをラウニー・ウインザルフその人と確信しているようだ。

「あなたたちのような下衆な輩に捕まる私ではないわ。それに誰が約束したのか知らないけれど、ン千万ゴートなんてお金、本当にもらえると思っているのかしら?」

ラウニーは一步下がって槍をかまえた。レイブンを手下たちもいやらしい笑いを浮かべ彼女を見ている。

古代高等有翼人の末裔と言われるバルタンに対し、オウガバトルの際に暗黒神側についたとされ、墮落した有翼人と言われるレイブンは真つ黒な翼が特徴だが、この男は翼ばかりか髪や肌の色まで黒かった。

「約束したのはあんたの婚約者さんさ。マラノの支配者なんだから金ほうなるほどあるだろうよ。あんたも痛い目見ないうちに、一緒に帰るって言うてくれないかい？」

「馬鹿ね、そんな口車に乗せられて。あの男がけちなことはマラノ中の人が知ってるわ。だけどどうやらあなたたちも痛い目を見ないとわからないようね。私に手を出したお馬鹿さんがどうなるか教えてあげる」

その言葉も言い終わらぬうちにレイブンたちが襲いかかってきた。ラウニーに聖槍騎士特有の呪文を唱えさせまいとてであろう。

だが彼女は槍を使わせても強者である。オズリックスピアの切れ味も鋭く簡単に部下二人を屠つてみせた。しかしレイブンがその死さえも利用しようとはラウニーには思いもよらぬことであった。三人目の鼻先に槍を引っかけた彼女は死体と一緒に崩しに倒された。

「卑怯者！ 大勢で襲いかかるなんて！」

「多少は傷つけてもかまわねえとアプローズさまの仰せだ！ 卑怯だろうと何だろうと捕まえちまえばこっちの勝ちよ！」

「その言葉、そっくりあなたにくれてやる」

「ぐふっ?!」

「アーレス?!」

「誰だ、てめえ?!」

応えはなかった。レイブンを後ろから切り捨てた女性剣士はラウニーを捕らえていた部下たちも次々に屠り、一瞬にして全てを片づけてしまったのだ。その速さにラウニーも哑然とした。

赤銅色の髪をした娘は剣を収めると倒れている僧侶に近づいて抱き上げたが、あらぬ方向に曲がって青ずんだ腕が力なく垂れ下がりが、彼女は弱々しくうめいた。

「あなたは何者なの？」

「グランディーナ、解放軍のリーダーだ」

「解放軍？ 反乱軍ではなくて？」

「そう呼ぶのは帝国の勝手だ。あなたの名は知っている。ラウニー・ウィンザルフだろう？」

「そうよ。でもなぜ？」

そこへグランディーナと入れ違いに彼女と親しい顔が入ってきた。

「ラウニーさま！ ご無事でしたか？」

「ノルン！」

「お久しぶりです、ラウニーさま。驚きました、あなたがアーレスに追われていると知った時は。それ

にしてもラウニーさまがなぜこのようなところにおいでなのですか？ まさか聖騎士団の任務ですか？」
「それならば良かったのだけれど違うのよ、ノルン。私、お父さまに結婚を強いられてマラノから逃げ出してきたの」

「ええっ?!」

「しかも相手はあのアプローズ男爵なのよ。いくらお父さまの命令だつてこればかりは従えないわ。自分の国を裏切った恥知らずの男だしポグロムの森で捕虜を虐殺した卑劣漢よ。それに私と彼つて二〇歳以上も離れているわ。どう考えても私とは釣り合わないのにお父さまは何を考えていらつしやるのかしら？」

彼女は大きなため息をついたが、ふと視線に気づいて顔を上げると、解放軍のリーダーや中年の騎士、それに老年の魔法使いが彼女を見ていた。三人に気づいてノルンが脇に動く。

「まだ何かご用？」

「アプローズの話を知りたい。マラノの支配者といふのは本当か？」

「ええ。あなたたちは？」

「我々は解放軍の一員であり、ゼノビア王国の生き残りです。国を裏切り、避難民を虐殺したアプローズ

男爵の仕業は同国人としてばかりでなく人としても許し難い罪業、マラノにいるというのなら好都合、ぜひ討たねばなりませんまい」

「あなた方がゼノビアの騎士だというの？」

「そうです。わたしはランスロットⅡハミルトン、彼はウォレンⅡムーンです」

騎士が自己紹介し、魔法使いと揃って頭を下げる。

しかしラウニーはグランデイーナと名乗つたりダーに話しかけた。

「あなた方はこれからマラノへ行くのね？」

「そうだ」

「私も一緒に行つてもいいかしら？」

「なぜ？」

「アプローズ男爵をこの手で討つためよ。ほかにどんな理由が要ると言うの？ あなたたちだつて是が非でも彼を自分の手で討ちたいと思つているわけではないんでしよう？」

「あなたの私怨で討たせるには相手が大きい。それに私は一時的にせよ帝国の人間となれ合う気はない。あなたはまだゼテギネア帝国の聖騎士ではないのか？ アプローズを討つた槍を次は私たちに向けられるのはご免被る」

「私に祖国を裏切れと言うの？ それにいま、そちらのランスロットさんがおかしなことを言わなかったかしら？ ポグロムの森で殺されたのは旧ゼノビア王国の捕虜だったはずだけれど？」

「違う。ゼノビア城からの避難民を降伏することも許さずに森ごと焼き殺したのがアプローズだ」

「馬鹿な！ それでは捕虜虐殺より始末が悪いわ。」

どうしてそんな人がマラーノの領主になどなれるの？

いいえ、そんなことよりお父さまはどうしてそんな人を私の婚約者になどしたのかしら？」

「ヒカシュー大將軍はポグロムの森の真相を知っているだろうな？」

「軍の最高責任者が知らないはずはありませんまい」

ウォーレンが答える。

「その上でアプローズを娘の婚約者に選んだ理由は何だと思う？」

「大將軍の利するところはわかりません。あるいは女帝の働きかけがあつたのかもしれませんが、我々には関係のないことでしょう」

二人の話を聞きながらラウニーは混乱していた。アプローズ男爵がポグロムの森でなしたのは同国の捕虜虐殺というのが帝国での通説だ。それは人道的には

確かに許し難いことだが、その後の帝国全土で行われた処刑を鑑みれば同じ戦闘員を殺したことはそれほど非道とも言えないだろう。だが非戦闘員で降伏の意志があつた避難民の虐殺はどのような理由があろうと弁解の余地はないことだ。何より納得できないのはそんな男が自分の婚約者だという事実であつた。

「アプローズ男爵のしたことは本当に捕虜の虐殺ではなく、避難民への焼き討ちだったのね？」

「そうだ。その火のために近隣の二都市も廃墟と化した。信じられないのならポグロムの森へ行つて自分の目で確かめてくるがいい」

「いいえ、そんなことはしないわ。私もこのままあなたたちと行きます。そしてアプローズ男爵を討つわ。それでいいかしら？」

「我々とともに帝国と戦うということだな？」

ラウニーは一瞬躊躇つたが、頷いた。

「そう受け取つてくださつてけっこうよ」

「解放軍を代表してあなたを歓迎する。」

ウォーレン、ノルン、彼女に着替えと傷の手当てを。

彼女の支度ができたら発つ」

「そう言えば、ノルンはなぜあなたたちと一緒にいるの？」

「彼女に訊けばいい」

グランディーナとランスロットが去り、ウォーレン、ラウニイーとノルンが残された。

「ウォーレンさん、彼女はああ言いましたけれど、場所さえ教えてくだされば、私一人で十分ですわ」

「わかりました。着替えといつでも大した物もありませんが」

「あなたたちの備蓄にはそれほど期待してはいないから心配なさらないでけっこうよ。じきにマラノですもの、そこまで我慢するわ。でもどうせなら動きやすい物をお願いね、ノルン」

「わかりました、ラウニイーさま」

二人が去ってから、彼女は手鏡を取り出した。さっきの攻撃でも壊れていないが、写った顔はいまにも泣き出しそうに見える。ザナドゥを離れて以来、誰にも心を許すことができないできたのに、ここでノルンに会えた気の緩みからだろうか。それとも祖国への信頼が日に日に失われることへの嘆きからだろうか。

「私はさつき、どんな顔をしてあの人たちの話を聞いていたのかしら？ こんな情けない顔をしていたら、帝国の聖騎士まで情けないなんて思われてしまうわ」

「そんなことございませぬわ、ラウニイーさま。私

には聖騎士らしくご立派にふるまっておられると思えましたわ」

「ノルン」

「でも驚きました。解放軍ときたら着替え一つをとつてみても本当にろくな在庫がないんですもの。選ぶほどにもないんですから。マラノが近くて幸いでしたわね。あの町では手に入らない物はないって有名ですもの」

そう言いながら彼女が広げた衣装は、確かにラウニイーの目には粗末な代物と写った。上都ザナドゥで贅沢な物に囲まれて育ち、贅沢を贅沢と思わず、求めるままに与えられる物の全てが当たり前だと思っていた彼女は、晴れて聖騎士になった後、団長のガウエインがしばしば口にした貧しい人びとのことを何も知らないままマラノに来た時、初めてその言葉の一端に触れ、理解する機会を得た。聖騎士として守るべきと思っていた人びとの大半が旧ハイランドを出れば帝国だけでなく聖騎士をも恐れ、憎んでいるという事実をも知った。

この貧しい服は、まるでその象徴のようだ。それが彼女がよかれと思っていたこの国の現実なのだ。

「お気に召しませんでしたか？」

「そんなことないわ。ありがとう、ノルン。私がいま着ている服だつて大した物じゃないでしょ？ これ、実はこのロシュフォル教会で借りたのよ。こんなに汚してしまつたけれど、怒られないかしらね？」

「着替えられたら訊いてみますわ」

急いで着替える彼女にいささかのんびりとノルンが話しかける。

「それにしても驚かれたでしょう、ラウニィーさま？ 解放軍のリーダーは無頼の傭兵なんです。ラウニィーさまへの口の利き方がなつていないのもしょうがありませんわ」

「ええ。でも、そんなことはこの際どうでもいいわ。どうしてなの、ノルン？ あなたのよう^ゆに聡明な女性^めがなぜ解放軍などに加わつて^ついるの？ いいえ、それよりもなぜカストロ峡谷にいるの？ 帝国教会に何かあつたの？」

「本当にご存じないのですか？」

ラウニィーは振り返る。ノルンの美しい顔が歪んだかと思うと彼女は感極まつた様子で手の平に顔を伏せて震えていた。

「ノルン?! ノルン、どうしたというの？」

「ラウニィーさま、私はもう法皇ではないのです。」

帝国での最後の身分はディアスポラの監獄長でした。私はディアスポラ大監獄に追われたのです」

「何ですつて?!」

ノルンの話はラウニィーには衝撃的なものだった。彼女ばかりかゼノビアの守備隊長を任じられ、解放軍に敗北したというデボネア將軍の話にも驚かされた。よもや四天王が解放軍のリーダーに負けようとはラウニィーは思いもしなかつたからだ。

彼女は自分が突然婚約者など押しつけられ、その相手のこともろくに知らないうちに結婚話にまで進んでいるあいだに、ノルンとデボネアを襲つた嵐のような事態にただ驚くばかりだった。

しかし彼女はその裏に父、ヒカシュー大將軍の娘に知らずまいとする意図を感じた。ノルンやデボネアの事実上の左遷など、彼女が知つていたら決して黙つてはいなかつたらう。気が進まない自分の結婚話など喜んで放り出して、何を差し置いても二人をゼテギネアなりザナドユなりに引き留めたたらう。ノルンもデボネアもラウニィーはよく知つている。ディアスポラだのゼノビアだのに誰が喜んで送り出すものか。

「卑怯だわ、お父さま！ 私がアプローズ男爵のことであれこれ迷つているうちに勝手に話を進めるなん

て。ノルンもデボネアも大変なことになっていたのに私に一言も教えてくださらなかったなんて！　フィカロ將軍だつて、プレヴィア將軍だつて、ルバロン將軍だつてそうよ、三人ともデボネアのこともあるたのこともとつくに知っていたでしょうに、私には素知らぬ顔で話したのだから、なんて卑怯な人たち！　何て卑怯なお父さま！」

「ラウニーさまはなぜアプローズ男爵から逃げ出したのですか？」

自分とデボネアのことを話し終えるとノルンはすつきりした顔だ。一人で激昂してラウニーは恥ずかしくなる。

「話してみてわかったからよ。あの男は私のことなんて愛していないの。あの男が私と結婚したいのは私がラウニー＝ウィンザルフだから、ウィンザルフ家に、正確にはお父さまに取り入つてより高い地位を望んでいるからよ。それは私だつて自分がウィンザルフ家の跡取りで結婚相手を自由に選べないことぐらい知っているつもりだわ。だけど彼は元はゼノビア王国の貴族で、ポグロムの森虐殺事件の首謀者だというじゃないの。そのことを言ったら何と答えたと思う？　『敗残兵のことなんて知りません』ですつて、もう私、

開いた口がふさがらなかつたわ！　しかも真相は捕虜ではなくて無辜の民の虐殺でしょう？　ゼテギネア帝国も語るに落ちたというものよ！」

「なぜヒカシューさまはそのような男とラウニーさまを結婚させようなどと思つたのでしょうか？」

「それがマラノに来てからお父さまにお会いしていいのよ。ポグロムの森の真相もさつき初めて知つたのだし、でも知つていれば、たとえお父さまの命令でも決して承諾などしなかつたのに、悔しいわ。ところでノルン、あなたたちの事情はわかつたのだけれど、なぜ解放軍などに加わつたの？」

「だつて、ディアスポラ大監獄は解放されてしまいましたもの。あのまま帝国に戻つても監獄長として責任を取らされるのは間違いありません、好きで行つたわけでもないのにそんなことになるのはいやですわ。それにディアスポラに行かされたばかりのころは解放軍をクアスの仇と恨んでいたのですけれど、クアスは生きていると聞きましたし、だつたら、もう帝国にいる理由はありません。むしろ解放軍と一緒に رفت方がクアスに早く再会できると思つたのですわ」

「でも祖国と戦うことになるのよ、あなたはそれでもいいの？」

「かまいません。デアマート家はどうせ私しか残っていませんでしたし、帝国がどうなつてもいいんです。クアスが側にいてくれればそこが私には祖国ですわ、ラウニイーさま。それにエンドラさまはともかく、最近のガレス皇子やラシュデイの言動には我慢がなりませんもの」

頬を薔薇色に染めながら、そう無邪気に言い放つたノルンに、彼女は肩の力が抜けるのを感じた。

「さあ、ラウニイーさま、傷の手当てをいたしましう」

三つ年上の友人は、出逢つた時からお嬢さま然としたところが抜けきらない女性である。ウインザルフ家主催の夜会で、ラウニイーは父からノルンを紹介された時のことをいまでも忘れない。生家は没落し、その衝撃で両親は相次いで亡くなつていた。独り残されたノルンはやむを得ず帝国教会に身を寄せたが、それらの面倒を見たのがヒカシュー大將軍だったのである。い

まから五年前、ラウニイーが十九歳のことだ。

「済んだのか？」

「ええ。あとは荷物を取ってくるだけだわ」

ラウニイーは急いで寢室に向かい、鎧を身につけた。

「よろしいのですか、聖騎士団の鎧など？」

「私、聖騎士に選ばれたことを恥じていないのよ。だけど解放軍ともに行つて、祖国と戦うつもりであるのも本当だわ。それに彼女つてそういうことにうるさくないような気がするのよ」

「そうですか？」

支度を調べて教会を出ると、二頭のワイバーンと格蘭ディーナ、それにランスロットが待つていた。

「本隊は先に行かせた。ラウニイーは私と、ノルンはランスロットと乗れ」

否も応もなく二人はワイバーンに乗らされた。

上空から眺めてもカストロ峡谷は全貌がつかめない。町があるのはわずかな地域だけで、その間、約六〇バーム（約六〇キロメートル）足らずである。だがそれさえもゼテギネア帝国のごく一部にすぎない。

この規模で打倒帝国を掲げた解放軍の無謀さに呆れながらラウニイーはその存在を反乱軍ごとくと片づけられない自分を感じる。

騎士道とは正義を貫くことに非ず、忠誠を貫くことにありとラウニイーは父、ヒカシュー大將軍に教わつた。父の忠誠は誰よりも女帝エンドラに捧げられ、それはラウニイーが生まれる前より続いている。

対して、ガウエイン団長に率いられる聖騎士団の忠

誠は女帝ではなくゼテギネア帝国そのものに向けられている。その歴史は四天王よりもよほど古く、旧ハイランド王国時代には聖騎士に選ばれることは武人として何よりの名誉であったと言われるほどだ。

だからこそ父と同じ道を選んだラウニイーも聖騎士になることを望んだ。そのための稽古に入れあげ、同年代の娘たちのように着飾ることもせず、それでも彼女は己の選んだ道が間違っていないと信じている。

けれど彼女には常に父の影がつきまとう。かつては旧ハイランド王国一と言われ、老いたいまもなお、四天王筆頭ルバロン將軍を差し置いてゼテギネア帝国一と言われる大將軍ヒカシューⅡウインザルフあつての聖騎士叙位という思いから逃れられない。

父の影から逃れようと訓練に明け暮れたつもりで、その成果があれだ。聖騎士団の誰にも見られなくて良かったという安堵と傭兵上がりの解放軍リーダーに助けられたという羞恥が彼女のなかで交錯する。

しかし自分もこれからは解放軍の一員なのだ。ゼテギネア帝国に反旗を翻す一団に聖騎士の誇りを失うことなく加わることは可能だったろうか。

「降りろ、ラウニイー。ここからは歩きだ」

「え、ええ」

気がつくといワイバーンは着陸しており、彼女らは解放軍の本隊に追いついていた。

ほとんどの者が彼女を好奇の目で見ると。ゼテギネア帝国大將軍、ヒカシューⅡウインザルフの愛娘というのがその理由だろう。帝国を離れても父の影から逃れられないことを彼女が疎ましく思った時、一人の老騎士が近づいてきて、深々と頭を下げた。

「あなたはどなたです？」

「わしの名はアツシュ、解放軍の戦士です」

「アツシュ？ 下の名は何と仰いますの？ もしや私の父のお知り合いですか？」

「直接お会いしたことはありませんが、ヒカシューⅡウインザルフ殿の名はよく存じ上げております」

「父の名をご存じとは、まさか、あなたは旧ゼノビア王国騎士団長のアツシュⅡクラウゼン殿ですか？」

「おお、ラウニイー殿はわしの名をご存じでおられましたか」

「ええ、思い出しました。でもあなたのことは主君暗殺の騎士と、そう聞いたような気がします。父はそのことをとても残念がっていました。私が父からあなたのお名前を聞いたのはその時だけだったと記憶しています」

「いいや、ヒカシュー殿は残念がられたりはしないでしょう、ラウニイー殿。真の騎士であるあの方には、わしの名など口にするのとはばかられるような忌まわしいものであつたに違いありません」

「それは、わかりません」

だがアツシュの言うとおりなのだ。女帝に不動の忠誠を誓う大將軍が旧ゼノビア王国騎士団長の名を聞きながらなかつたことを彼女はよく知っていた。

「ラウニイー殿、差し出がましいことを申し上げようですが、アツシュ殿のグラン王暗殺の罪は冤罪にすぎません。真犯人は帝国のガレス皇子だと、ご本人が申しておられました」

「ランスロット、余計なことを申すな」

「いいえ、これはアツシュ殿だけでなくグラン王の名誉のために申し上げるのです」

「お二人とも、それは本当ですか？」

「ええ、アヴァロン島でガレス皇子と対峙した時にはつきりとそう言われました」

「何て卑劣なことを！」

ラウニイーは二の句が継げなかつたが実はガレス皇子のことはろくに知らないのが本当だ。女帝の弟でありながら要職にも就かず、権限だけは大將軍にも匹敵

するが、実際は賢者ラシュデイと組んで、ゼテギネア帝国に伝えられる悪事の大半はこの二人のせいだとも言われている。しかし女帝や大將軍、それに四天王などから皇子を批判する言葉は聞いたことがない。

「でもそれならば、アツシュ殿はご自分の仕業でないことはご存じだったのでしょ？ なぜ無罪を主張されなかつたのです？」

「主君を守るべき騎士団長がその仕事を果たせずしてなぜラウニイー殿は無罪と仰せられます。たとえこの手にかけてなからうと主君をお守りできなかつたのであればわしの罪には代わりませぬ。あなたのお父上も同じ立場に置かれればきつと同じことを申されましょう」

「アツシュ殿は騎士道を貫くと仰せですのね？ それならば父も同意しましょう。でも、私には正義を曲げてでも貫くべき騎士道があるとは思えないのです。それは単に、私が騎士道を理解していないからでしょうか？」

話すうちに不意にラウニイーの心のなかに初めて出会った異国の騎士に対する畏敬の念が現れて、彼女は思わずアツシュの前に膝をついていた。衆人の目も気にならぬほど、それは強い思いであつた。

「アッシュ殿、どうかこの未熟者めにお教えください。私は迷っているのです。騎士道を貫いて祖国に殉じるべきか、騎士道に背いて正義を貫くべきか、私にはどうすれば良いのかわからないのです」

「顔を上げられよ、ラウニイー殿。そして立たれるが良い。騎士道を貫きそこね、こうして生き恥をさらしているわしに何が教えられると思われるのか」

「いいえ！ いいえ、生き恥などと私はそうは思いません！ あなたは騎士道に、亡きグラン王にいまも殉じておられます。いいえ、あなたばかりではありません。父もエンドラさまに捧げた騎士道を貫き、もしもこの先、解放軍と戦うことになってもエンドラさまに殉じる道を選ぶでしょう、それが騎士道なりと私に説いた人ですから降伏することも考えてはいないでしょう。でも私にはそのことが恐ろしくてたまらないのです。父と戦うことは正義でしょうか？ ゼテギネア帝国に正義のないことは私もよく承知しているつもりです。ザナドゥからマラノに行くまで、マラノからカストロ峡谷に来るまで、我が祖国のなした爪痕を私はいくつも見、それらが二四年経つてもいまだに癒えていないことも知っています。騎士道を貫こうとすれば、私は正義に恥じることになりましょう。ですが、

私には愛する人びとのいる祖国に刃を向けることも正義ではないように思えるのです」

冷たい非難の目をラウニイーは周囲から矢の刺すように感じた。ここにいるのはごく一部を除けば、彼女の祖国に国を蹂躪じゅうりゃんされ、亡国の徒となつた人びとなのだ。彼女の言う騎士道や正義など、彼らに言つても笑い飛ばされるだけだろう。その彼らが彼女に何も言わず、非難の眼差しを向けるだけで済んでいるのは、ひとえにアッシュが解放軍でそれだけの影響力を持っているからに違いない。

最初に自分に話しかけてきた旧ゼノビア王国元騎士団長の心遣いに彼女は深い感謝の念を抱いた。

「あなたの手には武器がおりだ、ラウニイー殿」
言いながらアッシュは彼女の手を取つた。と同時に彼女らの周囲が動き始め、ラウニイーとアッシュ、それにノルンだけがその場に取り残された。

「そしてこの世にはあなたより力がなく、それでも戦わねばならぬ者、戦う者が大勢いる。騎士道か正義かと迷っているから、進むべき道が見つからないからという理由であなたが武器を取らないこと、戦わないことは許されないとわしは思うがいかがか？」

「迷いながら戦つて道が見つかりましょうか？」

「道は見つかるものではない。あなた自身が見つかるものだ。そしてあなたの望まれる道は見つけ出すのもっとも困難なことと思う。あなたの言うように騎士道と正義は寄り添うものではない。むしろ相反することが多いものだ。お父上もそのことは重々承知しておいでだろう。その上で騎士道を選ばれたのであろう。迷われよ、ラウニイー殿。迷ったあげくにあなたの選ばれた道は誰にも非難はされまい、されてはなるまい。だが、もしもその時にあなたが敵となるならば、わたしは喜んでお相手いたそう」

「アッシュン殿は誰もがそのように迷い、選んだ道を戦っていると仰るのですね？」

「一人だけ戦うことに迷いを見せぬ者をわしは知っている。解放軍のリーダーとはそのような強さがなくば務まらぬものかもしれない」

炎竜の月十二日、カストロ峡谷のフルンゼという町に入った解放軍は、周辺一帯を荒らし始めたならず者漆黒のアーレス退治を依頼された。

カストロ峡谷全域を貫くポロプ川はゼテギネア大陸最長の大河であり、その冷たく荒々しい流れはたびたび氾濫を起こし、とうてい人間には御しがたい。流

域沿いの土質も農業には向かない痩せたものである。しかし川の流れは人が移動するのにわかりやすい目印の一つだし、カストロ峡谷はそれ以外の理由では開拓され得なかつたのだつた。

全長一五〇〇バームの大峡谷においてまとまった居住地があるのはフルンゼからタシケントまでのわずか六〇バーム足らずの範囲でしかない。けれどかつては旧ホーライ、旧ドヌーブ両王国の国境だつたこともあるし、ほとんど国交はないがガリシア大陸に至る陸路の一つでもある。

アーレスはこの地に来てまだ日は浅かつたが、もともと豊かでない土地に山賊は厄介きわまりない代物であつた。

東の辺境より聞こえる解放軍の噂は、多少尾鱗おひれをつけて帝国に対し連戦連勝の報を伝えてきた。地理的に帝国も旧王国もあまり関係ないカストロ峡谷の人びとではあつたが、その噂はアーレス退治の望みを託すに十分なほどで、解放軍がこれを拒むはずもない。二十人ぐらいで小隊を組んで一帯の町を解放に当たつた。

聖騎士ラウニイーザルフの保護はその途上で浮上してきた。アーレスがカストロ峡谷にやってきたのは、ラウニイーがここに逃げ込んだためだつたの

であり、彼を追つ手に差し向けたのはマラノの支配者ラインハルト・アプローズ男爵だった。旧ゼノビア王国の貴族であり、ポグロムの森を焼き払った虐殺事件の首謀者でもある。旧ゼノビア勢が半数を占める解放軍にとつては憎き裏切り者だった。

ディアスポラからマラノへ向かうには、北側に大きく迂回する以外に南のガルビア半島、西のバルハラを経由する道もある。しかし、二四年前の戦争でバルハラにおいて賢者ラシュディが使つた禁呪はガルビア半島の根つこまで及び、ホーライ王国の西半分を永久凍土に変えてしまったのだ。グランディーナは速度の落ちる雪原の進軍を嫌い、多少回り道にはなるがカストロ峡谷経由を選択した。以前は二日ほど余計にかかった道だ。

聖騎士ラウニーにはこの選択が幸いであつた。解放軍がバルハラを経由していれば、彼女はいまごろ捕らえられてマラノに送り返されていただろう。

「グランディーナ、全員集合しました」

「思つたより時間がかつたな。アレック、今日はここで休む。明日、マラノに向かうと皆に伝えろ」

「承知しました」

ほんの一部とはいえ、カストロ峡谷はやはり広い。解放軍が予定の集合地点アルマアタ郊外に集まつたのは聖騎士ラウニー保護の翌日、炎竜の月十四日のことだった。先に到着していた者がすでに野営地を作り始めていたが、人員の増加は手間を二倍三倍に増やしたし、消耗品もばかにならない。

しかし、人が増えた結果、マチルダはいままでの食事担当から解放されて治療に専念することができるようになつていた。怪我人も増えたのは余計なおまけではあつたが。

「今日はどうか？」

「皆さん、お元気ですわ。スウィフトさん、フォードさん、チャールスさんの怪我也マラノまでには良くなると思います。ですがグランディーナ、あなたがいちいち出回られることはないでしょう。一ヶ所と決めていただければ私が報告に上がりますのよ」

「あなたの話を聞かためだけに歩いてるわけじゃない。それよりもデネブが料理の味が落ちたとぼやいていた。忙しくないならそちらの面倒も頼む」

「あら、あらあら。ミネアにはちゃんと味つけから手順まで教えたつもりだったんですけど早速見に行つてみますわ。彼女も意外と大きっぱななんですよねえ」

マチルダは苦笑いしたが、心は料理部隊の方にすっ飛んでいられるらしい。グランディーナとランスロットに頭を下げると急いで走っていった。

「そう言えば、よくあなたが苦言を呈さないでいるものだな」

「君が出歩いて皆の報告を聞く話か。わたしはいまのマチルダの意見には反対だ。君が出歩くのを怠り、目の届かぬところが生まれるようになっては後々要らぬ厄介になりそうだからな。君だってそのことを察じてこうして歩いているんじゃないのか？」

「それは私も認めるが、あなたが黙ってついてくるのはどうにかならないのか？」

「君が皆の話を聞いているのにわたしが口出しすべきではないだろう。かといって君を一人にするつもりもない。それがわたしの仕事だと思っているのでね」

彼女も来るなど言わず、また移動する。

ディアスポラを発つて以来、これが日課なのだ。用事のある者同士が近くにいることがあつても、グランディーナはわざと遠回りしているように思われた。

「デネブ、さっきの石は何かわかったか？」

「何かも何もないわ。これ、ただの追尾石じゃないの。期待して損しちゃった」

「ただじゃない追尾石もあるのか？」

「追尾石は追尾石。ならず者が持つてするような物ではないけれど、そんなご大層な代物でもないの」

「効果はなんだ？ 作るのには手間なのか？」

「もちろん人を追いかけるのに使うのよ。そうでなくつちや、カストロ峡谷で人なんか見つけれっこないわ。作るのには材料があればそんなに面倒じゃないわよ。ちなみにこれ、彼女の？」

「そうだ。ほかの人間には使えないのだな？」

「これを作った人が変えないと駄目ね。あたしに預けてくれたら使えるようにできるけれどどう？」

「いや、いい。返してくれ」

「あなたが持つても使い道はないわよ？」

「あなたに預けておくより安全だろう？」

「しようがないわねえ」

デネブの手からグランディーナの手に多角形の宝石が手渡される。その内部ではずっと光が点滅しており、向きを変えると光の位置は常にある方向を指して動いた。それが誰を指しているのかはランスロットにもすぐわかった。

「まだ用事があるの？」

「あとはウォーレンと話したら終わりだ」

「じゃあ、一緒にお夕飯いただきましょ。そう言えばマチルダさんにはちゃんと言ってくれた？」

「さつき伝えた。せつかくの誘いだが先行するから夕飯にはつき合えない」

「あら、残念ね」

グランディーナは宝石を無造作にポケットに落とし、また歩き出した。

二人とすれ違おうと皆が挨拶をする。

彼女とランスロットの顔はもはや知らぬ者はいない。同様にウォーレンやアッシュ、ギルバルドにカノープス、マチルダの名前と顔もほとんどの者が知っている。望むと望まざるとに関わらず、彼らもまた解放軍を代表する者だと皆が認識している証でもあった。

「さつきの話はどういうことだ？」

「マラノに着く前にアラデイと話しておきたいが、私が留守のあいだのことをウォーレンに頼もうと思っている。あなたとカノープスはどうせ一緒に来るだろうと思つたから話さなかつたが支障はあるか？」

「いや、ないな」

人数が増えたので補給の荷物も倍増した。しかし、いままではウォーレン一人にガーディナーが手伝うくらいだったところを非戦闘員のヨハンニシャルマーズ、

ディック、ツイセギユール、フレドール、ケフェンフラーの三人が正式な補給部隊に任命されたのでウォーレンの負担はかなり軽くなったはずだ。

「ウォーレン、補給は済んだか？」

「はい。ですが、補給部隊も人が増えましたし、マラノからはヨハン殿にお任せしたいと思つています。そろそろあなたにお気遣いいただく必要はないと思います。それが、それだけではありませんか？」

「いまの解放軍の規模ならば皆の様子に目を配ることができる。私の知らないところで勝手に何かが起きているのはご免だ」

ウォーレンは黙って頷いた。

ディアスポラ陥落前夜の緊張感は二人のあいだにはなくなつていた。どうやらカノープスの言つたようによりは戻したらしいが、ウォーレンの手柄をよく知るだけにランスロットは彼が元の鞘に収まつたはずはないと思つていた。しかしいまは表面上は穏やかだ。その穏やかさを逆に彼は案じずにいられない。

「それと私は先行してフラヴィオで影の報告を聞く。ランスロットとカノープスが一緒に行くが、あなたたちともそこで合流しよう。それまであなたに解放軍を任せる。歩いてここから三日のところだ」

「承知しました」

グランディーナはその場を離れ、ウォーレンが頭を下げるとヨハンたちも做った。

彼女は最後にギルバルドのところへ赴いた。そこにはカノープスやユーリアもおり、話はずんでいた。

「ギルバルド、これからグリフォンを三頭使いたい。問題はないだろうか？」

彼は即座に立ち、カノープスたちも動く。グリフォンたちはとくに食事を終えていたが、大

勢人が現れたもので多少落ち着かないようだ。

「皆、元気です。誰が乗っていきますか？」

「私とランスロット、それにカノープスだ」

「どこ行くんだ？」

「皆に先行してフラヴィオまで行く。影の話を聞くから私一人の方が都合がいいんだが、二人とも来るだろうからな」

「当然だろう」

「それならばエレボスとシューメー、ポリュボスがいいでしょう。すぐに発ちますか？」

グランディーナがランスロットを見たので彼は頷いた。次いでカノープスを見ると、彼も当然という顔をしたので、ギルバルドは名前を挙げた三頭をすぐに起

こし、ユーリアが率先して手伝った。

「後のことはウォーレンに任せた」

「承知しました。お気をつけて」

すでに辺りは暗くなり始めている。三頭のグリフォンは次々に野営地を飛び立ち、カストロ峡谷もすぐに背後に去っていった。

それから二日後の炎竜の月十六日、トリエステより北に一日のところにある宿場町フラヴィオでグランディーナはアラデイとだけ会った。二人はずいぶん長いこと話し合っていたが、その声は漏れてこず、ランスロットとカノープスは待つことを強いられた。

もつとも、この二人に限ってただ待つわけもない。

現在の解放軍についての話は尽きるはずもなかった。

たとえばこんな具合に。

「ああ一気に面子が増えられると顔と名前の一致しない奴らがいつまでもいて面倒だよなあ。おまえは全員覚えたのか？」

「たぶん大丈夫だ。ああ毎日会っていればいやでも覚えるさ。彼女も全員覚えたんじゃないのかな。それにこれからは一緒に戦うことになるんだ、命を預けるかもしれない相手のことを知らないではすまされない

だろう？」

「真面目にそんなことを言ってるんだつたら恐れ入るぜ。大方の連中はいまだに解放軍じゃなくてゼノビアだのホーライだのにしがみついているっていうのに俺だつてまるで悪夢のようにゼノビアを思い出すことがある。おまえにはそういうことはないのか？」

「ないなんて言ったら嘘だと言われそうだが、君ほど深刻に感じたことはないな」

「別に嘘だとは思わねえけどその潔さがどこから来るのかは興味がある。いつ吹っ切れたんだ？ アヴァロン島からか？」

「吹っ切れたんじゃないよ。自分のすべきことが何か考えたら、国などにこだわるのがつまらなくなっただけさ。彼女の強さを見習いたくなっただけのこともあるがね」

「おまえたちはそれでいいかもしれないがな、国に抛らない強さつてのは危険と紙一重だ。そのことは承知しているのか？ それにゼテギネアの人間なのに国がないなんてあり得ねえと思うんだがな、おまえ、そこからへん聞いてないのか？」

「ゼノビア城を落としたばかりの時に、わたしも郷愁に駆られて訊いたことがあるが、はねつけられた」

「そりやまた、何て？」

隣室の二人はこちらの会話などまったく気にしていないだろうし、カノープスのほかに聞いている者などいない。それでもランスロットはつい小声になった。あの時グランディーナから感じた拒絶反応を思い出すかのよう。

「要らぬ好奇心は身を滅ぼす、そう言われたんだ」
てつきり笑い飛ばすかと思っていたが、カノープスは腕組みをして短くうなり声を上げた。

ランスロットも思わず息苦しさを感じて窓を開けに立つと、隣にいますと思ひ込んでいた彼女とアラディを眼下に見つけて苦笑いがこぼれた。

「何かあったのか？」

すぐに窓を閉めるとカノープスが不審そうに言った。
「話に夢中になりすぎたようだ。二人が降りたことに気づかなかった」

「護衛のためについできたわけじゃないんだからいいんじゃないかねえの」

「じゃあ、何のためだ？」

「暇つぶしさ。三日もただ歩いているのもおもしろくねえし、周りの目がうるさくてかなわねえ。内緒話もできねえからな」

「それならばギルバルドも誘えば良かったかな？」

「それじゃ露骨に内緒話しますって面子だろうが。」

そうでなくたってギルバルドのことはまだ陰口たたくような馬鹿がいるからな」

「それはあまり嬉しい話ではないな。彼女は気づいているんだろうか？」

「気づいたらどうだって言うんだ？ まさかあいつにギルバルドを庇えとでも言うつもりか？」

「そうではないが、彼女は気を遣うことができる立場だろう？」

「ギルバルド自身がそんなことを願っていないのにお節介を焼く馬鹿がどこにいる？ 下手な同情なんてあいつは望んじやいなし、中傷されるのも覚悟の上で来てるんだ」

「それでは君がさつきうなった理由は何だ？」

「ほかの奴なら何をすかしてやがると思うところだがあいつならあり得ねえ話じやないからさ。もしもエンドラの娘だなんて言われたら、おまえ、どうする？」

「愚問だな。わたしの気持ちは変わらないよ」

「皆が皆、そういう覚悟でいれればいいんだがな」

「皆が知る必要のないことだからこそ黙っているのだろう。だがこういうことに限って漏れやすい。失っ

た祖国にかまけている場合ではないというのにな」

「だが俺たちも含めてたいていの奴らは国に縛られたまんまだ。あいつだけそういうしがらみがないのは内心羨ましくもあるな。だからつてゼノビアが嫌になったわけじゃねえぜ」

「それは蛇足だな」

「違いねえ」

二人が笑い合っているとたたく音がして扉が開いた。

「何だ、驚かすなよ。誰かと思つたぜ」

「ひとまず用事は済んだ。後は皆と合流するまであなたたちも休め」

「マラーノの話がもう済んだのか？」

「今回は私たちだけでは埒さだめがあかない。どうしても商人たちの協力が必要だが、心当たりが一人だけある。どちらにしても待ちだ」

「そんなことを言つてもウォーレンたちが来るのは明日だし、マラーノに遊びに行くわけにもいかねえし、することなんかねえぞ」

「ではこれでも眺めていろ」

グランディーナが筒状に丸めた紙を投げてよこした。カノープスはそれを開き、ランスロットものぞき込む。マラーノの地図だった。

「ひでえ字だな。これ、何て書いてあるんだ？」

「マントーバ、ベルチェルリ、フェルラーラ、ボローニャ、モンビーズダ。汚い字で悪かったな」

「え？ おまえの字なの？」

「ライナスが描いた地図に私が加筆した。マラーノの地理をよく頭に入れておけ」

ランスロットとカノープスは思わず顔を見合わせた。どちらかと言えば、口をすべらせたカノープスの方が言葉に詰まり、ランスロットも弁護のしようがない。

しかし「ひどい字」などと言われたことがよほど癪しかくに障ったのか、グランディーナの方が言葉を続ける。

「字なんて書いて読めればいいんだ。いちいちうるさいぞ」

「おまえ、それを言うなら、これは読める字じゃないぞ。どう見たつて殴り書きだ、読めつて言うなら、せめて丁寧な書けよ」

「読めたんだから文句を言うな！」

戸が勢いよく閉まり、カノープスは啞然としていた。その手からランスロットは地図を取り上げる。

「君も時々大人げないことを言うんだな。字のことぐらいで目くじらを立てるなよ」

「売り言葉に買い言葉つてやつだよ。何だよ、おま

えまであいつの言うことに同意するのか？」

「お世辞にもきれいな字とは言えないが、君が言うほどひどい字でもないだろう？」

「冗談だろう。おまえ、その字が読めるつて言うのか？」

「確かに君の言うとおりくせ字だとは思うが、読めるじゃないか」

地図が返され、カノープスはその間に書かれた文字を睨んだ。うなり声さえ上げたところを見ると、本気で読めないらしい。

「確か、マントーバ、ベルチェルリとか言つてたな。おまえ、書き直してくれない？」

ランスロットは書く物がないと言おうとしたが、火桶に燃えかすが残っていた。あまり気は進まないが読めないのも事実のようなので、彼はグランディーナの文字の隣に書き足してやった。

「マラーノは攻めにくそうな都だな。三重の城壁に加えてサルジニア湖にも三方を囲まれている。城壁の門はどれも一ヶ所しかないし、港も町の中に引つ込んでる。おまえならどこから攻める？」

カノープスが地図をよこしたのでランスロットは手にとつて眺めた。

三重の街壁を持つマラノは六つの地域に分かれる。いちばん外側の外壁に囲われた地区の西側がフェルラーラ、真ん中がボローニャ、南東をモンビーゾ、二番目の内壁に囲われた地区の西半分をマントーパ、東半分をベルチェルリと呼ぶ。いちばん内側の内壁に囲われた地区がマラノ発祥からの都市部で単に「マラノ」という時にはここだけを指すこともあり、ほかの名称は知られていない。

当然、内側が一等地で外側の方が三等地となるのだが、現在も拡充しつつあるマラノには近い将来、四番目の外壁が造られるのかもしれない。二四年前はおそらくはここマラノにもゼノビアのように多くの難民が集まったことだろう。

「港からかな。ただ船の調達が難しそうだし、外壁に比べれば守りが薄いのは敵も承知しているだろう。明け方を狙っても警戒は厳重だろうな」

「そうだ。かといって、外壁と港以外は侵入が難しい上に広すぎる。ゼノビアみたいに空から攻めればほとんど市街地の上を通るから待ち伏せは避けられん」

「何だ、処置なしか」

「いまのままじゃどうしようもねえから、商人たちの助けが要るんだろう」

「二四年前、マラノはどうだったか知っているか？
そもそもマラノには自衛軍なんてあるのか？」

「軍はないって聞いた。何でも商人が個別に抱えている用心棒だけらしいが、二四年前は戦わないで降伏したそうだ」

「そうか。これは返すよ」

カノープスが黙って受け取ったので二人の話はそこで途切れた。ランスロットは手持ちぶぎたになり外をのぞいてみたが、隣の部屋がすでに暗いことがわかっただけだ。

「彼女はもう寝たらしい」

「何だ、俺たちも休もうぜ」

二人の部屋が暗くなつたのもじぎのことだった。

「相変わらず起きるのが早いな。まだ夜が明けたばかりだぞ」

「昨日はあなたたちより先に寝たからだろう。寝過ぎたかな」

「本当に寝てたのか。俺はてっきり、狸寝入りかと思ってたぜ」

「寝られる時は寝ることにしている。それにマラノのことについて考えようにも判断材料が足りない」

「昨日は悪かったな、大人げないこと言っちゃまって。ランスロットにも釘を刺された」

「字のことで怒られたのは十年ぶりだ。私も大人げなかった」

「おまえを怒る奴なんていたのか」

「十年前は私だつて子どもだ、怒られもする。特に字のことはあなたと同じことを言われた。きれいに書けるようになればと言わないから丁寧に書けと。読めればいいなんて言ったら、十年前と変わっていないとまた怒られるかな」

「誰にだ？ フォーリスさまにか？」

「フォーリスさまに怒られたことはない。あの方は私にどうしろとは言わなかった。あなたは誘導尋問がうまいのだな。もう少して話してしまいそうだった」

「話しちまえばいいじゃねえか。何を押し黙つてる必要があるんだ？」

「マラーノを落とすまで余計なことで気を煩わせたくない。忘れてくれ」

「おまえがそこまで言うなら、俺も追求しねえよ」

「ありがとう」

グランディーナがわずかに微笑んだのでカノープスはつい目をそらす。アイーシャの時もそうだったが彼

女は本気で礼を言っているのだ。

「それで、今日は誰に会うんだ？」

「〈何でも屋〉のジャックという商人にだ」

「ていうと、おまえがヴォルザーク島に来る時に世話になった奴か」

「そうだ」

「二ヶ月前にマラーノに行くと言つてた奴がまだマラーノにいますか？」

「ああ。おかしい話かもしれないが、彼にはマラーノで会えると確信している」

「おまえがそう言うからには信用できる奴なんだろうな？」

「いや、どちらかという変わり者だ。ランスロットも起きたようだ。朝飯にしよう」

「あるだけありがてえと思わないとな」

「私は味にはこだわらない」

カノープスは半分くらい冗談のつもりだったが、グランディーナは本気で気にしてなさそうだ。だがこればかりはランスロットも同意した。一軒しかないから文句は言えないが、フラヴィオの宿の飯は美味くないのだ。その点、解放軍の料理人たちは、主にマチルダによるところが大きそうだが、いい腕前をしている。

しかし、一昨日の晩は携行食糧で昨日の朝も同じ物を食べた。あの味気なさどつちを取るかと訊かれたら、二人とも宿の方がまだましだと思っっている。

朝食はパンに目玉焼きと焙った豚の燻製肉の薄切りで、二人が席に着くより早くランスロットの陣取った卓に並べられていた。

「おまえが出かけたら、俺たちはここでウォーレンたちが来るのを待つてるだけか」

「そうなる」

「グリフォンと我々だけトリエステに先行してもしょうがないだろう」

「まあな。おおい、かたまり肉を売ってくれ。あいつらにも飯を食わせなくちゃならん」

「私が出るぞ」

馬車の音が聞こえたのは彼女が外に出てからだ。ランスロットが後を追うと、四頭立ての馬車にグランディーナが乗り込んだところで、馬車はそのまま街道を南に走り去った。

「久しぶりだな、ジャック」

「よくわたしだとわかっていただけでしたね、グランディーナ」

「ほかに四頭立ての馬車を持っていそうな人間に心当たりがない。万が一間違っているも対処はそれから考えても遅くないだろう」

「あなたらしい判断です」

ヴォルザーク島で別れた時とジャックは変わっていなかった。後方に撫でつけた艶のある黒髪にちよび髭、フリルのブラウスまで同じものだ。

御者台には御者と、ジャックの行くところにはどこにでも同行する用心棒、バンが座っていたが、広い車内にはジャックしかない。

彼の向かいにグランディーナが腰を下ろすとジャックは問答無用で右手を取り、軽く口づけた。

「お久しぶりです、よくわたしのことを思い出してくださいね。硬貨のことを聞いた時にすぐわかりましたよ、あなたが呼んでいると。ヴォルザーク島でお別れしてからというもの、あなたのことを思わぬ日はありませんでした。それが一ヶ月くらい前からでしょうか、あなたたちの噂がマラノにまで届くようになったのは。ゼノビアを落としてから帝国もあなたたちの存在を無視できなくなつたのでしょね。最近は町中にあなたの手配書まで張り出されるようになってしまいましたよ。ところが、これが全然あなたに似ていないんです。

あのような手配書が出回るなどあなたに対する冒涇というものです。金額が多少低いのは目をつぶるとしてもですね」

「あなたは相変わらずだな。それにこんなに早く来るとは思わなかった」

「お別れた時にわたしはあなたにこう申し上げたはずですが、この大陸のどこにいてもあなたを待たせませんと。有言実行がわたしのモットーです。ですが、あなたは少し疲れているようですね。連戦連勝もけっこうですが、適当に休んだ方がいいではありませんか？ ヴォルザーク島からずっと戦い続けているでしょう？」

「まだだ。休むなんて呑気な話はマラノを落としてから考える」

ジャックがグランディーナの手をまた取った。武器など持ったこともないような白いなめらかな手が、荒れた無骨な手を撫でさする。

「それで、あなたの呼び出しに取るものもとりあえず飛んできましたが、用件は何でしょうか？」

「商人の町のことは商人に訊くべきだと思った。マラノの商人たちのことを詳しく教えてくれ。特にマラノ市最高参事会、通称、十三人会に会うにはどうすれ

ばいい？」

ジャックの手が止まり、眉をひそめる。

「おやおや、十三人会の名もご存じとはあなたの情報網は侮れないものがありますね。それにどうやら物騒な話が前提のようです。あなた個人の頼みならば何でも無条件に聞きますが戦争の話となりますとわたしの独断で返答するわけにはまいりません」

「解放軍からの見返りがほしいということか？」

「そうではありません。あなたが解放軍のリーダーとして話をされるのならば、わたしもマラノ商人の末席を汚す者として話をしなければならぬということです。もちろんここでは無理ですし、わたし一人で対応できる話でもありません」

「ならば、そういう話になる前に何をすればいいのか教えてくれ。マラノの商人たちにただ会いに行つて話が進むわけがないことぐらい私も承知しているつもりだ」

「なるほど。それでわたしを頼っていただけるとは嬉しい限りですね。ですがあなたのことだ、まさか手ぶらでここまで来てはいないでしょう？ あなたの知っていることを教えてくだされば、お互いに手間も省けると思えますが、いかがですか？」

「私を知っているのは現在のマラノの支配者が旧ゼノビア王国の貴族、アプローズだということ、マラノが旧ホーライ王国下に入るのも嫌がったことぐらいだ。それにマラノが二四年前の戦争で、戦火を避けて帝国に降伏したということも知っている」

「ああ、なるほど、最低限の知識はお持ちですね。あとは十三人会もご存じ、と」

「十三人会について知っているのは名前だけだ。商人の代表で構成されるマラノ市参事会員のなかでもさらに有力者だけで構成されている最高権力だろう？」

「おおむねそのとおりですが、市参事会についてはさすがのあなたにも誤解があるようですので訂正しましょう。市参事会員にはマラノ市民で成年男性ならば誰でもなれます。マラノ市民になるには市参事会の決める税金を支払い、市内に一年と一日以上住めば良いのです」

「あなたも市参事会員なのか？」

「ええ、もちろんです」

「ヴォルザーク島に来た時、あなたはゼテギネアは初めてだと言つてなかったか？」

「蛇の道は蛇、どんなことにも抜け道はあるものですよ」

ジャックはいけしやあしやあと言つて笑顔を浮かべる。それでグランディーナが外を眺めると馬はとうに並足になり街道を南に下つているところだった。この調子で進めば、日が暮れる前にマラノの衛星都市、北東の玄関口トリエステに着く。

巨大都市マラノはいくつもの衛星都市を持つている。トリエステのほかに北西に位置するモンファルコーネ、西北西に位置するシャモニー、東南東に位置するモンズニエラや、ウージネ、サンベルナル、パドバといった都市群である。特に重要なのがパドバで、全ての街道は必ずここを通つてからマラノに行く。パドバを押さえればマラノへの入り口は湖だけとなるほどだ。さらにトリエステからはカストロ峡谷やバルモアへ通じ、モンファルコーネからはゼテギネア大陸を東西に分ち難攻不落の要塞を擁するアラムート海峡へ、シャモニーからはバルハラ、モンズニエラからはガルビア半島へ至るのであった。

外に視線をやつたままグランディーナは話を再開する。

「ジャック、私たちの目的はアプローズを倒し、マラノから帝国を追い出すことだ。その後、西大陸に渡るまでマラノを足がかりにしたい。どうすればマラノ

を解放軍に協力させられる？」

「あなたの最終目的はゼテギネア帝国を倒すことでしたね。ですが、その後のことはどうしていただけますか？ アプローズ男爵を倒し、帝国を倒し、別の支配者につけて代わられるのでは現状と何も変わりません。戦火に巻き込まれる危険性があるだけマラノ市としてはあなた方にはご協力できません」

彼女がジャックに視線を戻すと、〈何でも屋〉は手を組み、こちらを見つめている。

「戦争屋に戦後の保証をしろとはあなたも無茶なことを言う。だが私が請け負ったのはゼテギネア帝国を倒すまでだ。その後のことは知らないし興味もない」

「ですが、それではお話にならないことはあなたも承知しているでしょう？ 良くも悪くもあなたは反帝国の最大勢力を率いておいでだ。知らないの一点張りでは誰も納得しませんよ」

「さすがにあなたは口がうまいな。だが私は帝国を倒した後までこの国に残るつもりはないし、国の形に口を挟むつもりもない。私が下手に口を出せば、後に残る者たちには面倒なことにもなるだろう。それならば半端な約束はできないし、しない。マラノはこちらで勝手に調べて攻めさせてもらう。アプローズもす

に私たちの襲撃に備えているだろう。マラノが戦火に巻き込まれることは避けられまい」

「あなたも頑固な人ですね。そしてこちらを試すような残酷なことを平気で仰る」

「マラノに被害を出すことは私も本意ではない。だが攻略に手間取ったり解放軍に被害が生じるのもごめんだ。マラノとの交渉が決裂すれば、協力は期待できないだろう。だがマラノをそのままにして帝国の懐を潤しておいてやるつもりはない。マラノは攻撃する。その際に優先順位の低さはマラノということになるが、そのための代償が大きいことも承知の上だ」

「そのためにわたしを私的に呼び出したというわけですか。どうやらわたしは、あなたの戦争屋という部分をかかなり軽く見ていたようですね」

言ってからジャックは大きなため息をついた。だがその顔には満面の笑みが浮かんでもいる。

「ですが、あなたが相変わらず打算がないのでわたしは嬉しいのですよ、グランディーナ。まったくあなたときたら、お会いした時から変わりませんねえ」

「これが性分だ、いまさら変えようもあるまい。それで公人としてのあなたの意見は聞いたが、あなた個人の意見はどうなんだ？」

「おや、そのように受け止めていただけれるのですか。わたしもまだまだ、あなたに脈ありと期待してもいいのでしょうかね。ですが、まだ公人として話してもよろしいですか。あなたに国を預けることになりそうな方の心当たりはあるのでしょうか？」

「一人だけいる。旧ゼノビア王国のトリスタン皇子が生きているそうだが、ただ、アヴァロン島に行つたことまでは知っているが、その先は知らない」

「トリスタン皇子ならばお供の方とマラノにいます。お会いできるようお膳立てしましょうか？」

「私は彼の臣下じゃない。こちらから会いに行くつもりはない。それで満足か？」

「いいえ、トリスタン皇子も一緒に来てください。残念ながら十三人会は戦後の約束も取りつけていただけなければ、会つてもくれないうからね」

「それならばかまわない。ジャック、トリスタン皇子と会えるように手配してください」

「日にちと場所はこちらで指定してもよろしいのですか？」

「アプローズの結婚式が炎竜の月二四日だと聞いた。マラノ襲撃はその日に合わせたい。できるか？」

「今日が十七日ですね。それでは明日、トリエステ

でお会いできるよう手配しましょう。時間は正午ごろ、いかがですか？」

「ずいぶん手際がいいんだな。まるで初めからあなたの手の上で踊らされてるようだ」

「お気に召しませんでしたか？」

「とんでもない。あなたには感謝している。だがそこまで手際がいいのなら、もう一つ頼まれてくれ」

「何でしょうか？」

「十三人会の中心人物と言われるグリフレットⅡ マッセナに会いたい」

「グリフレット殿とはまた大きく出ましたね。理由を訊いてもいいでしょうか」

「十三人会一人ずつに会つて外堀を埋めていくのは私の趣味じゃない。それよりも十三人会の中心人物の意向を訊きたい。ラウニイとアプローズの結婚式は七日後だ、十三人会一人ひとりに会うほどのんびりしていたくない」

「それよりも十三人会とまとめて会える場を提供して差し上げましょう。明日以降になつてしまいますが、そこでお話しなさい。あなたとトリスタン皇子がいれば、それぐらいの面子は揃うでしょう」

「それは私人としての援助だろう。あなたの公人、

マラノ市参事会員としての立場はどうなったんだ？」

「やめることにしました」

「さつきはあれこれ言っていたのにずいぶん変わり身が早いんだな」

その言葉も終わらぬうちにジャックはグランディーナに近づき、その手を恭しく取つたので彼女も驚く。

「わたしの気持ちも察してください。二ヶ月ぶりにお会いできたというのに、あなたはアプローズ男爵とマラノのことで頭がいっぱいなんですからね。ですがわたしも無理なことは言いません。あなたにとつてマラノがそれだけ大きい目標だったということでしょうからね。マラノを落としてからでけっこうです。一日だけわたしに黙ってつき合ってください」

「そうしないと十三人会に会わせないとでも言い出すのか？」

「わたしはそんな卑怯なことはいけませんよ。いかがですか？」

「そう言われると受けざるを得ないな。先の予定もあるが、一日ぐらいならあなたにつき合ってもいいだろう。だがあなたも物好きだ。戦争を離れた戦争屋に何の用がある？」

「それは当日までのお楽しみです」

ジャックは楽しそうに微笑んだが、グランディーナの関心はすぐに失せる。

「もう一つ教えてくれ。今度の結婚式にはエンドラ以下、四天王まで招待されていると聞いた。だが花嫁が逃げ出した事実がある以上、大將軍も来るか怪しいだろう。もしもここでラウニーがアプローズのもとに戻れば、式は予定どおり実行すると思うか？」

「おそろくは」

「それだけの大物を招待しておいて花嫁が逃げられて、客も来ないのでアプローズの面子は丸つぶれじゃないのか？」

「式を延長すればいままでの準備が無駄になります。それよりはウィンザルフ家との結びつきを大事にすると思いますね。延長したところでそれだけの招待客が本来に来るとも限りませんし、結婚という既成事実さえ作れば、アプローズ男爵はウィンザルフ家の外戚となりますから」

「ありがとう。参考になった」

「ところであなたは自分の手配書を見たことはありますか？」

「ディアスポラから見始めたな。それがどうかしたのか？」

「あの似顔はあなたとは似ても似つかぬでたらめですが、一つだけ事実を言っています。あなたの髪の色はさすがに帝国も間違えようがなかったのでしょう。あなたがそのままマラノに来れば、手配書のことを思い出す者は少なからずいると思います。十三人会に会う前に何らかの手段を講じた方がいいでしょうね。もつともあなたが解放軍のリーダーとして堂々とマラノにいらつしやると言うのなら話は別ですが」

「そんなことをするのは時期尚早だ。解放軍の存在が知られるのは時間の問題だろうが、まだアプローズを挑発する気はない。それはそうと切るのは、嫌だな。髪型を変えては駄目か？」

「わたしは髪の色を変えた方がいいと思います。明日にでも染め粉を届けさせますよ」

「それぐらいどの商店でも買えるだろう。あなたの手を煩わせるには及ばない」

「いいえ、せっかくですからあなたに似合いそうな色を選ばせてください。あなたと別れてからわたしはずっとあなたに似合う服装を考えていたのですが、万の衣装でも足りない有様で実は自分の想像力の貧困さにほとほと頭を抱えていた次第です」

「剣を振るしか能のない私にあなたも物好きなこと

を言うな。だが解放軍にもあなたと似たようなことを言う人がいる」

「おやおや、先を越されてしまいましたか。ですが、いい傾向です。ヴォルザーク島で別れた時よりあなたの表情が柔らかくなりましたよ。良いお仲間恵まれたようですね」

「ああ、そうだな」

グランデイーナは立ち上がり、馬車の扉を開けると外に飛び降りた。

「フラヴィオまで送りますよ！」

「一人になって考えたいこともある。また明日会おう、ジャック！」

〈何でも屋〉は名残惜しそうに手を振り、馬車は速歩になって街道を南に走り去った。

彼女もいつまでもそれを見送ってはいない。来た道を即座に引き返していった。

結局、グランデイーナがフラヴィオに着いたのは辺りが夕闇に包まれ始めたころ合いだった。解放軍も到着しており、夕飯を支度する匂いが辺りに漂っている。

「グランデイーナ、全員、無事に到着しています」

「ウォーレン、ランスロット、アッシュはどこにい

る？ あなたたちに話がある」

「アッシュ殿はラウニイー殿やノルン殿と一緒にだと思えます」

「アッシュのところに行こう」

「承知しました」

間もなくアッシュは見つかったが、一緒だというラウニイーやノルンの姿は見えなかった。

「何かあったのか？」

「明日、あなたたちに会ってもらいたい人物がいる。誰かは言うまでもないという顔だな」

「トリスタン皇子であろう。この顔ぶれを見ればほかにあり得ない。マラノにおいでだったのか？」

アッシュが意外と落ち着いているので、ウォーレンもランスロットも動じたところは見せられない。

「明日の昼ごろ、トリエステで（何でも屋）のジャックのお膳立てでトリスタンに会う。あなたたちに問題がなければ話はそれだけだ」

「お会いしよう。アヴァロン島では皇子の消息も探せずじまいだったし、バーデンドルフ卿たちとの約束もある。そなたたちは良いのか？」

「覚悟はできています。それにこの戦いが終わるまで、わたしの剣は彼女に捧げられています」

アッシュが頷いてみせ、ウォーレンも同意した。

「明日はジャックが迎えに来るかもしれないが、来なかった時はトリエステに先行する。ところでラウニイーはどこにいる？」

「ノルン殿と夕食を取りに行かれた。そろそろ戻ってくると思う」

「それならば待とう」

「マラノ攻めの話はいつするんだ？」

「明日次第だ。トリスタンがいなければ話にならない。そう言えば、地理は覚えたか？」

「六つの地区の位置関係は頭に入ってるが、マラノに来るのは初めてだ。地図なしで歩けるかな？」

「描いてみる。あなたとカノープス、ここにいる二人とケビン、チェスターには地理は把握してもらいたい」

「お二人とカノープスを呼んできましょう」

ウォーレンが立ち、ランスロットが地面にマラノの地図を描く。

増築を繰り返して大きくなったマラノの町は昔のゼノビアのように整然とした町並みではない。道路は複雑に入り組んでいるし、六つの地区と言っても線引きは曖昧だ。

しかしグランディーナの手が伸びてきて、地図に加筆する。相変わらず迷いのない動きだ。マラーノの地理は彼よりもずっと鮮明に頭のなかに収めているらしい。昨日のことがあつたせいかな字は書かなかつたので、ランスロットが書き足した。

「マラーノは三重の城壁に覆われている。門はそれぞれ一ヶ所しかない。十三人会の協力が得られれば、我々は炎竜の月二四日、マラーノ各地区で蜂起し、アプローズを倒す。詳しい話は明日以降だ」

ラウニーとノルンが帰ってきたところで、グランディーナはすぐに近づいた。

「何のご用かしら？」

「あなたに断っておきたいことがある。この先、アプローズのもとに戻つてもらうかもしれない」

「何ですって?！」

持つていたパンを落つことしたのはノルンだったが、ランスロットが慌てて受け止め、ラウニーは小鍋を抱えたまま棒立ちになる。

「あなた、正気なの？ 私はあの男から逃げ出してきたのよ。私に彼と結婚しろとでも言うつもり？」

「その可能性があるというだけだ。あなたは結婚式を挙げてくれればいい。その際に奴を倒す」

ラウニーは絶句したが、それはあとの三人も同様だ。そこへウォーレンがケビン・ワルドとチェスター・モローを伴つて戻つた。二人とも旧ホーライ王国陣のなかではヨハンに次いで指導者的な役割を果たしてきた。カノープスが来たのはいちばん最後だ。

「確かに結婚式は炎竜の月二四日の予定だったわ。でも、いまさら私が戻つたところで予定どおり式をあげるはずがないじゃない。招待客にはお父さまや四天王の將軍たち、エンドラさまやガレス皇子、それに賢者ラシュデイまでいたのよ。私が戻つたからといって、そんな方々がいまからいらつしやるとは思えないわ。百歩譲つて彼が予定どおり結婚式を挙げるとしてよ」

「アプローズがあなたと結婚するのはあなたがラウニー・ウィンザルフだからだ。招待客などこの際、誰が来ようと気にはするまいし私もそんなものは期待していない。結婚式さえあげれば彼はウィンザルフ家、大將軍の外戚になる。旧ゼノビアの貴族が帝国の中枢に食い込む、その実の方が大きい」

「知つたふうな口をきかないで！」

「あいにくと私の意見じゃないが、打てる手は打つておきたい。それにこれはあくまでもそういうつもりでいるという話だ。あなたにいますぐアプローズのも

とに帰れとは言っていない」

「マラノなど力づくで落とせばいいでしょう。誰に遠慮しているの？ カストロ峡谷から道中見てきたけれど、あなたたちにマラノを攻める戦力がないとは言わせないわ。私とアプローズの結婚式を利用するなど、帝国を相手に常勝してきた解放軍にしては、ずいぶんと消極的な策ではないのかしら？」

ラウニーの手からノルンが鍋を預かる。

「マラノを落とすのにマラノを戦火に巻き込むようでは民衆の協力は得られまいし、それではこの先の戦闘がしづらくなる。帝国に比べて遙かに戦力で劣る我々には解放軍外の協力は不可欠だ。それに我々が解放軍を名乗っても帝国と同列に見られるようでは意味がない。あなたはザナドゥを攻撃する際にも同じことが言えるのか？」

「ザナドゥとマラノを一緒にしないで」

「私にとつては同じことだ。どこを攻めるにしても被害は少なく抑えたい。そうでなくては解放などという大義名分を掲げる意味がない。話はそれだけだ」

「もしもそうなたた時にはあなたたちが来る前に私がアプローズを倒してしまふかもしれないよ。それでもかまわないの？」

「いや、その時はあなたの無事を願う」

「ちよつと待つて！ あなたの参考になるかわからないけれど、私の感じたことを伝えておくわ。私がアプローズ男爵から逃げ出したのは彼が気に入らなかつたからだけではないのよ。彼に手を握られた時、ぞつとしたわ。感情的なものではなくて、もつと本質的にあの人を拒絶しないでいられなかつたの。あれがどういうものかはわからないけれど、あの人私の知らない力を持つているに違いない。アプローズ男爵が帝国の傘下に入りたがったのは賢者ラシュデイに師事するためだつたとも言われているのよ」

「ラシュデイか、心に留めておこう」

グランデイーナはそう言ったが、ノルンも含めてほかの者はいまの話は理解してなさそうだ。彼女だつてどれだけわかつているのかは怪しいが、解放軍のリーダーが社交辞令だけでそのような言葉を口にしないことはラウニーもすでに察しつつあつた。

「待たせたな。明日の話が終わつてからと思つていたが、せつかくだからあなたたちにはマラノ攻めの話を軽くしておく。その前にラウニー、あなたとノルンは席を外してくれ」

「どうしてなの？」

「アプローズの手に落ちるかもしれないあなたは何も知らない方がいい。彼には追尾石を作り出す魔術師がついている。あなたにその気がなくても自白せられないとも限らない。それと夕飯が済んだらいい、ヨハンのところで頭巾付の長衣を借りて目立たぬようにしていきい。あなたが一時でも解放軍にいたとアプローズには知られたくない」

「私はいつ、マラノに戻ればいいのかしら？」

「明日の晩以降だ」

「わかったわ。行きましよう、ノルン。」

アッシュ殿、夕食をご一緒できずにごめんなさい」

「わしのは気にされるな」

ランスロットの描いた地図は無事残っている。皆が地図の周りに集まり、腰を下ろした。

「いまも話したとおり、炎竜の月二四日にマラノでラウニイーとアプローズの結婚式がある。マラノはこの地図のとおり、六つの地区に分かれている。あなたたちに一区ずつ任せる。結婚式に乗じて一斉に蜂起し、マラノを落とす」

「マラノは二四年前には戦わずしてハイランドに降伏したはず、我々の蜂起になど、協力するだろうか？」
ケビンの意見に残りの者が頷いた。彼はランスロット

トより年上で、首都のバルハラで壊滅的な打撃を被った旧ホーライ王国騎士団の数少ない生き残りである。

「そのための結婚式と明日の用だ。他言無用だがあなたたちには伝えておこう。旧ゼノビア王国のトリスタン皇子とその連れを解放軍に迎える」

「何と、生きておいでだったのか」

「チェスターがうめくようにつぶやいた。彼は解放軍唯一の剣士長で、旧ホーライ王国剣士団の末席に連なる見習い剣士だったが、ヨハンのいちばん古い仲間の一人でもある。」

「あなた方には朗報だな。ホーライ王家の方々はバルハラでの戦の時にご生存の望みはとうに絶たれている。だが、なぜ皇子はマラノなどにおいでなのだ？」

「マラノの支配者アプローズ男爵は、元々ゼノビアの貴族です。それにポグロムの森の惨劇を引き起こした張本人でもあり、ゼノビアにとっては二重の裏切り者です。皇子には帝国以上に許し難い存在なのかもしれません」

ウォーレンの返答にケビンもチェスターも頷いた。

ポグロムの森の虐殺は広く知れ渡っているようだ。首謀者が同じゼノビアの貴族であることや、そのままゼネギネア帝国に寝返ったことなども知られる理由の一

つだろう。

「六地区の担当は決まっているのか？」

「あなた方の分担は考えたが、細かい部隊分けはまだだ。カノープスがモンビーゾ、ウォーレンがボローニヤ、チェスターがフェルラーラ、ケビンがマントーパ、アッシュにベルチェルリを任せる。私がマラノ、ランスロットは私と来い」

「てことは、今回、魔獣たちは出番なしか」

「いや、魔獣部隊はマラノの七つの衛星都市を落とす。部隊の三分の二を同行させる。誰を行かせるかは後でギルバルドと話して決める」

「しかし城壁からすぐのフェルラーラはともかく、マントーパやマラノにはどう侵入するつもりだ？」

「その話は明日以降のマラノ側との話し合いで決まる。いまはマラノの協力が得られた場合の策だ」

「得られなかった場合はどうするのだ？」

「極力そうならないよう願いたい、マラノが戦場になることは避けられまい」

「それではバルモアの二の舞ではないか。そのようなことをすれば解放軍はこの先そっぽを向かれるぞ」

「そうだ。だからこれは最悪の場合だ。マラノもそれは望むまいが話し合ってみなければ細部は詰められないのだ。」

「先ほども聞きしましたが十三人会とは何ですか？」

「マラノ市最高参事会の通称だ。マラノには王がない。マラノ市民から成る参事会の代表が最高参事会、十三人いるから十三人会と呼ばれている」

「変わった仕組みだな。十三人もいたら意見が揃うまでだって時間がかかるだろう。市長ぐらい置いとけばいいのに」

「昔のマラノには市長職もあつたそう。だが権力が集中しやすいためいまの制度に移行したらしい」

「グランディーナが立ち、ほかの者も倣う。」

「明日はトリエステに向かう。私とアッシュ、ウォーレン、ランスロットはトリスタンに会うため先行する。先導はギルバルドに任せる」

「承知した」

一行が夕食を食べに野営地の中央に戻っていく途中、剣士のナッシュと槍騎士のヴァネッサとすれ違った。

人数が増えたのでいままで一人ずつ四方に立てていた夜番を二人ずつにするようグランディーナが指示したのだ。

「グランディーナ、寝る前にちよつとだけお暇？」

「何だ、デネブ？」

「何だとは御挨拶ね。あたしとの約束、忘れちゃったの？」

「忘れるものか。だが私から騒ぎ立ててどうする？」

「いままでの沈黙を無駄にするつもりはない」

「あなたも健気なところがあるわねえ。お姉さん、もらい泣きしちゃいそう」

「あなたが泣くことじゃないと思うが」

「冷めるようなこと言わないの。それはそうとマラノが終わったら少しぐらい寄り道できるのかしら？」

「マラノの次にアラムートの城塞を落としたいが規模が大きいの、そろそろ皆も休ませたい。そのあいだなら問題ないと思う。アラムートを落とせば、東大陸の主な拠点から帝国を追い払える。だが寄り道とはどこかに行くのか？」

「んー、みんなで行く必要はないんだけど。あなただつて大勢で行つて目立ちたくないでしょ？ あなたとあたしと、ほかに腕の立つ人が二人もいてくれれば――

痛いわ、グランディーナ」

「すまない、つい」

「いいわ、許してあげる。じゃあ、マラノが済んだ

ら行くことにしましょ。そうね、アイーシャには必ず声をかけてね、あとの人選はあなたに任せるから」

「本当にいいのか、デネブ？」

「そろそろ潮時よ。解放軍がこの先も勝ち続けるにはあの人の知恵が必要だわ」

「ああ、ありがとう！」

「お礼は無事にあの人を助け出してからの方がいいんじゃないかしら？」

「それならば、ついでに一つ頼んでもいいか？」

「何かしら？ まったく、あなたもただじゃ転ばないわねえ」

その夜、解放軍のリーダーと魔女は遅くまで話し込んでいた。

翌朝、朝食の後かたづけも終わらぬうちに八頭立ての馬車解放軍の野営地を訪れたが、現れたのはジャックではなく、部下だった。

「おはようございます、グランディーナ殿。今日は主人の都合が悪く、わたしが迎えに行くよう言いつかつてまいりました」

「よろしく頼む、カラドック」

「どうぞ、馬車にお乗りください。それと主人から

こちらを預かりましたのでお渡しします。すぐに出発しますか？」

「三人は先に乗っていてくれ。私も後から行く」

それでアツシュ、ウォーレン、ランスロットの順に馬車に乗り込んだ。何事かと様子を見に来た者たちも初めて見る大きな馬車に驚いている。

いったんその場から去って戻ってきたグランディーナは小脇に地味な灰色の長衣を抱えていたが、振り返り、ギルバルドを招いた。

「あとを頼む。それと昨日、本人たちには釘を刺したがノルンとラウニーに見張りを付けておけ。二人とも決して単独行動などさせるな」

「承知しました。トリエステでお会いしましょう」扉が閉まると馬車はすぐに出発した。

そのあいだにも出発の準備は肅々と整えられ、やがてギルバルドとカノーブスを先頭に解放軍はフラヴィオを発つていた。

一方、先に馬車に乗り込んだ三人は、内部の豪華さに驚き呆れていた。本天の総天鵞絨張りの座席はいままで誰も座つたことがないような手触りだし、窓には贅沢にも硝子まではめ込んである。改めてマラーノ商人

の財力を思い知らされた感じだ。

「昨日より大きい馬車だな」

最後に乗り込んだグランディーナは空いていたカラドックの隣に座つたが、アツシュ、ウォーレン、ランスロットが並んで座つた向かいの席も、あと二人は楽に座れそうな余裕があつた。

「主人から大きい馬車で迎えに行くよう命じられたのです。皆さんに窮屈な思いをさせるなと言われまして」

「助かる」

「皆さんにお目にかかるのはこれが初めてですね。わたしはカラドック、ブリフブラといいます。ジャック、ブルーシー、ジョミニを補佐しておりますが、このたびは我が主人に危急の用が生じてしまったため、僭越ながら代理としてお迎えに上がりました」

「あなたをよこすとはジャックも抜かりがない。礼を言う」

カラドックは黙って頭を下げた。身長はウォーレンと同じくらいだが横幅がある。年齢は四〇代だろうが、商人にしては地味な印象だ。しかし、グランディーナの言い方だとジャックの部下のなかでもかなり高い地位にありそうだ。

「カラドック殿、差し支えなければトリスタン皇子についてお聞かせ願いたい。どなたと一緒においでなのか、どのような状況でジャック殿と会われたのかなどだ」

「申し訳ないのですが、わたしの知っていることはほとんどありません。トリスタン皇子はケインという若い方とヨークレイフ・ウィンガーという騎士殿と一緒です。ですが我が主人と会った時のことは存じ上げません」

「ヨークレイフがトリスタン皇子と？」

「はい。それ以上のことはご本人から直接伺いになつてください」

「承知した」

「アッシュ殿、ヨークレイフ・ウィンガー殿とはゼノビア王国騎士団に所属していた方でしょうか？」

「ウォーレンはその名前に心当たりがあるようでアッシュも領いた。」

「おそらくそのヨークレイフであろう。わしは彼もとうに処刑されたものと思っておつた。生きていたとは喜ばしいことだが、皇子の連れならば、皇子付の騎士エストラーダ・エクソンだろうと思つたのだ」

「ヨークレイフ殿とはどのような方ですか？」

「いまとなつてはゼノビア王国騎士団ただ一人の生き残りと言つてもよからう。だが少々変わった奴で、剣を振るよりも豎琴を奏でる方を好いており、陛下よりも妃殿下に可愛がられておつたと記憶している。文官にでもなれば良かったのだろうが、ウィンガー家は代々騎士の家柄、彼にとつては不幸なことであつたのかもしれぬな」

「そのような方がいらつしやつたとは存じ上げませんでした」

「従騎士だつたそなたが知らなくとも無理はない。

従騎士の訓練など進んで引き受けるような男ではなかつたからな」

話しながら、アッシュは昔を懐かしむように目を細めた。

しかし、ランスロットが覚えている騎士たちは、団長のアッシュのほかには副団長パーシバル、剣を教つたアーキストと父のリチャードぐらいである。アーキストと父はウーサーに処刑され、パーシバルはグラン王が暗殺される直前に行方不明になつている。

ふと見ると、グランディーナは外に視線をやつていて、硝子を通して見える光景は、グリフォンに騎乗した時ほどではないがかなりの速さで去つていく。

「君には退屈な話だったか？」

「そうでもない。トリスタンの人となりには私も興味があるが口を挟むことでもないから黙っていた」

「それは意外だな。君は皇子のことにはそれほど関心がないと思っていた」

「そんなことはない」

しばらく馬車の中は沈黙が支配した。グランディーナはもとよりアツシユも自分の考えに没頭したからだ。ウオーレンもランスロットも同国人でもないカラドックの前で皇子について話すことは気が進まなかった。

「もうじぎトリエステだ」

馬車に乗り込んでずいぶん経ったころ、そう言いながら、グランディーナが素早く長衣を頭からかぶった。誰が使うのか知らないが、頭巾をかぶると顔は見えず、立ち上がってもかろうじて足先がのぞくほどの長さだ。さらに彼女は靴を脱ぎ、裸足になった。

そんなことをしているうちに馬車は石畳を走るようになり、トリエステの町中に入ったことが察せられた。

「検問もなかったな」

「(何でも屋)のジャックの馬車に検問などしません。ふだんから鼻薬はたっぷり嗅がせてるんですから」

八頭立てだけあって馬車の大きさも相当なはずだが、

トリエステの通りは余裕で走れるようだ。しかし、ランスロットが外をのぞこうとするよりも早く馬車は止まり、御者が扉を開けた。

「到着しました」

「ご苦労。さあ、皆さん、どうぞ」

扉にいちばん近かったグランディーナが真っ先に降りる。さらにランスロット、ウオーレン、アツシユ、カラドックの順に降り、そこが想像していたよりこぢんまりした館の玄関先であることを知った。

「ここはシュワルツェンベルク家のお屋敷です。当主のベディヴィア殿は今度の件ではあなた方の全面的な味方です」

カラドックの先導で一同が館に入っていくと、裕福そうな男が両手を広げて出迎えた。短く刈り込んだ黒髪で、三〇歳そこそこというところだ。身長はグランディーナより少し高いがランスロットより細身である。彼女らの背後で重々しい音を立てて扉が閉まった。ここにきてグランディーナは頭巾を下ろす。

「ようこそ、解放軍の方々。わたしが当主のベディヴィアIIシュワルツェンベルクです。これからお見知りおき願います」

「十三人会のお一人のベディヴィア殿か？」

「はい。ですが今日は、ジャック殿のたつての頼みで微力ながらご協力させていただいているのです。十三人会のことはしばしお忘れ願います」

「承知した」

「それでは皆さん、こちらへどうぞ。先ほどから待ちかねておいでですよ」

「グランディーナ殿、靴はどうするのですか？」

「帰るまで預けておいてくれ」

「わかりました」

それではベデイヴィア殿、わたしはいったん引き上げさせていただきます」

「はい。ジャック殿よろしくお伝えください」

さあ、どうぞ。こちらの部屋です」

彼女らが案内されたのは一階の窓のない部屋にだった。扉が開けられると中にいた三人の人物がこちらを振り返ったが、最も年かさの中年男性は腰を浮かして、また座り直した。あとの二人は二〇代の若者だ。一人は長い豪華な金髪で、もう一人は短い赤毛である。

「それではわたしは席を外します。何かご用がありましたら、その紐を引いてください。すぐに召使いに飲み物を運ばせましょう」

「いや、呼ぶまで誰も入ってこないでくれ」

「かしこまりました。それではまた後でお目にかかります」

扉が閉まり、ベデイヴィアが去る。

その時になつて、三人は初めて立ち、金髪の若者がさらに一歩進み出たので、グランディーナも前に出た。三人のなかでは彼がいちばんの長身だ。

「初めてお目にかかる。解放軍のリーダー、グランディーナだ。あなたがフィクスⅡトリシュラムⅡゼノビア殿だな？」

「そうだ。だがわたしのことはトリスタンと呼んでもらいたい。彼らを紹介させてもらってもいいだろうか。わたしの従者ケインと騎士のヨークレイフⅡウインガーだ」

皇子の紹介を受けて、ケインとヨークレイフはそれぞれ頭を下げたが、ヨークレイフが震えているのは傍目にもはつきりとわかるほどだ。

「私の連れも紹介しておこう。皆、ゼノビア王国縁の者だ。元騎士団長アッシュⅡクラウゼン、魔法軍団所属のウォーレンⅡムーン、従騎士のランスロットⅡハミルトンだ」

「騎士団長アッシュだと?!」

皇子の顔色が変わり、アッシュがすかさず前に進み

出て片膝をついた。ヨークレイフは顔を背けたが、ケインはアッシュから視線を外さない。

「殿下は陛下殺害の罪をご存じとお見受けいたします。

ならば討たれよ。殿下に討たれるとあらば二四年間生き恥をさらした身には余る光榮、我が罪、いかな言いつても償われるものではないと心得まする」

「いい覚悟だ、アッシュ」

トリスタンの手が腰の剣に触れたが、グランディーナが止めた。

「その罪が冤罪であつても彼を斬るか？」

「どういう意味だ？」

「グランディーナ、それは！」

「皇子を得る代わりにあなたを失うわけにはいかないし、自己満足の死など私は許さない。それに真の敵が誰であるか、皇子が知つていても損にはなるまい」アッシュが首を垂れる。それでトリスタンも彼女の言葉の言外の意味を理解したようだった。

「真の敵とは誰のことだ？」

「ゼテギネア帝国のガレス、奴がグラン殺害の真犯人ということだ」

「それは本当か、アッシュ？」

彼はうなだれたが、すぐに観念したように答えた。

「はい。ガレス皇子がわしに化けて陛下を殺したと、アヴァロン島で対峙した時にそのように言われました。しかし、わしが陛下を、妃殿下やジャン皇子殿下をお守りできなかつたことも事実、どうか、殿下のお気の済むように罰してください」

「馬鹿なことを言うな。誰一人殺したわけでもないのにどうしてわたしがおまえを罰することなどできよう。わたしの方こそ、今日まで事実を知らなかつたことをすまなく思う。許してくれ、アッシュ」

トリスタン皇子は彼の手を取り、立たせた。

けれど、その時、ゼノビア王国元騎士団長の表に浮かんだのは希望などではなかつたが彼は黙つて頭を垂れ、皇子に敬意を表した。

「グランディーナ殿、あなたにも礼を言わねばなるまい。事実を教えてもらわなければ、わたしはいまもゼノビア王家に忠実な騎士団長を誤つて討つところであつた。ありがとう」

「私は事実を伝えたまで。それには私には敬称など不要に願おう」

「それではわたしのことも敬称はなしでかまわない。そしてぜひ君たち解放軍とともに戦わせてくれ」

「解放軍を代表してあなた方を歓迎する」

グランディーナが差し出した手をトリスタンは握り返した。皇子にしては無骨で大きな手だ。ここまでの道のりが平坦無事ではなかった証拠だろう。ランズロットはそう思いながら、皇子の手に見入っていた。

「だがあらかじめあなた方に断っておく。解放軍のリーダーは引き続き私が務める」

「わたしに異存はない。ケイン、ヨークレイフ、おまえたちもかまわないな？」

「皇子がそう仰せならば」

ケインの言葉にヨークレイフも頷く。

「ならば、話はひとまず済んだ。私はトリスタンにまだ話がある。あなたたちは適当に過ごせ」

グランディーナがトリスタンを連れて、部屋の間を引つ込む。しかし、皇子を連れていかれてはウォーレンもランズロットもどこから話を切り出したら良いのかわからない。ケインも案ずるように皇子の方を見つめるなか、アッシュユがヨークレイフに話しかけた。

「久しぶりだな、ヨークレイフ。ウィングァー。殿下とともにいるとは思わなんだ。なぜそなたが殿下とともにいるのか、ぜひ聞かせてはもらえないか」

「団長が牢に囚われておいでと知りながら、何もできなかつたこと、どうかお許しください！ この身は

無事でありながら、真相を知ろうともせず、わたしはただ酒に溺れるばかりでした」

彼はとうとうアッシュユの前に平伏した。だが対峙するアッシュユの顔は穏やかだ。彼はヨークレイフの肩に手を置き、静かに話し続けた。

「顔を上げよ、ヨークレイフ。わしはそなたを責めているのではない。そなたも聞いておったように騎士道を買けなんだわしに誰を責める権利があるのか。だがわしは、二四年間生死も存じ上げなかつたトリスタン皇子がどのように過ごされ、御身の素性を知られたのか知りたいだけなのだ。教えてはもらえぬか？」

「アッシュユ殿、トリスタン皇子のことならばわたしがお話ししましょう。アッシュユ殿はきつとエストラーダ。エクソンさまの行方もお知りになりたいのではありますまいか。この二四年間、わたしはトリスタン皇子と一緒におりました。アッシュユ殿のお知りになりましたことにはほとんどお答えできると思います」

口を挟んだケインにアッシュユは鋭い眼差しを向ける。だが彼やヨークレイフよりも頭半分ほど低い瘦せた若者は、それにも動じた様子はなかつた。トリスタン皇子とともに相当な修羅場をくぐってきたものと思われる。

「そなたは何者だ？ エストラダの名も知るとはただ者ではあるまい」

「いいえ、残念ながら、わたしはエストラダさまにトリスタン皇子とともに育てていただいた、ただの戦災孤児です」

「やはりエストラダは殿下と一緒にあったのか！ だが、そなたが戦災孤児とはどういうことだ？」

「わたしも残念ながらそれ以上、自分の素性は知りません。トリスタン皇子とわたしはエストラダさまとバーニヤさまに育てられました、トリスタン皇子が十六歳の時、エストラダさまに従って義勇軍を結成し、近隣の盗賊退治に乗り出したのです——」

ケインの話はアッシュたちには驚くべきことだった。トリスタン皇子付の騎士であったエストラダⅡエクスンは、グラン王がアッシュの姿を借りたガレス皇子に暗殺された直後、皇子の乳母バーニヤとともにゼノビア城を脱出し、ヴォルザーク島よりさらに東の、ゼノビア王国の属国であったリヒトフロス王国に逃れ、そこで途中で拾った戦災孤児のケインとともに皇子を育てた。もちろん皇子の素性は隠し、近隣の盗賊退治に義勇軍を結成した時もリーダーを務めたのはエストラダであった。

しかし、盗賊たちを影から操っていた妖術師ジェンガにエストラダが死の呪いをかけられた時、騎士は亡くなった。彼の遺言でバーニヤの待つエストラ村に戻った二人は、神聖ゼテギネア帝国の追っ手がこの地にも及んできたため、彼女がトリスタン宛の手紙だけを残して行方をくらましたことを知る。そこにはトリスタンがゼノビア王国の皇子であることなどが書かれていた。トリスタン自身はもちろんケインも驚いたがこの事実は二人のほかにはただリヒトフロス国王だけに知らされた。

けれどもリヒトフロス王国の争乱はジェンガの死とともに収まらなかった。トリスタン皇子は義勇軍の新たなリーダーとなり、エストラダの死から三年後、ジェンガさえも操っていた真の黒幕である闇の騎士バルドルとの戦いに挑んだ。新しい仲間との出会いと別れ、うち続く困難な戦いを乗り越えた義勇軍は、最後にはバルドルを倒し、一帯に平和を取り戻すことができたのであった。

騎士ヨークレイフとはそのバルドルとの戦いの最中に出会い、旧ゼノビア王国の名軍師として名をはせたグラントⅡオフトマインも皇子とともに行動していたが、彼は昨年亡くなったということであった。

グラン王の死より数年前に引退したグラントはともかく、現役の騎士だったヨークレイフが、属国とはいえ、なぜひトフロス王国にいたのかとアッシュに問われると、彼はしよげかえった様子でこう答えた。

「あの日、わたしは自宅におりました。団長が陛下を暗殺し、ラッシュデイがその場にいた来賓の方々をも殺したことを聞いて、恐ろしくなつて逃げ出したのです。ゼテギネア帝国の手はすぐにシヤロームの辺境にまで及び、リヒトフロスまで逃げなければ安全な地などありませんでした。お許しください、団長。わたしは戦わずに逃げ出した騎士です。騎士道に背き、祖国に背き、わたしはただ一人だけ生き延びることを考えたのです。殿下に従つてゼテギネアに戻つてくれれば、知った顔と再会することも承知していましたが、殿下は臆病さから酒に逃げていたわたしを必要としてくださいました。その恩義にまで背くわけにはいかなかったのです」

「わしにそなたを責める権利はないのだ。それよりも、七年間殿下を支えてきてくれたこと、礼を言う。牢に繋がれ、生き恥をさらし、陛下のためにも妃殿下のためにも、お二人の皇子殿下のためにも何もできなかったわしに比べ、そなたは殿下と巡り会い、立派に

騎士としての役割を果たしたではないか」

「しかし、団長」

「それにわしはもう団長ではない。解放軍に加わった時から、わしは一介の戦士となつたのだ。わしとそなたとは対等なのだ」

アッシュの言葉にヨークレイフは人目をはばかりことなく涙をこぼした。アッシュの手を握り、感極まつた様子は、彼の上にも等しく流れた二四年という歳月の長さを思わせる。

そのあいだにケインが手慣れた様子で皆に杯を渡す。シュワルツエンベルク家の召使いが持つてきた飲み物が、話に熱中するあまりそのまま放置されていたのだ。しかし、二人きりで話すグランディーナとトリスタンの方はまだ終わりそうになく、ケインが杯を手に近づこうとすると、グランディーナに追い払われた。彼は不快さを顔に出したが、強行突破は試みなかった。

長い昔話が済めば、彼らは皆、旧ゼノビア王国縁の者同士だ。戦災孤児だというケインでさえ、エストラーダを介してゼノビア騎士団に縁があるし、ゼノビアからの逃亡路を考えれば、ゼノビア王国の者であることは疑いようもない。アッシュ、ウォーレン、ヨークレイフはさらにうち解けた様子で話が弾んでいた。

ケイン一人だけがグランデイナーとトリスタンの方を睨んでいる。

「ケイン、君は皇子の幼なじみなのだろう？」

「僭越ながらそのようなことになりましたが、わたしはそういう考えは捨てました」

「なぜだね？」

ケインは少しうさがるようにランスロットを見たが、話をやめることはしなかった。

「バーニヤさまの手紙にはトリスタンが、ゼノビア王国の第二皇子、フィクスⅡトリシュラムⅡゼノビアさまであることが綴られ、ゼノビアの民を救えるのはトリスタン皇子以外にないと結ばれていました。わたしたちがとても驚いたのは言うまでもありません。ゼテギネア帝国のなす恐怖政治はリヒトフロス王国にまで伝わってきていましたが、自分たちがその関係者だとは誰も想像してみませんかね」

「バーニヤ殿にはゼノビア城の近くにあるカルロバツという村でお会いしたよ。ほかにゼノビアの貴族だった方々がご一緒でお元氣だった」

「皇子が知られたらお喜びになるでしょう。十年以上もお会いしていませんから」

だが復興なりつつあるゼノビアで、バーニヤを初め

とする貴族たちはやはりカルロバツに隠れたままなのだろう。トリスタン皇子がゼノビアに凱旋すれば我先にと出迎えもするだろうが、それまでは自らの手を汚すこともなく過ごしているに違いない。そんな彼女らが貴族というだけで特権を得られる時代に戻るのは解放軍の主立った者が違和感を覚えていることを、トリスタン皇子はどう受け止めるのだろうか。

「ランスロットさま、どうされましたか？」

「すまない。何の話をしていたのだったかな？」

「バーニヤさまのご無事を伝えていただきました。それとわたし自身のことを」

「そうだった。そのバーニヤ殿からの手紙のなかに君のことは書いてなかったのか？」

「ええ。当たり前でしょう？ わたしは氏索性も知らない戦災孤児です。お二人はトリスタン皇子同様にわたしのことも可愛がつてくださいましたが、何も知らない子どもの時ならばいざ知らず、トリスタンさまはもう、いまは亡きゼノビア王国の皇子なのです。その時から、わたしはトリスタン皇子を支えていかなければならないと思っただけです」

「わたしからも君に礼を言わせてくれ。そしてこれからもトリスタン皇子のことを頼む」

「それがわたしの役割です。ですが、あなた方はなぜ、あのような振る舞いを許しているのですか？」

「彼女はどこの国にも属さぬ者だ。いままで誰かを特別扱ったことがない。解放軍には旧ゼノビア王国以外の者も大勢いる。中立を守りたいのだろう」

「ですが、そのなかにほかの四王国の王家の方はいないのでしょう？ トリスタン皇子を一般市民と同列に扱うのはわたしは賛成できません」

「その話をしていられるのかもしれない。あちらの話が終わったら彼女に話してみてくれ」

「君のような女性が解放軍のリーダーだとは思わなかった。まずはわたしたちを受け入れてくれたこと、王都ゼノビアを解放してくれたこと、改めて礼を言う。それでわたしに話とは何だろうか？」

「ゼテギネア帝国を倒した後のことだ。あなたに国の再興を引き受けてもらいたい」

「それはまたずいぶんと先の話だな。もちろん、君に言われるまでもなくわたしの願いはゼノビア王国の再興にほかならない。だがそれならばなぜ、君が引き続き解放軍のリーダーをやるつもりなのか教えてくれ。わたしに国の再興をしろとはまさか旧ゼノビア王国領

だけの話ではあるまい？」

「結成後しばらくは私以外の者は皆、ゼノビアの者だったが、解放軍の半数以上はすでにそうではないし、これからドヌーブやオファイス、最終的にはハイランドにまで攻め上がろうというのにゼノビアの旗を掲げられたままでは都合が悪い。あなたがどう聞かされたのかは知らないが、グランの血を引くあなたが前面に立てば、拒絶反応を示す者も大勢いるだろう」

「あいにくとわたしは父のことは覚えていないし、グラン王について聞かされたのは君も知っているような五英雄の一人である剣士グランとか、ゼノビア王国を興した神帝についてだ。わたしがグラン王の権威を笠に着ることは万が一にもないと思うが、そこまで考えているのならリーダーの件は無理にとは言わない」

「無理にと言われても譲る気はない。私が始めた戦争だ。最後まで私が責任を取る、あなたがしやしやり出してくることはない。もちろんあなたに治めてもらいたいのはゼテギネア全土だ。エンドラとガレスを除けば、旧四王国の王家で生き残っているのはあなた一人、攻め手としては敬遠されても、統治者となれば、グランの血筋がものを言う。帝国を滅ぼした後の王位にはあなたが就いてもらいたい」

「その時、君はどうするつもりだ？」

「私は戦争屋だ。帝国を倒せば私など不要になる。」

へたに私を祭り上げようという動きが出る前に姿を消す。あなたの王位を脅かす気はない。案ずるな」

「だが君は最後まで解放軍のリーダーなのだろう。いくらわたしがゼノビアの皇子でも逆にわたしが王位に就くことを嫌がる者はきつというはずだ。だが君ならば、解放軍を率いてゼテギネア帝国と戦った君ならば、誰もが納得する王になれるじゃないか」

「だから私は姿を消すのだ。端から王になどなるつもりはない。帝国を倒した後で、あなたと王位を争う羽目になるのはまつぴらごめんだ」

「わたしとしても王位に就く競争者が減ることは望ましいが、王になつて何をしろと言うのだ？」

「マラーノを攻めるのにマラーノ市最高参事会の力を借りたい。この屋敷のベデイヴィアⅡシュワルツェンベルクもその一人、通称十三人会の一員だ。その時にあなたに同行してほしい。マラーノは二四年前の戦争の時も戦火を避けて帝国に降伏した。彼らを説得できそうな策を立てたが、十三人会の連中を引っ張り出すのあなたが必要だ」

「だが、マラーノはホーライ王国にも、神帝グランに

も従わなかつた自治都市のはずだ。わたしが行つても逆効果ではないのか？」

「だから十三人会に約束してくれ。ゼテギネア帝国を倒したあかつきには、マラーノの自治を取り戻すと。それはあなた以外にはできないことだ」

「もしもだが、わたしが嫌だと言つたらマラーノはどうなる？ マラーノはゼテギネアでも最大の貿易都市だ。ここに落ちる金は旧ゼノビア王国の集めた税金よりも多いだろう。そのうまみを逃す手はあるまい？」

「おそらく十三人会の協力は得られまい。だがマラーノを、アプローズをこのままにしておくつもりはない。こちらの独断でマラーノを攻める。最悪の場合はマラーノ全土が灰燼かいじんに帰すだろう」

「だが、そんなことをすれば、君がリーダーだろうとわたしがリーダーになろうと、この先、民衆の協力は得られなくなる」

「そうなれば、力で抑えつけてでも協力させる。あなたの回答によることを忘れるな」

「安心してくれ、グランディーナ。マラーノの領主がアプローズ男爵だと聞いた時からわたしの気持ちは決まっている。君にどのような作戦があるのかは知らないが、わたしにできる協力は惜しまないつもりだ」

「してもらわねば困る。私だつてマラノに限らず、どの国も戦火に巻き込むようなことはできるだけしたくない」

「それを聞いて安心したよ。解放軍のリーダーは元傭兵の戦争屋だと聞いたから、どんな女丈夫かと思つていたんだ」

「だがいまの予定では一人だけ危険を冒してもらわなければならぬ者がいる」

「誰だ、それは？」

「元ゼテギネア帝国聖騎士ラウニイー＝ウィンザルフ、帝国大將軍ヒカシューの一人娘だ」

「なぜ、彼女にそのような真似をさせるんだ？」

「炎竜の月二四日にラウニイーとアプローズの結婚式が予定されている。彼女をいったん保護したがアプローズの元に戻すかもしれない。我々はその際にマラノ各地で一斉に蜂起する。ラウニイーと十三人会、どちらの協力が欠けても成り立たない」

「大將軍の娘ならば、ラシュディやエンドラが来るのじゃないのか？」

「私も期待したが、ラウニイーは一度アプローズのもとを逃げ出しているし、結婚式の六日前に戻つていないのであれば大物は来るまい。そうと知つていれば、

カストロ峡谷でラウニイーを助けなかつたんだが、そうもいなくなつた。だが、私はラウニイーを戻せば、アプローズは結婚式を挙げるだろうと聞いている。ヒカシューらにはいざれ会えるはずだ。来る当てもない者を待つよりも目の前のマラノとアプローズのことを片づけたい」

「なるほど。ほかにわたしのできることはあるか？ もちろんマラノが終わつてからのことでもかまわないのだが」

「マラノを落としたら皆を休ませるが、私は野暮用で十日ぐらい本隊を離れる。あなたが旧ゼノビア王国の者と交流を深めるのは勝手だが、あまり目立たないようにしてしてくれ」

「わかつている。ところで、そろそろアッシュたちと話してもいいかな？」

「かまわない。先ほどからあなたの従者に睨まれてる」

「ケインはわたしの幼なじみだ。わたしが物心つく前からずっと一緒にいる。エストラーダが殺された時も、一緒だった。彼に言わせるとわたしはゼノビア王国の皇子だという自覚がなさすぎるのだそうだ」

端から見ているとグランディーナとトリスタンの話はごく穏やかに進んでいるように見えた。皇子は時々笑いさえたし、二人とも声は荒げなかったからだ。

皇子が長い話からやつと解放され、グランディーナも立ち上がると、ケインは素早く彼女に近づいた。

「話をしてもいいですか？」

「あなた方が解放軍に合流してからなら時間があるだろう。その時でよければつき合う」

「わかりました」

しかし、部屋を出て行きかけて、彼女は振り返った。

「ケイン、あなたは魔法を使えるのか？」

「たしなむ程度には使えますが、系統立てて魔法を学んだことはありません。なぜそう思ったのです？」

「勘だ。ウォーレンにどれほどの力か見てもらえ。」

マラーノを攻めるのに魔術師が足りない」

ケインは驚いたようにウォーレンを振り返った。

「我々もマラーノ攻めの細部までは知らされていないのです。ですが、あなたの力を見ることはできません。いかがいたしますか？」

「かまいません。お願いします」

戸惑う二人を残して、グランディーナは部屋を出て行っていた。

トリスタン皇子を中心に話が弾んでいるところにグランディーナが戻ってきたのは、そう時間も経たないうちにだった。

「トリスタン、あなたたちは知らせがあるまでこの館を出るな」

「君はどうするんだ？」

「私とランスロットはあなたたちより先にこの館を出る。ウォーレンとアッシュもここに残れ」

「武器は持つていくのか？」

「そうだ」

彼女は持つてきた長衣を手にしてさえない。髪を染めてもいなので堂々とトリエステの町中を歩くつもりらしく、しかも裸足のままだ。

「すみません、トリスタン皇子。そのようなわけでわたしは彼女とともにを先に発ちます。また後で話をお聞かせください」

「なぜ二人だけで出るのだ？」

「あなた方に話してもしょうがない。行くぞ」

二人が出ていくのをトリスタンは呆気にとられて見送り、説明を求めるようにウォーレンとアッシュを振り返った。

「彼女は影を使いますが、多くの場合は一人で会うのです。単独行動もよく取りたがりですが、ランスロットがついていくことが多いのです」

「ランスロットハハミルトンはゼノビアの騎士ではなかったのか？」

これに答えたのはアッシュだ。

「ランスロットはいまはあの者の騎士だからです」

元騎士団長はそれで説明が済んだものと思っただけだが、トリスタンは不可解そうな顔のままだった。

シュワルツエンベルク家の裏口から出ると、グランデイーナは足早に北門を指した。町中が騒然としている。トリスタン皇子たちのいた部屋には窓がなかったし館自体が高い壁で囲われて外の喧嘩からは遠ざけられている。気づかなかったのも無理はないのだろうがランスロットは驚いた。

「何が起きてるんだろ？ ベデイヴィア殿や召使いから何も聞いていないか？」

「聞いていたがトリスタンたちには黙っていた。ギバルドたちがトリエステ駐在の帝国軍と戦闘になっている」

「なぜ皇子たちに言わなかったんだ？」

「トリスタンに解放軍だと出しゃばられては都合が悪い。戦端を開いたことを知られれば参戦したがるかもしれないから黙っていた。こつちだ」

「馬車の中にいたのに、よく道がわかるな」

「トリエステに入ってから一回曲がっただけだ。複雑な道ではなかったろう」

「なるほど。だが解せないな。皇子が解放軍にいると知られて都合が悪いのはなぜだ？ 旧ゼノビア王国の旗を忌避したのは別の理由なのだろうか？」

「あなたに話すべきことではあるまい」

二人の頭上をコカトリスに乗ったニコラスたちが通りすぎたが、アイギスを操っていたカリナがこちらに気づいて声をかけた。

「こんなところで何してるんすか？ 北門の戦闘はあらかた終わってるはずですよ！」

二頭のコカトリスが通りに降り、カリナとニコラス、魔法使いのヴェルナーとエラトーも降りてくる。

「ずいぶん手際がいいんだな」

「そりゃあ、団長が指揮してますからね。もつとも大将がいうには敵さんの守りも甘いらしいです」

「ギバルドたちはどこにいる？」

「北門です。我々もこれから戻るところでしたが、

乗っていかれますか？」

「コカトリスに三人はきついでらう。私たちは歩いて戻る。トリエステの様子も見ておきたい」

「それではお二人が戻ることを皆に伝えておきましよう」

コカトリスはすぐに飛び立ち、グランディーナたちも表通りに出る。

「町中ではとても戦闘があつたようには思えないな。いくら領主の結婚式が近いからといって警戒心が薄すぎると思わないか？」

「罠を仕掛けたのだとしたらずいぶん露骨だが、こちらが攻める気である以上、アプローズにとつて無駄にはなるまい」

「だがいまのマラノに集まっているのは解放軍だけじゃない。あまり言いたくはないがラウニー殿とアプローズの結婚式を見に来ている者もいるのだろう？　そういう者まで罠にかけるつもりだろうか？」

「同じ国の人間をポグロムの森で焼き討ちするような男だ。招待もしていない客のことなど頭の片隅にもあるまい。本当に罠が仕掛けてあれば、ポグロムの二の舞もあるかもしれないな」

「トリスタン皇子をお迎えしたというのにそんなこ

とをさせられるものか」

しかしグランディーナは答えず、北門にいる解放軍のなかに入っていく。ギルバルドとカノープスはその中心にいてマチルダから怪我人の報告を受けているところだった。

「グランディーナ、アラデイが戻っています。トリエステの郊外でお待ちしているとのことでした」

「わかった。あなたたちの方は大事ないか？」

「怪我人はガーディナーさんとシルキイさん、それにオパールさんだけです」

「それならばアラデイの話の先に聞いてくる。

ランスロット、あなたはオーサを連れてトリスタンたちを迎えに行ってくれ。ベデイヴィアにはオーサの名を出さなければトリスタンには会わせないように言つてある」

「わかった」

「オーサなら門の外にいるはずだ」

「ありがとう」

トリエステを出てさらに街道を外れたところでグランディーナはアラデイを見つけた。

「待たせたな、アラデイ」

「待つのは慣れていきます。ですが、一つ、悪い報告です。ブルースが殺されました。彼の最後の報告では、アプローズ男爵の配下に魔術師がいてマラノ全体に大がかりな罠を仕掛けています。おそらく、解放軍のほかに結婚式の客が大勢が来ていることも承知の上だと思われます」

彼はそこで言葉を切って、グランディーナの顔色を伺ったが、アヴァロン島の時のような変化は見られなかった。

「ブルースの死体はどうした？」

「マラノ市内のロシュフォル教会に引き取ってもらいました。ほかに適当な場所も思いつかなかったのですが、わたしの顔も割れてしまったかもしれません」

「わかった。いったん全員引き上げろ。魔法の罠ならばあなたたちでは調べられまい。ブルースが殺された。あなたたちまでこれ以上危険を冒すことはない」

「ですが、どのような罠が仕掛けてあるか、調べなければならぬではありませんか？」

「そうだ。だが迂闊(うかつ)だった、アプローズがポグロムの森を焼き払ったことを軽く見ていた。ただの火であれほど大きな森を一晚で焼けるはずがない。ゼノビア時代からお抱えの魔術師がいて、そいつがポグロムの

森も今度の罠にも関係しているのに違いはない。ただ、それがどんな罠か、あなたたちではわからないだろう。だからいったん帰ってこい。魔法のことならば、魔術師たちがいる。彼らに訊いてから罠について調べた方が効率がいい」

「わたしの力が及ばず、申し訳ありません」

「あなたが謝ることではあるまい。魔法の罠など予想もしてなかったし、それ以外の危険を承知であなたたちをマラノに送り込んだのは私だ」

「それではわたしは四人を連れてきます」

「気をつけていけ」

アラディは南に走り去った。しかし彼が去つてもグランディーナの岩のような表情は動かぬままだ。

やがて彼女は思い出したように野営地に戻った。

「デネブ、頼んでいた物はできたか？」

「あなたも無茶苦茶言ってくれるわよねえ。こんな自分の研究室でも何でもないとこで魔法の護符を作れなんて言うんだから、人使いが荒いものにもほどがあるわよ」

「ウォーレンたちでは難しいだろうがあなたならできるとお思ったから頼んだ。それに先日ラロシェ

ルで買い物させたのはパンプキンヘッドの強化のためだけじゃない」

「あら、そういう言い方をするのならあたしは解放軍のお金は一ゴートも使っていないわよ。確かにあなたの言うようにいろいろと買い物もしたけれどね。だけど、あなた相手に大人げないこと言うのもおもしろくないからここはあたしが折れておいてあげるわ。夜まで待つてちょうだい。それでいいかしら？」

「わかった。無理を言つてすまない」

「しおらしいこと言わないの。どこか悪いのか心配になるじゃないの」

「そんなことはない。グレッグと話があるから、そちらが終わつたら来てくれ」

「そんなに長いのか？」

「皆の命がかかっている。場合によっては徹夜だし、魔術師は全員集める」

「ずいぶんと深刻そうな話ねえ。でも睡眠不足は美容の大敵よ。そんなに遅い時間にあたしが行くなんて期待しないでね」

トリエステの北門を占拠した解放軍はそのまま町の外に野営地を設置した。人数が増えると野営地の広さ

も単純に倍というわけにはいかなくなる。カストロ峽谷までは大した問題にはならなかったが、マラノへ近づくとつれてだんだんと設置する場所を選ばなければならぬようになっていた。

もはや解放軍の規模は安易に宿舎などを借りられるようなものではなくなっているのである。逆に野営地は人海戦術で素早く広げられるという利点があった。

野営地を設置する慌ただしさを脇にグランディーナはギルバルドから報告を聞いた。同席したカノープスと口を揃えたのはトリエステの守りの薄さで、いくらか結婚式を控えているとはいえ、ギルバルドはゼノビア時代のアプローズを引き合いに出して不審を口にする。

「これは何か裏を感じます。アプローズ男爵という人物は領主として残酷なところはありましたが愚か者ではありません。自分の結婚式を控えているからといって浮かれているとも思えないのです」

「じゃあ、何だ、奴はボグロムを再現しようとしているとでも言うのか？」

「それもその場しのぎではなく、用意周到な罠を仕掛けているだろうということだ。あるいはこちらの考えすぎで単に衛星都市の守りはそれほど重視していないということかもしれない」

「畏があるのはあなたの推測どおりだがそれがどんなものかわかっていない。これから魔術師たちと話し合うが、あなたたちは予定どおりほかの六都市を落とせ。アプローズが単に衛星都市を重視していないというのならそれもけっこう」

「わかりました」

グランディーナは急ぎ足でその場を去った。

「カノープス、明日以後の話をするからライアンを捜しに行こう」

「上の奴のがよく働くのは解放軍じゃあ常識になりつつあるねえ」

「自ら動かぬ者にはついていけないのがおぬしの信念ではなかったのか？」

「だから、俺がおまえと同じ立場に立たされたら同じだけ働かなきゃならねえだろうが？ ライアンを呼びつけるとかほどほどにしといてくれねえか？」

「期待しているぞ」

滅多に笑わぬギルバルドが声さえあげたので、近くにいた者は何事かと振り返ったほどだった。

トリスタン皇子一行がジャックの馬車で送られてきたのは、夕方になってからだ。辺りはかなり暗くなり、

例によって夕餉ゆづの煙が野営地には漂っている。

「殿下、大したもてなしもできませんが、どうぞこちらへいらしてください」

「君は？」

「マチルダⅡエクスラインと申します。解放軍では主に治療部隊を預らせていただいております」

「それは頼もしいな、マチルダ。万が一の時にはよろしく頼むよ」

「はい」

アッシュ、ヨークレイフ、ランスロットはそのままマチルダとトリスタンについていったが、ウォーレンを見かけるとマチルダの影にいたアイーシャが急いで声をかけた。

「ウォーレンさま、グランディーナが、来たらケインさまと一緒にグレッグさまのところに来てくれて言つてましたので行つてくださるようお願いします」

「グレッグはどこですか、アイーシャ？」

「ここから行つたら、いちばん奥です。マクレディさま、ゼルさまもお待ちです」

ケインはさも不満そうな顔をしていたが、ウォーレンに促されてしぶしぶついていく。

「ジャックさまにはこちらでお待ちくださるよう、

グランディーナが言っておりました」

「可愛らしいお嬢さん、ご丁寧なお迎えを痛み入ります。あなたも解放軍の一員なのですか？」

話しかけながら、ジャックの手がアイーシャの手を取り、素早く口づける。

「はい。私などまだまだ若輩者にすぎませんが、できることをさせてただいております」

「若いのにしっかりと娘さんだ。お名前を伺ってもよろしいですか？」

「私はアイーシャ・クヌーデルといいます」

「それはそれは。お母上のことではご愁傷様でした。ここであなたとお会いしたのも何かの巡り合わせでしょう。フォーリスさまの死を悼んで、大陸全土のロシユフォル教会に寄付をさせていただきますよ」

「ありがとうございます、ジャックさま」

彼女は一瞬ためらい、言葉を続ける。

「あなたに聖なる父の祝福がありますように」

「ありがとう、アイーシャ殿。あなたとお会いできたことはささやかな喜びとなりましょう」

「ジャック、待たせたな」

「いいえ。あなたをお待たせする罪悪感に比べたら、わたしが待たされるなど些細なことにすぎません」

「私があなたに待たされたことなどなかったと思うが、まあいい。それで十三人会の方はどうだった？」

「その話はわたしの馬車の中でいたしましょう」

「わかった。アイーシャ、ありがとう」

「どういたしまして」

二人が馬車に乗ると、すぐに動き出した。並足でゆつくりと北、つまりフラヴィオ方面に向かっている。

「まず反対者が四人出ました。マラノを戦火に巻き込むはどうしても嫌だと仰つて、あなたの策には乗れないそうです。ブラスティアス・サンシル殿、カドル・ヴィトゲンシュタイン殿、ウリエン・ランヌ殿、ブラモア・ド・ガニス・スール殿です」

「賛成してくれた者は出たのか？」

「こちらも四人いまして、ルーカン・ベルナドット殿、ラモラック・ノルレンドルフ殿、ベディヴィア殿、バリン・ダヴー殿です」

「あとの五人は？」

「様子見、というところでしょう。ですが、皆さんに明日の夜、集まっていただけで説得できました。トリスタン皇子にはおいで願えるのでしようね」

「もちろんだ。ところで、ベディヴィアは除いてもいいだろう。何人がアプローチとつるんでいる？」

「それはベデイヴィア殿も入れて全員と言つてもいいでしょう。アプローズ男爵に鼻薬を嗅がせているのは十三人会の方針ですから」

「そうじゃない。十三人会のなかに積極的にアプローズに協力している者がいるはずだ。マラノの自治より自分の地位を上げることには興味のない者、帝国と結びついた方が得だと考えている者がいる。それが誰かと訊いているんだ」

「それはわたしにもわかりません。ですが、ここまであなた方が迫っている以上、アプローズ男爵だけに荷担するのは危険だと思えます。商人とはどちらにいった方が得か、いつでも考えているものですがねえ」

「アプローズには切り札がある。我々を一網打尽にできる罠があるのならば、損得を判断する天秤がアプローズに大きく傾いても不思議はあるまい。だがその当人はまさか自分もアプローズの罠の対象だとは思つてもいないだろうがな」

「何ですか、その切り札というのは？」

「あなたはポグロムの森を知っているか？」

「ええ、アプローズ男爵の引き起こした忌まわしい事件ですね。まさか、マラノでそれと同じことをしようとしているのですか？」

「私も魔法のことは詳しくないのでよくわからないが、今度はポグロムの森の比ではないだろう」

さすがのジャックも息を呑んだようだ。

「そのことを言えば、アプローズ男爵についた者が考えを改められると思えますか？」

「さあ、商人の考えは私にはわからない。だが、その罠が発動すれば、危ないのは我々も同じだ。それを阻止する方法を考えているところだ」

「本当にそんな罠が仕掛けられているのですか？」

「影が一人、命がけで伝えた情報だ。嘘とは考えたくないし、アプローズには罠を仕掛ける十分な時間があった。だがそれでポグロムの森で感じた疑問が解けた。サタンを召還できるほどの賢者が森を焼く炎を止められなかったと言ったのだ。ただの炎ではなかつたに違いない。今度の罠はマラノを灰燼に帰すだろう。わからないのはアプローズがなぜそれほど危険を冒すのかということだ。たとえ我々を掃討するためとはいえマラノと引き替えにするほどの規模だとは思えない。かといって半端な攻撃では効果がないだろうし、マラノを失えば奴の地位が失墜するのは目に見えているが、こればかりは本人に確認しなければわからないかもしれない」

ジャックが立ち上がり、扉を開けた。

「トリエステに戻りなさい！」

馬車が止まり、反転する。今度は速歩で走り出した。

「グランディーナ、このまま、トリスタン皇子と一緒にマラノまで来ていただけませんか？」

「トリスタンは連れていってもいいが、私は駄目だ。まだすることが残っている」

「それでは明日の晩、陽の沈むころまでにお二人でフェルラーラのロシュフォル教会まで来てください。

十三人会とわたしはそこでお待ちしています」

「わかった」

往きは並足、帰りは速歩のため、馬車はすぐに野営地に着き、グランディーナが降りると即座に発った。

トリスタン皇子の周りにはアッシュやヨークレイフを初めとして大勢の者が集まっている。ランスロット

も今日は珍しく雑用をしないで済んだ。

グランディーナはトリスタンだけを呼びつけた。

「明日は私とあなたはフェルラーラへ行く。十三人会と話し合いだ」

「忙しそうだが、何か手伝おうか？」

「あなたに手伝ってもらうことはない。皆と話し込むのは勝手だが、明日の話し合いであなたに寝ぼけ眼

でいられては困る。それだけだ」

言いながらグランディーナはもう背を向けている。

「わたしも柔ではないつもりだが、気をつけよう」

トリスタンは笑って答えたが、彼女が立ち去るとバーンズが憤慨して誰にもなく言った。

「皇子に対して何て態度だ。彼女は礼儀というものを知らなさすぎる」

「でも彼女が誰にでもあのような話し方をするのはいまに始まったことではありませんし、敬称をつけて呼ぶこともほとんどありません。私が覚えている限り

では彼女が敬称をつけたのは、ロシュフォル教会の大神父フォーリスさまだけですわ」

「彼女はフォーリス殿のことを知っているのか？」

トリスタンの問いにマチルダは頷いて続けた。

「かなり親しかったようなのですが、自分のことは話したがりないので事情はわかりません」

「フォーリス殿はガレス皇子に殺されたそうだな？

わたしがアヴァロン島を離れてすぐだったとか」

「私たちがアヴァロン島に着いた時にはもう手遅れでした。ガレス皇子は倒しましたが、フォーリスさまはお戻りにはなりません。でも解放軍にはフォーリスさまのお嬢さまがいらっしゃいますわ、殿下」

「それは本当か？ 会わせてくれないか？」

「かしこまりました」

先に立ったマチルダにトリスタン皇子だけでなく、アッシュやヨークレイフ、ランスロット、バーンズまでついていき、一同はぞろぞろと動いたが、これには遠慮した者も少なくなかった。

だが、実はマチルダが夕食後のアイーシャの行動を知らなかったので、野営地の中を練り歩くことになり、見つけた時には彼女はデネブの隣で何やら熱心に書き物をしているところだ。

もちろん、二人だけではない。グランディーナのほかにウォーレンやケイン、グレッグ、マクレディ、ゼルがいる。

「何の用だ？」

「トリスタン皇子がアイーシャさんに会いたいと仰せでしたので、探していたのです」

アイーシャは書き物の手を止め、さも驚いたように顔を上げた。彼女は立ち上がってトリスタンに近づくと、

「初めてお目にかかります、トリスタン皇子。私がアイーシャです。どのようなご用事ででしょうか？」

「わたしはマラノに来る前にあなたの母上にお会いして励ましていただいたことがある。この戦いが終わ

り、ゼノビア王国の復興という大願がかなったら、フォォリス殿にもう一度会ってお礼を言いたいと思っていたが、まさかあのような亡くなり方をするとは思わなかったのだ。娘のあなたが解放軍にいると聞いたので、お悔やみの言葉を伝えたくった」

「ありがとうございます、トリスタン皇子。大願の成就をお祈りいたします」

「ありがとう、アイーシャ」

トリスタンは微笑んで、彼女が書き物に戻ったのを見送るとその場の面々をひととおり見渡した。彼にはグランディーナに、ウォーレン、アイーシャ、ケインしかわからない。

「君たちは何をしているんだ？ わたしがいては邪魔かな？」

「口を挟まないのならあなたたちがいてもかまわないが、ただの好奇心で口を挟んだら追い払うぞ」

「わかった」

トリスタンは笑って答え、焚き火の側の適当な場所に腰を下ろし、ほかの者も做ったが、突然ケインが立ち上がり、グランディーナの肩に手を置いた。

「皇子に何て口の利き方だ。即刻、訂正してくれ。」

それにあなたに話したいことがあると言ったのもうや

むやなままにしているじゃないか」

それで皆は黙り込んだが、彼女は振り返りもせず
彼の手を払いのけた。

「そんな話は後にしろ。それに私は野営地に戻った
らつき合うとは言ったが時間があつたらとも言った。
いまはあなたたちにもらつていいる実験の方が優先
だ。文句を言う暇があつたらさっさと手を動かせ」

「後まわしにできないから言っているんだ」

グランディーナが振り返つたのと、急いで立ち上
がつたトリスタンがケインの両肩をわしづかみにした
のとほぼ同時だった。

「待つてくれ、ケイン。そのことで話がある。こつ
ちに来てくれ」

「しかし、トリスタン」

「いいから、さあ！ 皆は話を続けてくれ」

皇子と従者がいなくなるのをその場のほぼ全員が見
送つた。ランスロットは何うようにアッシュの顔を盗
み見たが、元騎士団長の表情は変わらない。声の聞こ
えないところまで離れた二人を黙つて見ている。

グランディーナ一人が皇子も従者も無視していたが、
皆がそちらに気を取られていることを特に怒鳴りつけ
ることもなしに冷静な眼差しを向けている。

そこへ皆の注目を集めているとも知らずにトリスタ
ンがケインを連れてきた。彼はグランディーナのもと
に直行すると、頭を下げた。

「何の真似だ？」

「わたしの従者が君たちの話し合いを邪魔するよう
なことがあつてすまない。主人としてお詫びする」

「詫びなどいい。あなたたちがするべきことをして
くれれば、私のことをどう思おうと問わないし気にも
しない。下手に言葉を尽くすくらいなら行動で示せ。
だが詫びると言つたからには働け。無駄飯食いを置い
ておくような余裕は解放軍にはない」

「心得ておこう」

ケインが再び魔術師たちに混じり、トリスタン皇子
もその場に残ると、アッシュが一人ひとりの名前と簡
単な経歴を紹介しているのに同様に知らないヨークレ
イフと、ほとんど全員知つていいるはずのマチルダや
バーンズも思わず耳を傾けていた。

そのうちにグランディーナがその場を離れた。トリ
スタンが彼女の占めていた場に来て、ケインたちが何
をさせられているのか見に来たが、五人の魔術師は熱
心に地面に円だの見たこともない模様だのを事細かに
書き込んでいるだけしかわからない。

見ているうちにグランディーナが戻ってきた時には夜もだいぶ更けていた。デネブなど大あくびをしてアイーシャの膝枕を決め込んでいるし、トリスタン皇子も含めて皆が眠そうな顔だ。

「マクレディ、今晚の夜番はフィロウに交代させた。ゼルもマンジェラに交代するよう伝えた。その話が終わったら休め」

「わかりました」

考えてみたらとつくに夜番の立つ時間だった。静かになつた野営地はほとんどの者が就寝した証でもある。

「その話し合いはいつまで続くんだ？」

トリスタンの疑問は当然だったが、グランディーナは意に介さぬ顔で答えた。

「明日はフェルラーラに行くが、その前に確認しなければならぬことだ。徹夜だろうが終わるまで続けよう。だがあなたたちがそれにつき合うことはない。適当に休め。アイーシャ、あなたもだ」

「そうね」

デネブが起き上がる。

「続きはまた明日にしましょ。夜更かしは美容の大敵よ」

「わかりました。デネブさん、また明日、続きを教

えてください。皆さん、お休みなさい」

「あたしはいつでもかまわないわ」

アイーシャは去つたが、デネブはその場に残留しようだ。魔女は傍らに置いたとんがり帽子を角度にこだわりつつかぶり直す。

「わかつた、わたしも休もう。君たちの話を聞いていたいのはやまやまだが、わたしが休まないとアツシユたちをつき合わせてしまいうだからな」

「そんなことはありません、殿下。徹夜は老体には堪えます。わしは休もうとしていたところですよ」

「気にするな、アツシユ。皆も行こう」

トリスタンの誘いにアツシユのほかには、マチルダとバーンズ、ヨークレイフが従つた。

一人その場に残つたランスロットを置いておいて、グランディーナと魔術師たちの話が再開される。

トリスタンたちと入れ替わるようにアラディたちが戻ってくる。だが彼らが野営地にいるのは珍しいことだ。何があつたのか訊こうとして、ランスロットはウォーレンが話し始めたのでそちらに気を取られた。

「結論から申し上げれば、マラノ全体を焼き尽くすことは可能だと思います。大がかりな仕掛けになりますが、アプローズ男爵がマラノの領主になつて二〇年

以上、十三人会の協力もあつたようですし、このような罾を町中に仕掛けるのもたやすいかと」

ウォーレンが立ち、皆がランスロットと同じくらの位置まで下がる。その眼差しはどれも真剣で、彼も思わずウォーレンの動きに注視した。

老占術師の前には一束の粗朶そだがある。地面には円が描いてあるようだが、粗朶が置いてあるのでよく見えない。その時、短い呪文とともにウォーレンの指先から小さな火の玉が飛び出した。粗朶に燃え移った炎は舌を枯れ木に這わせていたのもつかの間、不意に最初の火の玉より大きな火柱となつて燃え上がった。

「ウォーレン殿、お下がりを！」

ケインが素早く引つ張り、火柱はウォーレンの立っていた場所まで届いたが、燃料の粗朶が燃え尽きてしまったため、じきに沈静化した。

「ありがとうございます、ケイン」

「いいえ、大事なくて幸いでした」

グランディーナが燃えかすを踏みつぶし、元のような輪ができる。彼女はいつの間にか靴を履いていた。

思いも寄らぬ場に立ち会つたランスロットは、いまの実験に眠気も吹っ飛んだ。

「さて皆さん、いまのがいちばんよく知られている

魔法陣の効果です。魔力の増幅が主な用途ですが、ご覧のようにファイアーボールでもファイアーウォールに匹敵する威力を得ることができます。実戦で使われない理由は一つ、魔法陣を描くのに時間がかかりすぎるので素早く対応できないからです」

「その魔法陣の大きさと描くのにかかった時間はどれくらいだ？」

「直径一バス（約三〇センチ）の円ですが、描くのは皆さんのご協力をいただいても一時間ほどかかりました。グランディーナがボグロムの森で会つた賢者ポルトラノ殿という方は直径三〇バス（約十メートル）ほどの魔法陣を二時間ほどで描かれたと聞きますので相当な力と知識をお持ちの方と思われます。わたしでは一日以上かかりましよう」

「マラーノはゼテギネア最大の町だ。広さはおおよそ七〇平方バーム（約七〇平方キロメートル）あるが理論的にはできるといふことだな」

だがグランディーナの言葉に誰も頷かない。彼らの話が行き詰まつていることはランスロットにもわかる。

「それでどうするの、グランディーナ？ 状況証拠ばかり集めたつて灰色は灰色のまんまよ。あなたのお友だちから何も聞いてないの？」

「畏のことを聞いたのは今日になってからだ。それにジャックたちには明日も会う。あと六日か」

ケインがウォーレンに何のことか確認すると、

「ラウニー殿とアブローズ男爵の結婚式がです」という返事だった。

突然グランディーナが立ち上がった。

「皆は休め。私はアラデイと出かけてくる」

「よろしいのですか？」

「デネブの言うとおり、これ以上ここで話していても埒うちがあかない」

「どこへ行くんだ？」

「今回あなたはついてくるな。アナトリアのような身代わりは要らない。こんな時間では見つかるわけにはいかない。それとここにいる者にはマラノ攻めに加わってもらうのでそのつもりでいろ。行くぞ」

そう言われてまで無理についていくわけにもいかず、ランスロットは居心地悪く腰を下ろす。もつともそう感じたのは彼の早とちりかもしれない。

「まったくいつも元気ね、あのこは。あたしはもう休むわよ。睡眠不足はお肌の大敵なんだから」

デネブが大あくびをしながら席を外したのを皮切りにランスロット以外の者が皆、思い思いの休憩場所に

移動していった。それはふだん、共に行動することのない影たちも同様だ。

「あれを聞かれていたとは思わなかった。彼女も大した地獄耳のようだな」

置いていかれたことを感傷的になつてもしょうがない。細くなつてきた焚き火を消して、ランスロットもようやく寝に就いたのであった。

翌炎竜の月二〇日も朝からよく晴れ上がった。この時期は天候が安定していることが多いのだ。

そして解放軍の約三分の一ずつと半数ずつの魔獣を率いて、ギルバルドとライアンがトリエステを発つた。ギルバルドは街道をしばらく南下し、東南のサンベルナルとモンズニラへ、ライアンは街道を西進し、ウージネやモンファルコーネ、西南のシャモニーへ向かうことがグランディーナには伝えられている。

さらに残りをカノーパスが率いてパドバを攻めることになつていたがそれはすなわちマラノ攻めの面子でもある。

その一方でケインもアラデイに連れられて早々にグリフォンで出かけた。従者の行く先はトリスタンも知らず、グランディーナに訊ねれば、

「マラノに出かけた」

とにべもない言い方だ。

当の彼女は赤銅色の髪を地味な茶色に染めていたの
で、驚かない者などいないほどだ。

「ところで解放軍にはいま、何人いるんだ？」

「あなたが来たから一〇一人と魔獣が二一頭だ。
話し相手が欲しいのならばアッシュカランスロットに
頼め。私は忙しい」

「彼らではわたしの知りたいたいことを知らない。だか
ら本人に訊ねている」

「私個人のことなどあなたに話す義理はなかるう。
私はあなたの臣下でもない。マラノのことがなければ、
あなたを迎えに行くつもりもなかった」

「わたしもただの好奇心で君のことを訊ねているの
ではないよ。ここまで解放軍を率いて戦果を上げてき
た君の実績を疑うものではないが、君という人間に信
頼が置けない。だから君個人のことを知りたいと思っ
たのだが教えてもらえないか？」

グランディーナがここで初めて顔を上げた。彼女と
トリスタンは列のしんがりを歩いていたが、二人の話
に耳を傾けていた者たちが慌てて顔を背ける。

「ここでするような話ではない。マラノ攻めが終わ

るまで待てないのか？」

「フェルラーラで十三人会に会う前に聞いておきた
いんだ」

彼女の足が止まり、トリスタンも立ち止まったが残
りの者は進み続ける。

グランディーナが話を再開したのは声が聞こえない
ところまで皆が離れてからだ。

「私の正体とゼテギネアの未来を天秤にかけるつも
りか。あなたが自己満足以外に何を得られるのか聞い
てもいいか」

「ほかならぬ君が率いている解放軍がゼテギネアの
未来を担う者たちだ。君が解放軍のリーダーであり続
けることはかまうものではない。わたしも最初からそ
のつもりはなかった。だがわたしはこの戦いの後に残
される大陸の再建を負わねばならない。疲弊している
のは国土ばかりじゃない、人も、何もかもだ。ゼテギ
ネアの再建を負わされる者としては君がいかなる人物
でこの先どのように帝国と戦っていくつもりなのか、
解放軍に加わらない者、敵対する者をどのように扱う
つもりなのか知る義務があると思う。そうもしないで
わたしが十三人会に戦後の保証をするなどおかしな話
だと思わないか？」

「そういうことならばここで話す。だが私もあなたのことを少し甘く見ていたようだな」

「甘く見られる方が人は思わぬことまで話してくれるものさ。そうでなくてもわたしも神帝グランの血筋のおかげで色眼鏡で見られることも多いのですね。だが君はそうではないようだな。それに必要最小限のことは話してくれないことも多いと聞く。いま君と戦っている者たちはいいだろう。君の強さも君の戦い方も、あるいは君自身をじかに知っている。だがそうでない者は結果でしか解放軍のことは判断しないだろうし、解放軍とはすなわち君以外にはあり得ない。いくらわたしが解放軍として表に出なくても君にあまり好き勝手をやられては後々都合も悪い。わかるだろう？」

「そういうことならば、大して答えられることもないと思うが、何が訊きたい？」

グランディーナとトリスタンが解放軍の本隊に追いついたのはパドバ攻撃が始まろうとする矢先のことだった。

直前の二人の会話を聞いていた者は皇子の表情を盗み見るように伺ったが特に変化を見出した者もおらず、二人は離れた。

カノープスの指揮のもと、じきにパドバへの攻撃が始まった。

ここを落とされればマラノは自らの外壁に守られるだけとなる。同じ衛星都市とはいえ、トリエステよりも堅固な守りをカノープスは予想していたのだが、パドバに配置された守備隊も大した戦力ではなかった。

「よほど自分の任掛けた罠に自信があるんだろうな。守備隊なんて言ったつてろくなものじゃねえ。だが何でそんなに罠を使いたいんだ？ ポグロムの再現ならマラノだつてまともには残らねえ。残虐つて言つたつて限りがあらあな」

「こちらに怪我人は出なかつたのだな？」

「守備隊なんて蜘蛛の子を散らすように逃げてつちまつたよ」

「最初から戦う気がないということか？」

「まあ、言われてみればそんな感じかな。俺たちが来たから逃げるいい口実ができたつていう」

「まだ一人くらい捕まえられるか？ その土気の低さがどこから来るのか訊いてみたい。アヴァロン島の時と少し似ているかもしれない」

「ガレス皇子の時か。そいつは少し厄介だな。急いで探してくる」

「私はこれからトリスタンと出かけてくる。敗残兵とはいえ無下に扱うな」

「わかっているよ！ おい、カリナ、チェンバレン！ ちょっと手伝ってくれ！」

通常の移動ではほとんど飛ぶことのないカノープスだが急いでいる時は話は別だ。遠くのカリナとチェンバレンを捉まえようと飛んでいった。

グランディーナも立ち上がる。約束の日没はまだ時間があるが、パドバからフェルラーラまでは距離があるし、そこはいまだ帝国の支配下だ。まずマラーノに侵入しなければならなかった。

「ライナス、あなたたちはグリフォンで帰れ」

「帰りはどうされますか？」

「いつ終わるのかも予想がついていない話し合いた。帰りはその時に考える」

「わかりました。お気をつけて」

蛇の道は蛇、マラーノ潜入への案内をしたライナスは同じ経路をたどって素早くマラーノを出た。

一方、グランディーナとトリスタンは武器といえは短刀しか身につけていない丸腰同然で、急いでロシユフォル教会に向かった。

約束の日没は廻っていたが、マラーノ市内にはまだまだ活気があり、大勢の人びとが表通りを往来していく。話聞いたことはあつてもマラーノに来たのは初めてのトリスタン皇子は、どんな町とも比べものにならないその混沌と賑わいと人混みに半ば呆れ、半ば感動していた。彼の記憶にもないゼノビアはエストラードやバーニヤの話によれば、四方を城壁で囲まれ、中心に王城を抱く、グラン王の好んだ理路整然とした町並みであったという。

だがマラーノの都には理路とか整然という言葉はまったく当てはまらないにも関わらず、この熱気、この人の多さ、この無秩序さは領主の結婚式が近いという理由だけでは片づけられまいと感じる。あるいは往年のゼノビアにもこの活気があつたのだろうか。

ゼノビアの皇子でありながら、その半生を己の素性を知らないままに過ごしてきたトリスタンにとつて、マラーノの都の混沌は彼がこの先、王となった時に抑えつけなければならぬ民衆の力のようにも思われるのだ。ゼノビア王家のことも知らなかった自分が支配する側に廻る時、大勢の人びとの受け入れと反発とを彼はその身に受けることになるのだろうか。

「こつちだ」

彼は自分より少し小柄で年下の解放軍のリーダーの背を見ながら、漠然とした不安を感じつつもあつた。

グランディーナの素性を少しと考え方を聞いても互いの溝は埋まらない。彼女と自分とは立つところが違う。ゼノビア王国という基準を持たねばならない自分とそうした拠所を持たない彼女とでは、考え方が違うのは当然だ。

けれど、現在の解放軍にトリスタンと同様の考えを抱いている者もないようだ。戦時のうちはそれでもいいだろう。彼女を中心に打倒ゼテギネア帝国という華やかな目標に皆が突き進んでいけばいい。よそ見をするには帝国は大きすぎる相手だ。

だが彼の出番は帝国が倒されてからだ。そのことも考慮の上で解放軍のリーダーを彼にさせないと言つたのであれば、彼女はおよそ慧眼と言わねばなるまい。

目指すロシユフォル教会は小さな建物だった。商業都市らしく宗教は人気がないのかもしれない、などとトリスタンが考えていると、グランディーナの足取りはそのまま入り口には向かわず、脇にそれた。

なぜと訊くまでもない。ロシユフォル教会が帝国軍に取り囲まれていることは彼にもすぐわかったからだ。少し離れたところに見たことのある馬車が止まって

いて、彼女はそれに乗り込み、トリスタンも続いた。二人が腰を下ろすより早く馬車は走り出したが、乗っていたのは〈何でも屋〉のジャックであった。

「あなたがいてくれるだろうと思つた」

「ご期待に添えて何よりです。」

トリスタン皇子、お久しぶりです」

「君たちは知り合いだったのか？」

「はい」

「あの時は世話になつた。君のおかげでゼノビア王国の者たちと会えたこと、改めて礼を言う」

ジャックは満足そうに頷いた。

「それにしてもあの程度の罫ではやはり簡単に見破られましたね」

「密告者は誰かわかつたのか？」

「いいえ」

「では十三人会はどこにいる？」

「アグラヴェイン||リニユ殿のお屋敷にいらつしゃいますよ」

「彼がアプローズとつるんでいれば、十三人会もあなたも我々も一網打尽というわけだ」

「そうですね。そうなれば、今後、マラノでは十三人会は存続できず、アプローズ男爵はその功績により

ますます地位を上げられるというわけです」

「君たちはそうなってもかまわないでも思っているのか？ アプローズを生かしたままにしておくということはポグロムの森での避難民虐殺を認め、悪しきゼテギネア帝国をも放っておくということだぞ？」

「ですから、アグラヴェイン殿にはそのような疑いはないと申し上げようとしたところだったんです」

「それならばいい」

しかしトリスタンはそのポグロムの森がどのような姿になったかを知らない。祖国ゼノビアへの裏切りというだけでアプローズへの憎しみを募らせることはできて、ずっとゼノビアの現状を知らなかった自分がそのようなことを言う権利があるのか、彼は時々迷う。

「ゼノビアに華々しく凱旋するのはせめてアラムートの城塞を落としてからにした方がいい」

「藪から棒に何を言ひ出すんだ？」

「帝国の標的が解放軍だけでなく復興途中のゼノビアにまで向けられるかもしれない。いままで復興に費やされた労力が無駄になるし、いまの解放軍の戦力ではゼノビア領を守ることができない。あなたがゼノビアに戻ればそうなるが、アラムートを落とせば東大陸の心配はしないで済むだろう」

「君はバーニヤたちのことを言っているんだな？」

君に言われるまでもない。わたしも単なる郷愁に駆られてゼノビアに帰るつもりはない。そんな単純な感情で動くほどわたしもゼノビアのことが懐かしいわけではないよ。アッシュたちには悪いと思っているがね。ただ、わたしがアプローズを倒したいと思ひ、その理由の一つにポグロムの森を挙げるには何も知らないというだけだ」

「魔法使いのカシムⅡガデム、女戦士のマンジェラⅡエンツォとシルキイⅡギユンター、この三人はポグロムの森で両親を殺された。ほかにいるかもしれないが私が知っているのは三人だけだ。気になるのならウオーレンやランスロットにも訊いてみればいい」

「そうしよう」

「そろそろ着きますよ」

「十三人会との約束の時間はどうなったんだ？」

「ロシュフォル教会で待ち伏せされてしまいましたので、遅れなどは気にしなくてもいいでしょう。十三人会の方々は待ち伏せまではご存じありませんが、会合の場所をリニユ家に移すことはご承知いただいた上でのことですので」

「なるほど。後はつけられていないのか？」

そう言ってからトリスタンは最後に馬車に乗った自分が氣を遣うべきだったことに気づいたが、グランデイナーは黙って首を振った。まったく憎らしいぐらいの氣のつきようだ。傭兵という経歴が彼女に用心深くさせるのだろうか？彼ではこうはいかないだろう。

「彼らが改めてアグラヴェイン殿のお屋敷に踏み込むまでにあなたたちを逃がす時間ぐらいあるでしょう。この馬車に乗り込んだところを見られなければ、帝国も十三人会に言いがかりはつけません。フェルラーラの守備隊長ごときでは相手にもされませんよ」

やがて馬車が止まり、ジャックが真っ先に降りた。リニユ家はシュワルツェンベルク家より一回り大きな屋敷である。三人を出迎えたのも当主のアグラヴェインではなく執事で、そのまま彼女は大きな食堂に通された。長い食卓には十三人の男性がすでについており、上座が三つ空いている。

そして三人の姿を見て、ベディヴィアのように好意的に会釈する者もいれば、特に氣にかけないふりをする者、慌てて目をそらす者もいた。

グランデイナーはいちばんの上座をトリスタンに譲り、自分はその右手に、ジャックが左手についた。彼女らが席につくの併せて十三人も揃って立ち上がる。

「このような場を設けていただいたことを感謝する。私が解放軍のリーダー、彼が旧ゼノビア王国のフィクス・トリシュトラム・ゼノビア皇子だ」

「わたしはグリフレット・マッセナだ」

十三人の中でいちばん上手にいた初老の人物が自己紹介したのを皮切りに残る十二人も順に名乗る。

もつともトリスタンにしてみれば、全員に名札を下げてもらいたいところだ。彼らは二人覚えればいいがこちらは十二人も覚えなければならない。なんて不屈きなことを考えていたら、ジャックが心得顔に席順を書いた紙片を差し出した。しかしグランデイナーには不要のようだ。解放軍一〇一人の名前と職業、二二頭の魔獣も覚えているという彼女のことで。人の顔や名前を覚えるのはさほど苦にしないのかもしれない。

下座から二番目の席に座っていたベディヴィアだけは「改めて名乗るまでもないでしょうが」と断った。彼と、真正面に座ったバリン・ダヴーは自分と歳が近そうなせいもあつてすぐに覚えられそうだが、ほかの者を覚えるのは一苦労しそうだ。

全員が席に着くと、グランデイナーが立ち上がった。「早速だが、アプローズを倒し、マラーノを解放するのにあなた方の力を借りたい」

「我々はアプローズ男爵とは理想的とは言えないまでもおおむね良好な関係にあると考える。男爵は確かにゼノビア時代に捕虜虐殺を行ったなど良い領主とは言い難いところもあるが、マラノを戦場にしてまで我々が解放軍に協力する利点はどこにある？」

そう言ったのは最年長のブラモア・ド・ガニススールだ。彼が昨日の時点でグランディーナの提案に反対していることはトリスタンもすでに聞かされている。

亡くなったグラントと似た印象を受けるのはその薄くなった白髪のためだけではあるまい。一見温厚そうだが、かなり頑固な老人に違いない。

グランディーナに促されたのでトリスタンが答えた。

「解放軍に協力していただければ、ゼノビアの王位継承者としてマラノの自治を取り戻すことをあなた方にお約束しよう。今後、ゼノビア王家の名において、マラノの自治が何人にも破られぬことを保証する。それと一つ訂正させてもらいたい、アプローズがポグロムの森で殺したのはゼノビア王国の捕虜ではない、ゼノビア城からの避難民だ」

トリスタンはせいぜい熱弁を振ったつもりだったが、冷たい眼差しは変わらぬようだ。しかし、彼が話したポグロムの森の真相の方は十三人会にはかなりの

驚きだったらしい。トリスタンにすればこれだけ嘘が広がっていることは驚きを通り越して呆れるしかない。

ブラモア・ド・ガニスの席はグランディーナと対角線上に位置する。向かいがベディヴィアで、右隣に座ったカドール・ヴィトゲンシュタインが何か囁くのが見えた。カドールも反対者の一人だ。くすんだ金髪を肩まで伸ばした四〇代半ばくらいの人物だが、青白い顔と細身から神経質そうな印象を受ける。背の高さはブラモア・ド・ガニスと同じくらいだった。

カドールの内緒話にブラモア・ド・ガニスは頷き、また話し始める。最年長の彼には十三人会内の序列を越えた力があるらしい。

「戦後の保証も良いだろう。だがジャック殿からおかしい話も聞いた。アプローズ男爵がこのマラノに解放軍を迎え撃つための罠を仕掛けており、罠が発動すればマラノはポグロムの森のような惨劇に見舞われるとか。確かに男爵には残酷なところもある。避難民の虐殺などゼノビアの皇子殿としては許し難い所業もあるろう。だがそれはマラノには関係のないことではないか。しかも解放軍の存在が罠を仕掛けた理由としたら解放軍に協力するどころか解放軍の存在そのものがマラノには迷惑ということになるがいかがか？」

トリスタンは思わず絶句したが、その利己主義と思われる言い分を非難するのは避けて沈黙を守り、グラディーナが応答するの任せた。

「我々は次の四点においてアプローズとマラノを放置して先に進むつもりはない。一つめにポグロムの森の虐殺の首謀者として人道的にアプローズを許し難いと考え。殺されたのが何人であろうと関係はない」
彼女の話し方はいつもよりゆつくりで言葉を句切るようだが、グリフレットが強引に割り込んだ。彼は賛成も反対も表明していないマラノ一の大商人である。つまり、十三人会のなかでも中心人物というわけだ。

「つかぬことをお伺いするが、ポグロムの森でアプローズ男爵が行ったのはどのようなことか教えてはもらえないか。ゼノピア城からの避難民虐殺とはまったくま聞いたのだが、詳しいことは知らないものでな」
これに答えたのはグラディーナだ。

「ポグロムの森の虐殺はアプローズの手の者が森全体を一晩で焼き尽くしたことに端を発するものだ。ゼノピア城から逃げ込んだ避難民が殺されたことは言うまでもないが、特筆すべきは彼らが降伏の意志を示したにも拘わらず、アプローズがそれを許さなかったということだ。私はこの点においてアプローズを許し難

いと考える。さらに森に接したセルジツペ、ミナスシェライスという町もこの炎に捲かれて消滅し、町の住人が殺されている。森の面積はマラノの約二〇倍、それで炎の規模がわかろうし、同じ炎にマラノが巻き込まれればどうなるかは言うまでもないだろう。グリフレット殿、よろしいか？」

彼は頷いたが、誰かが息を呑む音が響き渡る。

トリスタンさえ、ポグロムの森がそれほどの大きさだとは知らなかった。一晩で森を焼き尽くした炎の規模も、それがここ数年で復帰したという事実の異常さも容易に察せられようというものだ。

しかし彼女は淡々と続きを話す。

「一つめにマラノがアプローズを領主としていただけ限り、ここに落ちる富はゼテギネア帝国を潤すことになる。現在、定期的な財源を持たぬ我々には見逃すことのできない金額だ。マラノが帝国に対して中立を約してくればそれだけの財源を削ることができるが、アプローズがマラノの領主でいる限りそれはできない。一つめにマラノは東大陸に残された、おそらく最後の重要な拠点だ。戦略的にもここを落とさないわけにはいかない」

彼女が三つめまで話して黙ったので隣に座っていた

ブラスティアスⅡサンシールが続きを話すよう促した。彼も昨日の時点では解放軍の策には反対していたが、リーダーが若い女性と知って興味津々のようだ。顔つきは地味だがいちばん恰幅が良く、赤ら顔である。

「四つめにアプローズの仕掛けた罠が解放軍だけを対象にしたものではないからだ。あなた方の知らないうちに彼はマラノ市を質にしている。我々がアプローズをそのままにしてマラノを離れることは逆にマラノのためになるまい」

「なぜそう言い切れるのだ？ マラノ全市に仕掛けた罠ならば発動すれば解放軍以外にも巻き込まれようというだけのことではないか」

「アプローズが罠を仕掛けたのが解放軍の現れるのより前と考えられるからだ。二年ほど前にマラノ市内で大規模な道の舗装工事があつたそうだな？ それ以外にもマラノでは終始どこかで下水道の工事が行われているはずだ。それならば大して目立たずに罠を仕掛けることも可能だろう」

「確かに二年前にマラノ全市でそのような工事があつたが、あれはアプローズ男爵の命で行つたものではない。ラモラック殿、あの工事の手配から作業一切は職人組合で請け負つたはず、アプローズ男爵の介入

があつたか貴殿ならばご存じではないか？」

ラモラックⅡノルレンドルフはグランディーナの右に三人あいだにおいたところの席だ。積極的な賛成者の一人だが、彼女らの姿を見た時に目をそらしたのがトリスタンには引つかかる。五〇歳を越えているだろうが坊主頭なので意外と若いかもしれない。

「いや、そのような話は聞いていない。あれは石畳の摩耗がひどかつたので交換した工事だ」

「全市で一斉に工事を行つた理由は何だ？」

「材料の石が一度に大量に入ったのと臨時に石工職人が大勢雇えた。全市で集中的に行つた方が効率が良いからだ」

「臨時の職人を大勢雇つたとは初耳だ。そのなかにアプローズ男爵の息がかかつた者はいなかつたのか？」

石を置く場所の確保という問題はあろうが素性の確かな者だけで工事をやらせるべきではなかつたのか？

それに解放軍を対象にした罠であろうとなかろうと罠を仕掛けるという行為そのものが我々への裏切りではないか。アプローズ男爵がはつきり介入したとわかるようなことをするだろうか？ わたしならば目立たぬようにするだろう。あいだに二重三重に人を挟めば、大元が誰か偽ることも容易にできるのではないか？」

この館の当主アグラヴェインは、グランディーナとラモラックのちょうど中間に座していた。ジャックの話では婉曲的な味方のようなのだが、昨日の時点ではグリフレット同様、賛成も反対もしていない。しかしラモラックの言い分が気に入らなかつたのかあれこれ問いただす。意外と熱血漢なのかもしれない。

「それは、職人の身元については石工職人長に確認させたので間違いないとしか言いようがない。職人には腕前が何より大事だ。いくら領主の息がかかつていても腕前もわからぬ者を雇い入れることなどあり得ない。だがあの時は腕のいい石工職人が大勢雇えたのだ。あの工事の後に問題は起きていないだろう？ それに二年も前のことをいままさら責め立てられても困る」

ラモラックの言い訳めいた口調にアグラヴェインも苦笑しそうな顔をしたが、グランディーナが再度突っ込んだ。

「それでは下水道についてはどうだ？」

「解放軍のリーダー殿はずいぶんとマラノの内情に詳しいようだな。情報源はジャック殿か、それとも我々のなかに解放軍への内通者がいるのか？」

「マラノで行った工事など秘密にするようなことではあるまい。内通者というのはマラノを裏切り、アプ

ローズに味方する者のことを言うのだろうか」

重苦しい沈黙が食堂に満たされる。隣同士で話し合う者、一人で考え込む者と十三人の反応は様々だったが部外者に裏切り者がいると示唆されたことには全員が一様に不快感を示した。けれどもグランディーナの口調は変わらない。

「今日の会合のことは私は部外者ではジャックにしか話していないし、解放軍内でも知っている者はトリスタン皇子のほかには限られた者だけだ。つまり、私たちが今日の日没後、フェルラーラのロシユフォル教会にしていることはあなた方からしか漏れる可能性はない。だがベ DeVIA 殿には昨日、トリスタン皇子と会う場を提供などしてもらったから除外している。同様にアグラヴェイン殿も、今日の件では会合の場を設けてもらったから除外して考えてもいいだろう。情報は残る十一人の方から漏れたと思われる。そうでなければああも都合良く、帝国軍がロシユフォル教会を包囲していた理由が説明できない」

「ジャック殿、それは本当ですか?!

「あなたが場所を変えたいと仰った時にはそのような理由とはお伺いしなかつたはずですが?」

ロシユフォル教会からリニユ家に会合の場所が変更

になったのだから、アグラヴェインが発言する理由はわからなくもないのだがラモラックの反応がトリスタンには不可解だ。

「申し訳ありません、皆さん。彼女に忠告されてはいたのですが、あの時点ではわたしもまだ確証が得られていなかったのでお話しできなかったのです」

十三人の視線がジャックからグランディーナに移される。ゼテギネア帝国相手に連勝を重ね、トリスタン皇子以上の賞金首とはいえ、たかが二〇歳の小娘のほが、その時の彼らの目にはずいぶん得体の知れない存在に写っているに違いない。

しかしトリスタンだって同じ思いなのだ。いくら話しても掴みきれない得体の知れなさが彼女にはいつまでもつきまとう。まるで本人もそう思われることを望んでいるかのようだ。

気まずい沈黙を破つたのは明るい、脳天気と言つてもいいジャックの声だった。

「だから皆さんには最初にこう申し上げたはずですよ？ くれぐれも年齢や実績だけで彼女を判断しないように、とね。お忘れですか？」

「いいや、ジャック殿、忘れたわけではないのだが、わたしの予想など簡単に上回ってくれたのだ。あなた

の話を聞かされた時からどのような方か興味はあったが、まさかこれほどとは思つてもいなかった。

グランディーナ殿、あなたという方を見くびつていたことをどうかお許し願いたい。そしてあなたとは是非一度、私的にお会いしたいものですな」

彼女の右隣に座っていたせいかなり好色なのか、たぶんその両方なのだろうが、ブラスティアスは素早くグランディーナの手を取り、音が出るほど熱く口づけをした。

「ブラスティアス殿、ご厚意だけありがたいただいておく。申し訳ないがゼテギネア帝国を倒すまで身体が空かない」

「わたしも無理にとは言いませんよ」

そう言いながらブラスティアスは彼女のことはちつとも諦めていないようだ。

「私個人のこととは差し置いて、話を進めさせてもらつてもかまわないだろうか？」

さすがに反対者はいなかった。

「あなた方には嫌な話を蒸し返すようだが私がこうして内通者に言及しているのはそれが誰かを突き止めたからじゃない。事情はそれぞれだろうが、アプローズに協力するのを止めてほしい、それだけだ」

彼女の言い分はトリスタンにさえ意外であった。彼はこのまま話し合いが好転することを望んだ。

「我々のなかで誰がアプローズ男爵に内通していようとするかは我々自身の問題であつてそちらにあれこれ言われる筋合いの話ではあるまい。いかに言を尽くさねようともマラノを戦場にするような策にわしは賛成することはできない」

だがブラモア・ド・ガニスが頑固に同じことを繰り返したので反射的に立ち上がりかけたトリスタンは、グランディーナに思い切り足を踏んづけられた。

「何を——?!」

「罨を発動されて困るのは我々も同じだ。だが先ほど申し上げた四つの理由によりあなた方の協力が得られても得られなくても我々はマラノを攻める。解放軍に協力してもらえればマラノを戦場にするのは必要最小限で済むだろう。あるいはアプローズの仕掛けた罨を回避することもできるかもしれない。あなた方として帝国が倒された後までアプローズに従う道理はあるまいし、そうなればいくらマラノが巨額の富を生み出すとはいへ、判断の遅れたあなた方の立場も微妙なものになると思うがいかがか？」

この言葉にブラモア・ド・ガニスは不機嫌そうに押

し黙った。

彼女の視線がカドールに向けられ、気弱そうな商人は慌てて手を振る。その向かいのウリエンランヌもグランディーナが見ると視線をそらした。彼も解放軍の策に反対していたがその理由は不明だ。

「わたしは解放軍の策に乗つてここはアプローズ男爵をマラノから追い払うが得策と思う」

ルーカン||ベルナドットが初めて発言した。賛成者のなかではいちばんの重物で、ベルナドット家はマツセナ家、サンシール家に次ぐ大商人であるという。頭を頭巾で包み、濃い顎鬚が印象的だ。

「解放軍と帝国軍の戦いがこれほど広がっている以上、マラノ市としても静観ばかりはしていられない。伝統的なマラノの自治を取り返すためにもここは積極的に解放軍に協力しておくべきではないか？」

彼の意見は十三人会全員というより、いまだに立場をはつきりさせないグリフレットに向けられたものだ。

「まだ解放軍がゼテギネア帝国を倒したと決まつたわけではあるまい。だがここで我々が解放軍に協力すればマラノは今後、ゼテギネア帝国に敵対するものと思なされよう。その判断を下すにはいまは時期尚早とわたしは考える。グランディーナ殿、解放軍に勝算は

あるのか?」

「それでは我々が勝算もなしにこの戦いを始めたとしてもおしいか? 我々が帝国を相手に勝てるはずもない戦いを始めたとしても?」

「そうは言わないが、マラノ市は解放軍と共倒れになるわけにはいかないということだ」

「では指をくわえてこの戦の成り行きを見守るか? あなたが去就をはっきりするころにはマラノ市はなくなっているかもしれないが」

突然グリフレットが顔を真っ赤にして立ち上がった。重厚な椅子が後ろに倒れたのでよほど勢いをつけたようだ。

「たかが戦争屋の分際でこのグリフレットとマッセナを脅迫するつもりか?」

「私は事実を言っているだけだ。何度も言っているようにあなた方の返答がどうであれ、私はマラノを攻める。それは動かない事実だ。仕掛けた罠が発動すれば我々にとつても致命的なことになるだろうし、マラノ市も無事では済むまいがアプローズを倒すために多少の犠牲には目をつぶるしかあるまい」

「そんな勝手な話があるか! アプローズ男爵一人を倒すためにマラノに犠牲になれと言うのか?」

グランディーナは落ち着いていたが、トリスタンは息を呑むような思いでこのやりとりを見守っていた。それはほかの十三人会の面々も同じ思いだろう。しかしどうやらジャックは一人だけ楽しんでいようだ。

「私を戦争屋と言っておきながら戦争屋として話す」と否定するのだな。だがあいにくとマラノを守ることになど私は興味がない。それは商人であるあなた方の仕事だと思うが?」

「解放軍に協力しろということか?」

「その方が話が速いということだ。我々は人数も少ない。防御はあまり得意ではないが攻撃には長けている。あなた方には地の利がある。それにアプローズを倒してしまえば誰があなた方の我々への協力を知ることができよう?」

グリフレットが腰を下ろす。倒した椅子は室内に影のように控えている召使いが直したらしい。

「なるほど、ジャック殿の言われるとおり一筋縄ではいかぬ御仁だ。それに帝国への矢面に立つのはあくまでも解放軍とは度胸も並大抵ではないようだ。だがあなたは先ほどから肝心な点は誤魔化しているな。いつ、どのようにマラノを攻め、我々にどう協力しろというのか、その点を伺っていないように思うが?」

「私も話した覚えはない。こちらの計画がアプローチに漏れることはできるだけ避けたい」

「だがそれでは堂々巡りだな。我々としても信用のない相手と取引するわけにはいかない」

一同はしばし黙り込んだ。その沈黙を破ったのはまたしてもジャックだ。

「ふわあああ。皆さん、夜もだいぶ更けたでしょう。ここで休憩して続きはまた明日、話すことにしませんか？」

「賛成だ。何だったら場所と日を改めても良い」

ブラモア・ド・ガニスが同意したのを皮切りに何人が賛成する。トリスタンも喜んで休みたいところだが、グランディーナ一人がまだまだ元氣そうだ。

「このままリニユ家を貸してもらえるのか？」

「かまいません」

「あなた方が話し合いが終わるまでリニユ家から出ないと約束してもらえるのなら同意してもいい」

話しながら彼女は立ち上がっている。その言葉に頷いたのはグリフレットだ。

「あなたの言う疑惑も晴れていない。しばしリニユ家に逗留させてもらうのも悪くあるまい」

「わたしも賛成だ」

ブラスティアスとルーカンが同意したので、それ以上意見は出されなかった。

「君はどこかへ行くのか？」

「いったん野営地に戻る。皆に聞きたいこともある。あなたはここで待っている」

「わたしも戻った方がいんじゃないのか？」

「あなたに着いてこられると私が動きにくい。アグラヴェイン殿からあなたがここにいと情報漏れることはないし、万が一の時にはジャックがいる」

「わかった。気をつけて行ってくれ」

彼女が出ていくと急に室内の緊張感が消えたようだ。皆が一齐に目の前の飲み物に手を出し、アグラヴェインは召使いに指示を出すべく立ち上がった。

少しくつろぐと、席を離れていくつかのまとまりができた。若いベデイヴィアとバリンの組み合わせはトリスタンにも容易に予想はついたが、カドールとブラモア・ド・ガニス以外の反対者であるウリエン・ランヌは、その二人とではなく最初は反対者だったが好意的な意見に変わったブラスティアスと話し込んでいる。

一度も発言のなかったエクトル・ウルムゼル、ポールス・ド・トリー、アグロヴァル・クライストはそれぞれ自分の考えにふけっているようだ。

「トリスタン皇子、お疲れになったでしょう。部屋を用意しましたので休まれてはいかがですか？」

「ありがたい、アグラヴェイン殿。わたしがいない方があなた方も話がしやすからうから退室させてもらうとしよう」

「おやすみなさい、トリスタン皇子」

挨拶したのはジャックだけだった。残る十三人はあは言ったもののまだ話し合うことがあるようだ。

トリスタンは召使いの案内で客室に向かった。何にしても彼は疲れている。

だが王となれば、ああいう会合は必然と増えるのだろう。その時に疲れたなどと言って逃げ出すわけにはいかないし、その内容もマラノのように協力するのしないのと単純なものではないだろう。

自分の素性など何も知らず、エストラーダに従って剣を振るっていた少年時代を彼は懐かしむ。あの時は戦いと言っても無邪気なものだったと思う。初めて人を殺したことを独りで震え恐れたことはあっても、いまとはまったく事情が異なっている。

「わたしは臆病者ではないはずだ。だが恐ろしいのだ、自分がゼノビアだの国だのと口にするたび、王という肩書きがわたしには限りなく重く感じる」

けれどその思いを打ち明け、共有できる者はいない。無理に打ち明けることはできても誰にも彼の気持ちはわかるまい。王となるのは彼一人なのだから。

フィクス||トリシュトラム||ゼノビアは孤独だった。

「グランデイナー、無事だったのか!」

解放軍の野営地にたどり着くなり、血相を変えたらンスロットとカノープスがすつ飛んできた。遅れて、アラデイとケインも近づいてくる。

「フェルラーラのロシュフォル教会に行ったら、帝国に押さえられていたのでこちらに戻ったのです」

「皇子はどうしたんですか?!

「トリスタンはフェルラーラに残した。十三人会のなかにアプローズに密告した者がいたんだが、ジャックが機転を利かせてくれてリニユ家に行った」

ケインが力なく座り込んだ。

「我々もロシュフォル教会の側まで近づいて待ち伏せされているのがわかった。心配させたな」

「いえ、皇子がご無事ならいいんです」

「それで成果はあったのか?」

「ええ、畏は二重三重に仕掛けられていて、一つ外しても足りるものじゃありません」

「場所は示せるか？」

地図を渡されるとケインはすぐにフェルラーラ地区に何ヶ所かの印を書き込んだ。アラデイが補足するが、二人とも地名の二重の書き込みについては突っ込まなかった。

「物は？」

「すみません、入手できませんでした」

「謝ることはない。あつても十三人会全員は説得しきれないだろう。罠についてウォーレンやデネブには確認したのか？」

「ウォーレン殿にだけお伺いしました。ここで報告しますか？」

「いや、彼には私から訊く。それよりアラデイも昨日からご苦労だった。二人とも休め」

アラデイとケインが去るのを待たずに彼女はカノープスに向き直った。

「パドバの様子と帝国兵は捕獲できたか？」

「できたけどいまは寝てる時間だ。パドバも特に問題はねえしギルバルドとライアンからも報告は入ってきてない。おまえも休んだらどうなんだ？」

「ウォーレンは？」

「じじいは夜番の担当じゃない。寝てるに決まってる

るだろ。こんな時間まで起きてるのは俺たちと夜番くらいなものだ」

「わかった。私も休む」

「おまえと皇子を待ってて、俺たちまで徹夜するところだったよ」

「それは悪いことをしたな」

グランディーナが素直に立ち去ったのを確認して、ランスロットとカノープスはどちらからともなく安堵のため息をもらした。

「何だ、おまえもか」

「君だつてお互い様だろう」

「あれは俺の作戦勝ちだ。いくらあいつだつて用事がなければ休むしかない。帝国兵はとつと見張り付で休ませたし、ウォーレンが夜番でないのもギルバルドたちのことも本当だ。嘘は言つてねえぜ」

「それなら我々も休むとしようじゃないか」

「まったく、あいつといると退屈しないのはいいが、こつちの体力がもたねえと思う時があるぜ」

カノープスの言い分にランスロットも苦笑いするしかなかった。

「あれがパドバの守備隊長だったという騎士か？」

「奴とは俺が戦ったから顔を覚えてたのさ。怪我して逃げ遅れたつてのもあるらしいが、手当てしてやったから昨日よりも元氣になつたらう。で、奴に何の用なんだ？ 言っておけば訊いておいてやったのにおまえにしちゃ、手落ちだったな」

「アプローズのことを聞いておきたい。ラウニーの言っていたことが引つかかっている」

「何かおかしいつてあれか。わざわざ気にするようなことか？」

「理由はわからないが気になる。そんな曖昧なことをあなたに訊かせるわけにもいかなかったらう？ それにギルバルドのアプローズ評も考えると、ますますマラノに仕掛けた罠の意味がわからなくなつた。ならば、アプローズと話したところのある者に確認するのがいちばん早い」

「解放軍を倒すためじゃねえのか？ それにポグロムの森で同胞をあれだけ殺した奴だ、その功績でいまの地位を手に入れたのなら、ここでマラノごと解放軍を一網打尽にしちまおうと考えたつておかしかねえだらう？」

「ポグロムの森とマラノとは帝国にとつての重要さは比較にならない。森一つ全焼したところで痛くも

かゆくもないが、マラノを壊滅させても帝国が得るものは何もないはずだ」

「わからねえな。じゃあ、アプローズは何のためにマラノに罠を仕掛けたんだよ？」

「それを知る鍵がないか、彼に訊くつもりだ」

捕虜の見張りはアレックとフォードムがしていたが、縛られているわけでもないし悪い待遇でもない。それが逆に居心地悪そうな顔である。

「彼に話がある。二人とも席を外してくれ」

「ご苦労だったな」

一人だけ残されて騎士は緊張した表情になつた。彼にとつては運の悪いことに足を怪我していて、逃げ出す恐れはほとんどないようだが、ランスロットとカノープスは念のため、彼の背後に立つた。

「あなたに訊きたいことがある。素直に答えてくれればすぐに釈放する」

「それはありがたいな。戦はもうこりごりだ。マラノに配属された時に運がいいと喜んだが逆だった。アプローズ男爵がああいう人物だと知っていれば、マラノになど来なかつたものを」

「私が知りたいのもそのアプローズについてだ。だが順に片づけよう。まず、あなたの名は？」

「これは意外なことを訊かれたな。身代金を取るうにも大した家ではないぞ」

「他意はない。話をするのにあなたの名も知らないのでは話しづらいと思っただけだ」

「これは失礼した。コールマンだ。コールマンⅡタルピダエ」

「それではコールマン、あなた方のその土気の低さは何に起因するのだ？ アプローズの命令か？ それもアプローズ自身に起因するものか？」

「男爵はマラノに罫を仕掛けたと言った。だから衛星都市の守りなどどうでもいいと言うんだ。だがマラノを防衛するには衛星都市の守り、特にパドバを重視するのが当然だ。そんなことは素人にだってわかることだ。けれど、わたしがそう言ったら、男爵には鼻で笑われたよ、『これだから剣を振ることしか能のない輩は困る。魔法の罫を使えば、もつと効率よく大勢の人間を殺せる。パドバでもトリエステでも反乱軍にくれてやるがいい』と言うんだ。これで士気の上がる奴がいるのなら、お目にかかりたいね」

「あなたの言い分はわからないでもないが、アプローズが『もつと大勢殺せる』と言った意味は考えなかったのか？」

「え？ そう言われれば、あの時はそれほど意識しないで聞いていたが、とんでもないことを言ってるんだな」

「それにあなたはアプローズがあんな人物だったと言った。その理由も説明してもらおう」

コールマンはそう言われたことがよほど意外だったような顔をした。

「あれはそれほど深い意味があるわけじゃない。ただアプローズ男爵に初めて会った時にすごく嫌な感じがした。あの人ならば、『大勢殺せる』なんてことを言ってもおかしくないと思っただから、気にも留めなかったのかもしれない」

「奇遇だな。あなたと似たようなことを言った者が解放軍にもいる」

「誰だ、それは？ 守備隊で反乱軍に加わった者などいるのか？」

今度はコールマンはそのことがそれほど意外そうでもない顔だ。

「あなたの仲間ではないが、安全のため、マラノ攻略が終わるまで正体は明かさない方がいいだろう。だが聞いた話がいささか曖昧だ。あなたもそうなのだが、もう少し詳しく話してもらえると助かる」

「そう言われてもほかに似たような例を思い浮かばないからな。何と言えればいいのか」

「それでは思いつくまでここで考えていてくれ。私は先にウォーレンの話聞いてくる」

「本気で言ってるのかい？」

グランディーナだけが去り、コールマンは残った二人に訊ねたが、カノープスに言わせればそれは愚問というものであった。

「昨日はずいぶんと遅いお帰りだったようですね」

アルマアタでの予告どおり補給部隊から外れたウォーレンは一人になって気楽に過ごしているようだ。ゼノビア王国の残党をまとめていたという実績の割に、ランスロットと違って孤独を好む性格なのである。

「ケインから話を聞いているだろう？ あなたの見解を聞きたい」

「原理はおわかりでしょうが、あのような魔法陣がマラノ全体に二重三重に仕掛けられているようです。わたしの見解など申し上げるまでもなく、炎一つでマラノ全市がポグロムの森以上の惨劇に巻き込まれるのは確実でしょう」

「それを止める手段はあるのか？」

「最初にアプローズ男爵側に魔法を唱えさせないことです。六地区に少なくとも魔法使いを四人から五人ずつ配置し、何らかの合図で一斉に魔法を唱えるものと思われます。この一撃目か二撃目の魔法を止められなければ我々もマラノとともに焼かれましよう。地図はありますか？」

グランディーナが渡すと、ウォーレンは外門にいちばん近い印を指した。

「たとえば、ここは別の魔法陣だと思います。さらにこれも。これらの魔法陣にそれぞれ一人ずつ魔法使いを置けば結果はお話するまでもありません」

「厄介だな。一人二人魔法使いを倒したところで畏の発動は止められないということか」

「ですが、畏が発動すればこの魔法使いたちも巻き込まれるのは必然です。アプローズ男爵はそこまで残酷でしょうか？」

「そうとしか考えられない。なぜかはわからないが彼は畏を発動させたがつている。それなのにこちらはマラノ側の協力を得るのに手間取っている有様だ」

「それで殿下はマラノに残られたのですか？」

「それでもないがな」

「これからどうされますか？」

「私はまたマラノに戻る。今日は帰らないかもしれないが、留守のあいだは頼む」

「承知しました」

「思いついたか、コールマン？」

「おまえ、そんなことを言っただけであれから大して経ってねえぞ」

「私もそれほど時間がない。十三人会とトリスタンをマラノに待たせたままだ」

カノーブスは肩をすくめた。

「わたしもあまりうまく言えないのだが、アプローチ男爵から感じたのは彼がことあるごとに物騒なことばかり言うってことだ。殺すだの壊すだの、周りの目を気にせずにそういうことを口にする。あんまりこういうことは言いたくないんだが、性格破綻者というのかな、何しろ話を聞かされているこちらまでおかしな気持ちになってくる。まるで反乱軍、ああ、君たちは解放軍と言うのだな。そう、解放軍を倒すためだったらマラノなんかどうでもいいような言い方もするんだ。いや、解放軍でも見物客でも畏にかけられるならば誰でもいいようだ」

「アプローチがラシュデイに師事して魔法を学んだ

というの事実か？」

「よくそんなことを知ってるな。本人に確認したわけじゃないが確からしい。噂ではラシュデイに師事したんじゃないくてラシュデイの魔力をもらっただけなんて話もあるが、あれだけ自慢するんだからけっこう強いんだろうな」

「わかった。いろいろ参考になった。」

ランスロット、彼に食糧と旅に必要な荷を譲ってやれ。私はマラノに戻る」

「そんな話でいいのかい？」

コールマンばかりかランスロットとカノーブスも驚いたが、グランデイーナは走って行ってしまった。

「なあ、どこかで見たことあると思っただけど、彼女って何者なんだい？」

「そんなことも知らねえで話してたのか。おまえさん、意外と大物になれるかもな」

「彼女は我々のリーダーだ。どこかで見たことがあるのは手配書のせいだろう」

「なるほど」

「君さえ良かったら解放軍に来ないか？ 元帝国軍だろうと我々はいつでも歓迎する」

「いいや、わたしはやはり故郷に帰って漁業を手伝

うことにするよ。わたしはライの海のウォーレイの出身なんだ。もう二度と会うこともないだろうが、もしも近くに来ることがあつたら寄つてくれれば歓迎させてもらうよ」

「ライの海とはずいぶん遠いな。気をつけて帰つてくれ」

「ああ、わたしもあなたたちの武運を祈らせてもらうよ。それじゃあ！」

コールマンが手を振つたのでランスロットも振り返した。マラノからライの海までどれぐらいかかるのか彼には見当もつかない。アラムートの城塞を通り、その先の行程はどうなっているのか、解放軍もいずれ向かうことになるのだろうか、グランディーナはマラノの次の目的地は話していない。

「なあ、気づいたか？」

「何だ、カノープス。いたのなら手ぐらい振つてやれば良かったろうに」

「俺もそれどころじゃなかつたんでな。奴が故郷に帰るつて言うのならそれでいいじゃねえか。まだまだ戦わなきゃならん俺たちには関係ねえ話だ、そうだろう？」

「それもそうだが、気づいたつて何に？」

「言わなきゃわからんようならいいよ」

「コールマンの話に彼女が顔色を変えたことか？」

「わかつてんじゃねえか。まあ、そういうことだ」

「訊く間もなく彼女はマラノに行つてしまつたんだが、ラウニイ殿がアプローズについて話していた時、真面目に聞いていたのは彼女ぐらいたつたからな。何かわかつたなら、話してくれればいいんだが」

「そういうことを簡単に話すたまじゃねえからな」

「だが結婚式まであと四日だ。そろそろ具体的な話があつてもいいころだと思わないか？」

「ああ。みんながみんな、俺たちみたいに物わかりがいいつてわけじゃねえんだからな」

「まったくだ。それにしてもラシュデイの弟子は公式には三人と聞いていたがほかにも大勢いそうだな」

「賢者殿は意外と面倒見がいいつてことなんじゃねえの？」

「何を呑気なことを言つてるんだ。アプローズ男爵の魔力がどれだけのものか知らないが、皆、我々の敵ばかりだぞ。この先、どうやつて戦うんだ？」

「魔法のことを俺に訊くなつて言つてんだろうが。

あいつが考えているさ。そうでなかつたらウォーレンでもデネブでも専門家はいるだろう？」

「そうならばいいんだがな」

確かにバルタンのカノープスは魔法のことはさつぱりわからないようだ。だが傭兵として諸国を巡ったランスロットは魔術師を上回る魔法使いの存在を知っている。いづれ見えるであろう賢者ラシュデイのことを思う時、現在の解放軍には彼に匹敵する、とまでは言わないまでも強力な魔法使い、妖術師が存在しないことを彼は案じずにいられないのである。

「トリスタン皇子、彼女は戻っていませんか？」

「何のご用だろうか？」

一度も自分の意見は言わなかったが、ブラモア・ド・ガニスと内緒話ばかりしていたから彼もよく覚えている。金髪の気弱そうな男、カドールだ。

「いえ、実は、彼女にちよつと訊きたいことがあったのですが」

「まだだが、戻ったら、カドール殿の部屋に何うよう伝えよう」

「い、いや、そこまでしていただくには及びませんよ。お邪魔しました」

彼にとつて残念だったのはグランディーナがそれからじぎに来たことだ。

「十三人会はどうしてる？」

「今日はまだカドール殿に会つただけだな。何だつたら彼の部屋に行つてみたら？」

「畏の話を聞いて臆病風に吹かれただけだろう。わざわざ聞く必要などあるまい。それよりも十三人会全員と話す方が先だ。あなたも一緒に来てくれ」

「何かわかつたのか？」

「これは私の推測だが、アプローズの目的はおそらくマラノ市の壊滅だ」

「馬鹿な！」

「だから十三人会のなかで誰が裏切り者だろうとどうでもいいことになつた。ラウニー||ウインザルフを囮にアプローズのもとに乗り込んで奴を暗殺する。十三人会には最初の予定を伝えるし、予定どおり皆を乗り込ませるがそれだけだ」

「確かにアプローズのしたことはわたしも許せない。だが、こういう言い方をするのはおかしいと思われるかもしれないが、二四年前にアプローズがボグロムの森での虐殺を手みやげに帝国に取り入ろうとしたことはわからないでもない。しかしマラノの壊滅は彼にとつても何の利もないはずだ。なぜそんなことを？」

「いまのアプローズはふつうの精神状態ではないら

しいとしか言いようがない。アヴァロン島でガレスと会った時にも感じた。バインゴインで帝国軍と戦っていた時、ガレスが現れて人間のいちばん多かつたところへイービルデッドをたたき込んだ。当然こちらも被害を受けたが、実際の負傷者は帝国軍の方が多かつたほどだ」

「現れてとはどういうことだ？ バインゴインの指揮を執っていたのはガレス皇子じゃなかったのか？」

「指揮は執っていない。それまで戦場にもいなかったのが突然現れてイービルデッドを撃ち、消えた。後日、ガレスとはアムドの手前で再戦したがアッシュたちが言うには鎧だけで中身は何もなく、倒したはずなのにまた現れると捨てぜりふを残していったそうだ」

「そうだ？ 君は彼らと一緒に戦っていたんじゃないのか？」

「私はガレスのイービルデッドを喰らって昏倒していた。後で皆から聞いた話だ」

トリスタンは背筋を冷たいものが流れるのを感じた。ガレス皇子と対峙した話はアッシュから聞いていたが、戦場ではいまのところ無敵の彼女を昏倒させるほどの威力を持つイービルデッドは、自分の知っているどんな攻撃よりも凄まじいものと思えたのだ。

「話が横にそれたな。ガレス同様、アプローズもラシュデイに師事して暗黒魔法を学んだともラシュデイの魔力をもらっただけとも言われている。二人のすることに共通点があるのはそのせいかもしれない」

「またラシュデイか。ゼテギネア帝国について話す」と必ずと言っているほどラシュデイの名を聞かされる。帝国が賢者ラシュデイ一人でもついているという噂は案外、本当なのかもしれない」

「事実だろう。そもそも二四年前の戦争からしていくらハイランドが軍事国家とはいえ、総合的な国力で勝る四王国を相手に勝てるはずがない。グランの暗殺、ホーライ王国軍の壊滅、どちらもラシュデイの功績だ。オフアイス王国は内部分裂したし、最後まで残ったドヌーブ王国も、サラデインがアルビレオに倒されて反帝国の動きは沈黙した。二人ともラシュデイの弟子だ。奴がいなければ二四年前の戦争は起きなかつたと言う者さえいるほどだ」

「我々の戦いもすべてはラシュデイに帰するというわけか。避けて通れない相手とはいえその力を聞かされるほど、彼と戦うことになるのは気が重い話だな」

トリスタンは嘆息とともにつぶやいたのだが、グランディーナは力強く頷いた。

「奴は私が倒す。あなたにはそう言った」
 グランデイナーが先に廊下に出て、トリスタンも続いた。

アグラヴェイン・リニューに話すとじきに十三人会とジャックが集まったが、昨日のような食堂ではなく客間か応接室のような部屋で、中央にある卓もまん丸だ。彼女に促されて席に着いたトリスタンは、昨日のようにジャックから十三人会の席次を書いた紙をもらって安堵した。

「グランデイナー殿にはずいぶん早いお帰りのようだが何かあったのかな？」

真つ先に訊いたのはグリフレットだ。さすがに彼とブラスティアスの名はトリスタンも覚えた。

「こちらの状況が多少変わった。炎竜の月二四日のラウニー・ウィンザルフとアプローズの結婚式に蜂起したい。それまでのあいだ、マラノ、マントーバ、ベルチェリ、フェルラーラ、ボローニャ、モンビーゾの各地区に我々の仲間を数名ずつ匿っけてもらいたい。お願いできるか？」

「喜んで協力させていただきます」

まずブラスティアスとルーカンが頷く。アグラヴェインも同意し、三人の視線がグリフレット、エクトル

・ウルムゼル、ボールス・ド・トリリーに向けられる。ジャックのよこした紙片には十三人の出身も書いてあったが、どうやらその六人がマラノ市内六地区の出で、グランデイナーの要求は彼らの負担となるのだ。だが十三人会のなかでは席次の低いベディヴィアの屋敷でさえ並みの住宅を遙かに凌駕する大きさである。彼よりも高位の三人に場所的に解放軍への協力を断る理由はないはずだが、グリフレットはやはりすぐに同意せず、エクトルとボールスもその意向を伺っているようだ。

「畏の件はどうするのか伺ってもよろしいか？」

「畏は回避する方法が見つかった。発動させないですませられる」

彼女があんまり自信たつぷりに言い切つたものだから真相を知っているはずのトリスタンでさえ頷いてしまった。それは当然十三人に見られていたが、彼が領いたことでグリフレットも意を決したらしい。

「良かろう。そこまで言うのならこれ以上協力を断る理由はあるまい。マラノはアプローズ男爵のお膝元だが解放軍に協力するでしょう」

「グリフレット殿がそう仰るのなら、ウルムゼル家としても反対する理由はありません」

「ド・トリイ家も協力させていたどころ」

エクトルとボールスが即座に口を揃えたが、突然立ち上がった者があった。昨日も堅固に反対意見を貫いたブラモア・ド・ガニスだ。

「皆の衆。解放軍の策になぞ乗せられてマラノを戦場にするおつもりか?! 二四年前、マラノの自治と引き換えに帝国に降伏したのはマラノを守るためぞ、このような策に屈するためではない」

「だが解放軍は我々の協力があるうとなかろうとマラノを攻めると言っている。ここは解放軍に協力した方が被害は最小限に抑えられよう」

「愚かなことを! それではただ脅迫に屈しているだけではないか。解放軍などと名乗っているがしよせんは帝国軍と同じ野蛮な輩よ、我らは商人ぞ、戦争なぞ余所でやるがいい!」

「ブラモア・ド・ガニス殿はシャモニーの出身だったな?」

グランデイナーの声は相変わらず平静だ。しかし、ブラモア・ド・ガニスも容易に腰かけないでいる。

「そうだ。我がスール家はシャモニーを仕切る名門、その功績は衛星都市とはいえどマラノ六地区の方々に劣るものではない」

「そのシャモニーも明日の昼ごろには我が軍の手に落ちるだろう。幸い、アプローズは衛星都市の守りには興味がないようだ。おかげで守備隊の士気は落ちまくり、我々が攻撃すれば我先に逃げ出す始末だ。シャモニーを最後にマラノの衛星都市は全て解放軍の指揮下に入る。あなたがいくら非戦を叫んでも解放軍と帝国軍はとうに交戦下にある。戦争は余所でやれだど? あなた方が忌避してきただけでゼテギネアで戦争は始まっているんだ」

ブラモア・ド・ガニスの両の拳ははつきりと震えている。両隣のウリエンランヌとベデイヴィアも怒りに震える長老はなだめられないようだ。

「この薄汚い戦争屋め! その調子で何人殺してきたのだ?! これから先、何人殺せば気が済むのだ?!」

「何人殺したかなどいちいち数えていられるものか。これから先もゼテギネア帝国を倒すためならば何人も殺すだろう。そんなことで立ち止まっていられるか、それが私の仕事だ」

円卓になったので長老の席次はグランデイナーの右に二人あいだに置いたところだ。そこから近づいてくるとブラモア・ド・ガニスは怒りに満ちた眼差しで彼女を見下ろし、二人の視線が交錯した。

「それならばこのわしを殺してから話を進めるがいい。わしはてこでも動かんぞ」

彼女が薄笑いを浮かべて立ち上がった。

「私が丸腰だからできないと思っているのではないだろうな？ あなたのような老人など素手で十分、そんなに死にたければ殺してやる」

「待たれよ！」

グリフレットが二人のあいだに素早く割って入った。「ブラモア・ド・ガニス殿、二四年前、あなたのご決断がマラノを救ったことは疑いようありませんが、どうかいまは解放軍の策に従ってはいただけですまいか。お二人の覚悟が本気であることはわたしにもよくわかります。ですが、ここは我々が争う時ではありません。どうかこのわたしに免じて怒りの矛先をお納めください」

「二四年前、帝国に降伏した時はおぬしはわしの決断を腰抜けと罵ったのではなかったか？」

「あの時は若さゆえ、そのような性急な判断もしました。いまはあなたの判断がマラノを救ったことを疑うものではありません。ですが、二四年前は帝国に對抗しうる勢力などここにもありませんでしたが、いまは解放軍がいます。逆に我々がここで解放軍に恩を

売っておかねば、マラノの自治は二度と取り戻せないことになりましょう」

「自治自治、どいつも判で押したように同じことを言う。マラノの自治はマラノ市民の命と引き換えにするほどのものか？ マラノの平和と引き換えにするほどのものか？ そのトリスタン皇子に示された約束を信じているのではあるまいな？ 彼はあの神帝グランの息子ぞ、マラノが生み出す巨額の富が目くらみ、わしらのご先祖が命がけで守り抜いたマラノの自治を踏みにじろうとした男の息子だぞ！」

トリスタンははじかれたように立ち上がったが、今度は足は踏まれなかった。

「わたしは父とは違う！ 父がマラノにどのような難癖をつけたのかは知らないが、わたしはあなた方に交わした約束を破らないつもりだし、あれがただの口約束などとは思ってもいない。信じられないのか？」

彼は隠し持ってきた短刀を引き抜いた。

「ならば約束の証に指でも手でもくれてやる！」

小指のつけ根に刃まで当てかけたトリスタンを止めたのは誰だろう、それまでずっと静観していた（何でも屋）のジャックだった。

「およしなさい、トリスタン皇子。ゼテギネア大陸

を後々治めようと言う方が指が欠けているのでは格好がつかないでしょう？

それにブラモア・ド・ガニス殿、わたしはこのような事態を招くために解放軍をあなた方にご紹介したわけではありませんよ。マラノの平和を守り、自治を守り抜こうとされる姿勢はご立派ですが、帝国にも降伏されたあなただ、ここは一つ、わたしの顔を立てて、長いものには巻かれていただけませんかねえ？」

十三人会にとつて〈何でも屋〉のジャックという人物がどのような立場にあるのかトリスタンは知らされていないし、彼とは昵懇の間柄にあるグランディーナも知らないらしい。

だが、いかにも柔和な話し方をしながら妙な圧力も覚えさせるジャックの言い分は十三人会にとつて決して軽いものでないことだけは確かである。十三人は黙り、グリフレットが無言で皆の顔を見渡す。最後にブラモア・ド・ガニスを見たが、とうとう長老もうなだれるように頷いた。

「十三人会を代表してお詫びする、ジャック殿。もう少しいあなたに泥を塗るところであった」

「いいえ、グリフレット殿。ただわたしも肝っ玉が小さいので血なまぐさいことはごめんです。いまのよ

うに殺せの殺すだの、指を切るだのという話は勘弁してくださるようお願いしますよ」

「承知している。我々十三人会およびマラノ市参事は解放軍に協力させていたどころ」

「その回答だけでもえれば私は十分だ。あなた方には我々が武器を持ってマラノに入れるよう便宜を図ってもらいたい。我々はパドバの郊外で野営している」

「承知した。明日にでも迎えに行かせよう」

グランディーナは頷き、トリスタンを誘った。

「後のことを相談したい。野営地に戻ろう」

「お二人とも、わたしはパドバの出身だ。近くまで送らせていただけませんか？」

ラモラックがそう言いながら近づいてくる。

そう言えばグランディーナが彼にした質問はまだ答えられていないとトリスタンは思ったが、予想に反して彼女は首を振った。

「トリスタンと二人で話したいこともある。ご好意だけいただいておく」

「そうですね、ラモラック殿。このわたしを差し置いて彼女を送ろうなんて抜け駆けは許されません。

さあ、行きましょうか？」

「そういうことだ。失礼する、十三人会の方々」

ジャックがさも嬉しそうな顔でグランディーナと腕を組んで先に部屋を出て行き、トリスタンも二人を追いかけた。

それからジャックの馬車に乗り込むまで三人は無言だったが、馬車が動き出したとたんにジャックが開口一番に言った。

「あまりうまい断り方ではありませんでしたね。それに昨日はあれだけ言っておいてアプローズ男爵と組んでいる方にも言及はなしですか？」

「話してもしょうがないからやめた。それに誰が裏切り者か言及するつもりがないのは昨日も言ったとおりだ」

「あなたにしては**ずいぶん穴だらけの作戦**のように思えますが、まさか十三人会は偽装ですか？」

「そうだ。裏切り者がアプローズにたれ込んでくれれば多少時間も稼げるだろう。こちらは**そのあいだにラウニイーを囮にアプローズを直接暗殺する**」

「なるほど。アプローズ男爵は賢者ラシュデイの力を譲られたとも暗黒魔法を学んだとも言われていますが、ラシュデイがかつてガレス皇子を騎士団長アシュに化けさせてグラン王を暗殺したように、解放軍も聖騎士殿に化けてアプローズ男爵を暗殺しますか」

ジャックの指摘にトリスタンはもとより、グランディーナも驚いたように彼を見た。

「それは気づかなかった。そうだな、ラウニイーに本人の役をやらせる必要はないわけか」

彼女がわずかな笑みを浮かべ、ジャックも楽しそうに頷く。

「その役目、わたしにやらせてもらえないか？」

「駄目だ。ラウニイーはあなたより背が低い。アプローズにすぐにはばれる。それに王になる者が暗殺などに携わらない方がいい。あなたは加えられない」

「それではラウニイーの役は誰がやるんだ？」

「彼女がアプローズを討てるなら本人でもいいが、そうでなければ私がやる」

「暗殺とはまた物騒な手段に出たものですねえ。あなたらしい判断とも言えますが」

「仕掛けられた罠が複雑すぎて解除できないし発動されたら致命的だ。いろいろ考えたがアプローズを殺すのがいちばん早い」

淡淡と言いつつ彼女をトリスタンは見つめる。そのやり方は危険だと内なる声が警告している。マラノ解放、アプローズ男爵打倒という大義を掲げながら、やろうとしていることは賢者ラシュデイやガレス皇子と

大差はない。いずれ解放軍のしたことが白日の下にさらされる時、アプローズ男爵の暗殺という行為は批判されてしまうだろう。

けれど、ゼテギネア帝国相手の戦いがきれいごとだけでは済まないことはトリスタンもよくわかっているつもりだ。先のディアスポラ大監獄解放前夜、彼女がアッシュやウォーレンたちに勝つ必然性を説いたことを彼はアッシュから聞かされた。

そう、必要なのは勝つことだ。傍目には無理な戦力差を引つ繰り返し、勝ち続けてみせること、そうしなければ民衆の支持は得られない。民衆の支持や協力がなければ解放軍は帝国と戦い続けることもできない。

そしてその裏で交わされる取引や暗殺などという決して正当化できない行為を、グランディーナは解放軍のリーダーという立場において全て一人で背負おうというのだ。この先、当然生じるであろう帝国や旧五王国とのしがらみさえも一人で持つていき、自分には疲弊した、しかしまっさらな国土を残そうとしている。

ゼノビアという国を背負ったトリスタンにはとうてい真似のできない覚悟だった。

そう思ったら自然と苦笑いがこぼれた。そんな皇子をグランディーナもジャックも無言で見ている。

馬車はまだパドバに着きそうになかった。

「ジャック、ありがとう。マラノに来てからあなたには世話になりどおしだな。だがもう一つ頼みたい」

「あなたにそう言っていたけるとは光栄ですね。

それで頼みとは何でしょうか？」

「羽根を傷めずに染められる黒い染め粉と肌を黒く染める染め粉、髪を黒く染める染め粉と金髪に染める染め粉がほしい。あなたに頼むことはこれが最後だ」

「承知しました。できるだけ早く届けさせましょう。それではトリスタン皇子、失礼いたします」

「わたしからも礼を言う。ありがとう」

わざわざ馬車から降りたジャックは優雅に一礼し、また馬車に飛び乗った。

「ケイン、トリスタンをアッシュのところへ案内してくれ。途中でウォーレンたちも拾っていき」

「わかりました」

真つ先に自分を追っ払うのはカノープスたちが話しづらいからだろう、ということはトリスタンにも察しはついたが素直にケインについていった。一日ぶりに会った従者は心得顔に四人を探し、アッシュのもとまでたどり着く。

ケインに話したいことがいろいろとあつたが、こう人が多くては話せない。そうでなくてもトリスタンは注目されている。義勇軍の時以上に慎重な行動が必要なようだ。

一方、ケインとともにグランディーナとトリスタン皇子を迎えたランスロットとカノーブスだったが、パドバの様子も特に変化はなく、ギルバルドとライアンもまだ連絡はよこさずで報告すべきことはなかった。

「今日一日退屈だったぞ」

「すぐに退屈じゃなくなる。二人とも、マラノ攻略の面子を全員連れてアッシュのところまで待っていてくれ。私も後から行く」

「よし、やつとその話か。じゃあ、俺はこつち行くから、おまえはそつち行つてくれ」

「わかった」

指を鳴らしながらカノーブスが上機嫌で右手に廻り、ランスロットも左手に廻っていった。

グランディーナは二人より少し遅れてアッシュのもとに向かう。彼女はアラディを除く四人の影たちに見張りに立つよう指示してから皆に話し始めた。

「待たせたな。あなたたちに集まってもらつたのはマラノ攻略の話をするためだ。アッシュ、ウォーレン、

アレック、ケビン、チェスター、立つてくれ。この五人と私がマラノ市の六地区をそれぞれ担当する。アッシュがベルチェルリ、ウォーレンがボローニヤ、アレックがモンビーゾ、ケビンがマントーパ、チェスターがフェルラーラの担当だ。アッシュの下にグレッグ、トリスタン、アラディ、ノルン、ウォーレンの下にチェンバレン、ヨークレイフ、トリム、マチルダ、アレックの下にカリナ、デネブ、ライナス、アイーシャ、ケビンの下にマクレディ、フォードム、アンジェ、フランソワ、チェスターの下にゼル、ニールソン、マルコス、モームがつく。各リーダーは人員の把握を忘れるな。ランスロット、カノーブス、ラウニー、ケインは私と一緒に」

名前を呼ばれた者がそれぞれのリーダーのもとに移動する。

「明日以降、マラノの十三人会が迎えをよこす。あなたたちはマラノ市内に入り、各リーダーは合図を待て。リーダーだけ集まってくれ。あとの者は解散していい。ランスロットたちは残れ。」

アラディ、ライナスたちに見張りを夜番と交代するよう伝えてくれ」

「わかりました」

その場に残ったのが五人のリーダーとランスロット、カノープス、ラウニイー、ケインだけとなった時、グランディーナの表情が陰りを帯びたことをカノープスは見逃さなかった。

「我々だけ残したのは合図を伝えるためだけではない。その作戦、何か裏があるろう？」

アッシュが早速口を開く。ケビンやチェスターも口には出さないが気持ちは同じようだ。

「これから話すことは他言無用に願う。ほとんどの者はマラノ攻めが終われば我々のしたことに気づくだろうがあえて公言する必要も理由を話すこともない。だがあなたたちにはあらかじめ知っておいてもらった方がいいだろう」

彼女はそこでいったん言葉を切ったが誰も発言しないので話を進めた。

「私、ランスロット、カノープス、ラウニイー、ケインはラウニイーをアプローズに引き渡すふりをして彼を暗殺する。あなたたちはいわばその目くらましだ。十三人会のなかにアプローズとつながっている者がいるはずだが特定できない。あなたたちがアプローズに引き渡される恐れはないと思うが、念のため単独行動は慎んでもらいたい」

「そのような策を採る理由を伺ってもよろしいか？ それにカノープスではなくアレックをリーダーにした理由もだ」

「アプローズの仕掛けた罠が複雑すぎて解除もできないし発動されれば致命的だ。彼の目的が罠の発動にある以上、直接狙った方がこちらの被害を抑えられる。アレックとカノープスを入れ替えたのはカノープスにアーレスを模してもらったためだ」

「げげっ！ あんなに真つ黒に染めるのか？」

「染め粉はジャックに頼んでおいた。届き次第、取りかかってくれ」

「げーっ」

「手伝うよ、カノープス」

「そういう問題じゃねえよ」

「それとラウニイーに確認しておきたい。あなたは迷うことなくアプローズを殺せるか？」

「彼を殺さなければならぬの？ 止めるのではなくて？」

「殺す。アプローズがどんなきつかけで罠を発動させるかわからない。その隙を与えないためにはすぐに殺すしかない。できるか？」

「やるわ。私がアプローズ男爵を倒します」

「あなたが躊躇すれば皆の死につながりかねない。それでもできるか？」

「ええ」

グランディーナの目がラウニーの目をのぞき込む。彼女の迷いを見抜きそうな鋭い視線だ。だが彼女は自分から目をそらさなかった。

この手が血にまみれることは聖騎士になった時に覚悟していた。それが間違つても正義に背く行為でないのならばなぜ迷うことがあるだろう。ラウニーが選んだのはそういう道なのだ。迷いを見せてはならない。ましてやこのような決定的な時には。

とうとうグランディーナが頷いた。

「良からう。一番手はあなたに任せる。ランスロット、カノープス、ケイン、そのつもりでいろ。万が一彼女がし損じた時には私が討つ。いいな？」

三人とも頷き、グランディーナは再度アッシュたちに向き直った。

「十三人会は我々の本当の目的を知らない。くれぐれも気取られるな。ほかに何かあるか？」

「商人たちの裏切りで我々がアプローズ男爵に引き渡される可能性はないのか？」

「何とも言えない。だがアプローズはそんなことに

いまさら関心はないだろうと思っている。罾を発動し、一人でも多く殺すことが彼の狙いだ」

「なぜそう言い切れるのだ？」

アッシュの問いに彼女は少しだけうつむいた。

「勘だ。いまはそうとしか説明しようがない」

「当たつても外れてもありがたくない話だが、あなたの言を信じよう。各々方もそれでよろしいか？」

「いまはそうするのが良いようですな」

「うむ。」

「ご武運をお祈りしますぞ、ラウニー殿」

「ケビン殿、あなたは、私の父が何者かご存じの上でそのような言葉をかけてくださるのですか？」

「確かにヒカシュー大將軍は我らの祖国を蹂躪した方だが、娘のあなたまで同罪ではあるまい。実はそうトリストアン皇子から言われてな。それにゼテギネア帝国を憎む気持ちは我らに強いが、本当に罪に問われるべきは女帝エンドラと賢者ラシュディ、悪行を言われるガレス皇子であろうと考え直したのだ」

「ありがとうございます」

「礼ならばトリストアン皇子に言われるがよい。皇子のお言葉がなければあなたの存在を疎ましく思っていたかもしれない。やはり人の上に立たれる方は氣のつ

くところが違うものだな。ゼノビア王国の復興は楽しみであられよう、アッシュ殿？」

「そのような話は我らがゼテギネアに迫った時にも改めていたそう。まずは気を引き締めて目前のマラノを落とそうではないか」

「そうだな」

五人のリーダーたちが去り、アプローズの暗殺を命じられた四人だけが残った。

「ラウニイー、あなたの覚えている限りでいい。アプローズの部下を教えてください」

「特に印象に残った人が二人いるわ。ゲラって女の人とオドアケルって男の人。オドアケルはたぶん魔術師ね、長衣を着ていたし杖も持っていたから。ゲラはよくわからないけれどとにかく派手な人よ。派手なだけでお世辞にも趣味がいいとは言えないけれど」

「性格などは？」

「オドアケルはアプローズ男爵の前でも意識が散漫だったわ。心ここにあらずで人の話を聞かないのよ。まともに聞くのはゲラの命令だけ、でも魔術師としてはかなりの実力者らしいわ。ゲラは、とにかく品がない女よ。私のことをいつでも見せて、まるで蛇のような目つきだったわ。でも二人ともアプローズ男爵が旧

ゼノビア王国の貴族だったところから仕えているそうよ。主人が主人なら部下も部下だわ」

「ポグロムの森を焼いたのはオドアケルだろうな。

ランスロット、アプローズが部下なしでラウニイーに会うとは思えない。部下のなかに魔法使いがいたらあなたが倒せ」

「承知した」

「ゲラという女はどうするんだ？」

「職業がわからない。ケイン、倒すつもりで魔法を使え。カノープス、あなたもそちらに廻ってくれ」

「了解」

「アプローズ男爵の暗殺はトリスタン皇子はご存じなんですかね？」

「知っている。彼も来たがったがいない方がいいだろう」

「そうですね。お心遣い感謝しますよ」

グランディーナはポケットを探り、追尾石をカノープスに渡した。

「アーレスがラウニイーを追うのにアプローズから渡された物らしい。あなたが持つていてくれ」

「アーレスの部下はこんな面子じゃなかったぞ。それに俺のが奴より背が高い。それでもいいのか？」

「アプローズに取り次ぐ者までアーレスの背格好や部下までいちいち覚えてはいまい。彼に会うのにごまかせればいいが、アーレスの肌や髪、翼の色までどうしようもない」

「まったく、髪や肌はともかくこの俺の翼を染めようって言うんだから」

「アプローズのところにはマッセナ家の迎えを廻してもらって堂々と乗り込むつもりだ。あなたたちももう休め」

カノープスはまだ文句を言っていたが、ランスロツトになだめられた。ラウニーとケインは個別に去り、最後にはグランディーナ一人が残される。

彼女はしばらく自分の考えにふけていたが、やがて立ち上がり、焚き火を踏み消した。

翌炎竜の月二一日、フェルラーラからアグラヴェインの迎えが来たのを皮切りに十三人会が迎えをよこし、解放軍のマラノ潜入が始まった。

次いでブラスティアスの使いが来て、昨日はあまり気乗りしてなさそうだったエクトルやポールスも使いをよこしたが、その日はそれでおしまいだ。

「十三人会でいちばんの奴がアプローズに通じて

たつて笑えないおちはねえんだろうなあ？」

ジャックの持つてきた染め粉で全身を真っ黒に染めたカノープスはまるで別人のようだ。

「たぶん大丈夫だ。私が疑っているのは別の者だが、一人はマラノ潜入には関係ないし、あとの二人はアツシュとケビンの担当だ」

「ちよつと待てよ。ケビンはいいけど、アツシュのところにはトリスタン皇子がいるんだぞ。万が一人質にされたらどうするんだよ？」

「だがここには誰も残らない。トリスタンだけ置いていくわけにはいかない」

彼は何か言おうとしたが、その時、誰かに呼ばれたような気がして振り返った。

「誰か来たのか？」

さすがの彼女も有翼人の視力は持たないらしい。多少の優越感を覚えて、カノープスは応えて手を振った。

「あれはユーリアと、たぶん、アルゴだな。ギルバルドと一緒にモンスニーラまで行っただはすなんだが、何かあったのかな？」

「サンベルナルとモンスニーラを落としたという報告だろう。今日はグリフレットとルーカンは来そうにないな。二人の話を聞きに行こう」

「おいおい、俺はいつまでこんな格好をしていればいいんだよ？」

「アプローズを倒すまでに決まっている。どうでもいいがあなたもあまり目立たないようになっている。

アーレスが解放軍と一緒にだなんてばれたら面倒なことになる」

「げげっ」

グランディーナの言ったとおり、ユーリアとアルゴの帰還はギルバルドからの報告を携えていた。だがマラノの衛星都市とはいえトリエステやパドバよりずっと重要性の落ちるサンベルナルやモンズニーラの攻防戦は、輪をかけて言うこともないような有様だったらしい。

しかし二人が戻ったことで、グランディーナはトリスタン皇子の代わりにアルゴをアッシュとともにに行かせることにした。ユーリアとトリスタンはパドバに残り、こちらに向かいつつあるギルバルドの部隊や、同様にシヤモニーまで落としたらこちらに帰ってくるであろうライアンの部隊を待つことになったのだ。

さらに翌日、午前中にルーカンの迎えが来て、午後ようやくグリフレットが馬車をよこし、解放軍はラ

ウニィーウインザルフとラインハルトアプローズ男爵の結婚式の二日前にマラノ市内への潜入を果たしたのである。

「グリフレット殿、明日は我々をアプローズの館に連れていってくれ」

「どうやらわたしたちもだしに使われたようです。それにお仲間も囮にしようとは恐ろしい方だ」

「我々は解放軍じゃない。聖騎士ラウニィーウインザルフを捕らえた漆黒のアーレスとその部下だ。よろしいか？」

そう言いながら、グランディーナはアーレスに扮したカノープスの背を押した。

「なるほど。ラウニィー殿を捕らえた功績により華々しく凱旋なさるといわけですね。何か入り用な物がありますか？」

「縄は持ってきたし、宿だけ提供してくれ。お姫さんを入れる部屋には鍵もつけてな」

「承知いたしました」

「まさか、私をもう縛り上げようというつもり？」

「ん千万ゴートのお宝だ、逃がすわけにはいかなからな。縛り上げて交替で見張っておけ」

「承知」

グリフレットの用意した二部屋に男性陣と女性陣とで別れて入ると、カノープスが小さくため息をついた。

「ほんとにこれでごまかせるのかな？ それにあんな勇ましいこと言ってたけど、あのお嬢さんに本気でアプローズが殺せるのか？ さつきにらまれたけど、とても殺気にはほど遠かったぜ」

「味方の君に殺気など示しはしないだろう」

「示した奴を知ってるから心配なんだよ」

ランスロットにはそれが誰か容易に予想がついたが、ケインが誰かと訊ねた。

「そんなことができるのは一人しかいねえだろう。」

しかも自分が瀕死の重傷喰らってる時にだぞ。俺は命がけの覚悟でエレボスを飛ばしたものだ」

それでケインも誰の話か察したらしい。

「ですが、ラウニー殿がアプローズ男爵を討ち損じた時はグランディーナ殿がやると言ってますんでしたか？」

「そうになると、俺たち三人でアプローズの周りにはべつてる連中を倒さなきゃならなくなる。オドアケルとゲラッて奴も含めてだぞ。できないとは言わねえが少々荷が重たいのも事実だ。まあ、最初からその覚

悟をしていた方が良さそうだがな。

ケイン、おまえさんはまさか人を殺したことがないとは言わねえよな？」

カノープスの軽口に皇子の従者は渋い顔で答える。誤解されやすいがこれがカノープス流なのだ。

「ありますよ。義勇軍としてエストラーダさまの下で戦っていた時にトリスタン皇子もわたしもじぎに人を殺さなければならなくなりましたから。義勇軍などと言っても最初は三人しかいませんでしたし。ですがわたしは魔法使いなので人を殺す感触は味わったことがあります。自分の唱えた魔法で人が倒れるところは何度も見ていますが、武器から伝わってくる感触は知りません」

「ラウニー殿もその覚悟はしていただろう？ わたしは彼女を信じたいが」

「覚悟はできてでも実際に殺すとないとたいいの奴は身がすぐむものさ、それがふつうなんだ。カストロ峡谷で助けた時にアールスの部下を殺してたとグランディーナが言ってたが、本人は忘れてそうだしな」

「そうだな。あれは何年経つても忘れられるものじゃない。慣れられるものじゃない。いまでも武器を取らねばならない時は身がすぐむ。人を殺さねばなら

ないことを恐れてしまう」

「別におかしかねえ。それがふつうだ。おまえの精神はいったって正常なのさ」

「君にそう言われるとは思っていなかったよ」

「たとえ敵だろうと殺すことには迷いがあるべきだ。こうして俺たちが話しているように、敵さんと話すこともあったかもしれないだから。逆に迷いもなく人を殺せる方が俺はおかしいと思う」

「そうだな。だがそろそろ休まないか？ 彼女の話だと明日が正念場ということになるからな」

「俺は何でもいいからこの染め粉をさつきと落としてえよ。ジャックの奴、こすつても取れないようなのを持ってきてくれたはいいがやりすぎだ」

「辛抱しろよ。明日には取れるということだろう」

「そう願いたいね」

一方、グランディーナと同じ部屋になったラウニーは部屋に入るなり身体を縛った縄を解いてもらっていた。

「いくら芝居のためとはいえいきなり縛るなんてやりすぎじゃないの？」

「どうせ明日にはまた縛られる。ところであなたは

槍しか使えないのか？」

「ええ、剣なんて使ったこともないわ。私が得意な武器は槍ですもの」

「オズリックスピアは私がついている。明日、この縛り方をしておけばあなたはすぐに縄抜けできるはずだ。あなたはアプローズを討つことだけを考えている。迷いは死につながる、明日だけは迷うな」

「わかつているわ」

言いながらラウニーが身体を動かすと、少し手こずったが縄は簡単にほどけた。

「あら、本当。こんな縛り方、初めて知った。あなたがつて案外器用なのね」

グランディーナはラウニーを見ている。冷徹な眼差し、あれだけ念を押しておきながらまだ値踏みまされているようだ。

「どうやら私はまだ信頼されていないようね。私がアプローズ男爵を討てるかどうかそんなに心配？」

「いつもなら自分で手を下すところだがアプローズがあなたを見分けるかどうか自信がない。だがあなたに任せると不安を消しきれない」

「失礼ね。皆の前で私に任せると言ったのはあなたの本心ではなかったのかしら？」

「半分は本心だが、半分ぐらいは明日決めようと思っている。あなたはまだ意識して人を殺したことはないだろう？ カストロ峡谷でアーレスとその手下たちを殺すために槍を振るつたか？ そうではないはずだ。倒したことさえ気づいてはいまい」

「あなたの言うとおりかもしれないわね。ハイランド王国の聖騎士が選ばれた最強の騎士だったのはゼテギネア帝国が興る前、ずっと前のことだわ。聖騎士団もいまのガウエイン団長になってから戦闘はほとんど経験がないそうよ。人を殺したこともないわ、帝国にはあなたたちが現れるまで敵らしい敵なんていなかったのだから、それも当然よね。だけどあなたは言わなければ、私はラウニイー・ラウインザルフ、ゼテギネア帝国大將軍ヒカシュー・ラウインザルフの一人娘なの。解放軍にいる限り、いずれお父さまに見えるでしょう。いまの私はそのことが怖い。お父さまにかなわないことがわかってるし私はお父さまを尊敬し、愛しているからよ。でも私はお父さまから逃げないし逃げられない。いつかお父さまと戦わなければならなくなる時までにお父さまと戦えるようになってみせるわ。だから私に任せて。聖騎士でありたいと願うのなら私は戦わなければならないのよ」

「気持ちだけで人を殺せれば苦労はしない。人の心はそんなに簡単に割り切れない。父親と戦おうというあなたの勇気を疑うつもりはないが、殺すことと殺さないことの差は小さいものではない」

「それならば、どうしたら私にアプローズを倒させてくれるのかしら？ 私はできると言うし、あなたは疑うし。ここまでできて堂々巡りは空しいわね」

「だから明日の朝に決めると言っている。もしもあなたに任せても躊躇するならば私が殺す」

「あなたは自分ならば躊躇しないと言うのね？」

「言うからラウニイーはそれが愚問だと思った。解放軍のリーダーは何年も傭兵暮らしをしてきた、いわば戦闘の専門家だ。アプローズ男爵を殺すのに迷うはずもない。」

「そろそろ休め。考えていても結論は出るまい。寝不足では反応も鈍る」

「馬鹿にしないで。一晩ぐらいの徹夜で堪えるものですか」

「そう言ったが、ラウニイーは素直に寝台に横になる。部屋の中はすぐに暗くなった。」

「けれどいつまでも寝つかれず、彼女は何度も自分に言い聞かせたり、煩悶していた。かといって寝返りを

打つのもいかにも眠れませんが、と公言しているよう
でできず、とうとう一回だけ打った。

見るとグランディーナは寝台に横たわってさえおら
ず床に座った姿勢でどうやら寝ているらしい。ラウ
ニーには野宿が辛い、彼女には性に合っているよ
うだ。聞けば、解放軍の野宿も彼女が言い出したそ
うだし、ラウニーとは正反対と言つてもいいような生
い立ちらしい。

だが、野宿ならばともかく、いまは宿を借りてい
るのだ。それなのにどうして寝台で休まないのだろ
う。寝ている時も武器を傍らから離さないのはも
はや用心深いでは片づけられまい。

その時、ラウニーは大きなあくびをした。
今度こそ本当に眠れそうだ。
果たしてそのとおりであった。

「ラウニー、アプローズを倒すのはやはりあなた
に任せることにする。ただ、昨日の縛り方では少し緩
すぎる。きつくするからほどく時に注意しろ」

「わかったわ」

実際に縛られたのは馬車に乗り込む前だ。繩の先は
ランスロットが持ち、一行はマッセナ家の馬車に乗り

込んだ。

「たかが賞金稼ぎに好待遇じゃねえか」

「アプローズ男爵の婚約者殿にこれ以上無理をさせ
るに僥びませんので」

「ン千万ゴートの大金がかかっているんだぜ。そんな
に無下な扱いができるものか」

「これまでの扱いを棚に上げてよくそんなことが言
えるわね」

「自分の置かれた状況も忘れてよくもそんな憎まれ
口がたたけるもんだな。まあ、それを聞かされるのも
今日でおしまいと思えば我慢もできるがな」

「あなたたちなんて地獄に堕ちればいい！」

大胆不敵に笑ったカノープスを見て、ランスロット
は彼には盗賊になる才能があるかもしれないと思つた
ほどだ。

馬車はマラーノ市内を軽快に走り、じきに停まった。
マッセナ家はアプローズの住まいに近かつたようだ。
カノープスはランスロットの手から繩を引つたくる
と真つ先に馬車を降りた。

「ここはアプローズの館だろう？ 領主に取り次い
でくれ、漆黒のアーレスさまがあんたの婚約者を連れ
帰つたつてな」

馬車から転げ落ちるようにラウニイーが降り、ほかの三人も続いて降りる。

だが門番はラウニイーの顔を知らないのか鈍い反応だ。そこをカノープスがいきなり怒鳴りつける。

「こちとらわざわざカストロ峡谷まで追っかけたんだ！ 貴様の主人が明日の結婚式に花嫁がいないなんて情けない事態になつてもいいつて言うのか?!」

「す、すぐに取り次いでまいります！」

カノープスの剣幕に驚いて、門番は急いで屋敷の中に走り込んでいった。

しかしすぐに戻つてきて言うことには、アーレスだという確かな証拠がほしいとのアプローズの用心深い言いつ分だった。

「しょうがねえな。アプローズから預かつた石だ。

お姫さんを探すのに役に立つたつて渡してくれ」

「何という石です？」

「そんなこといちいち覚えているものか。おまえは黙つて渡せばいいんだよ。とつとと行かねえと痛い目を見ることを教えてやろうか？」

彼がすごんでみせると門番もそれ以上逆らうことはせず、今度は追尾石を持って引つ込んだ。

それから彼らはさらに待たされた。カノープスは苛

立たしそうに屋敷の壁を蹴つ飛ばす。

「おやめなさい、品のない。あなたという人は本當にレイブンそのもの、墮落した有翼人以外の何者でもないわね」

「何だと、この女^{おま}?!」

カノープスの演技があんまり堂に入っているもので一瞬本気かと思われるほど、彼はラウニイーの首筋をつかみ上げた。

しかし彼女も負けじとにらみ返す。その気迫は一瞬、カノープスを怯ませたほどだ。

「そこまですてにしていたでしょうか、アーレス殿。いくらラウニイー殿を連れ帰つたとはいえ、それ以上彼女に手を出せば賞金はお出しできませんよ？」

「わかつたよ」

現れたのは執事らしい男だったが、その後ろに派手な身なりの女と魔法使いらしい長衣を着た男が並んでいる。どちらも中年にさしかかつた年齢のようだが、男の視線は落ち着きがなくさまよつてばかりおり、女の方は舌なめずりするような目つきでラウニイーを見ていた。あとの四人にはまったく関心がないという感じだが、同性には興味があるのかグランディーナにだけ目を向けた。これがラウニイーの言つていたゲラと

オドアケルだろう。

「アプローズさまはもうおまえが間に合わないだろうと思つていたんだよ。お嬢さんを渡してお帰りよ、アールス。あんたの役目はここまでだ」

「そいつはつれねえな。確かに借りた石は役に立ったがあの広いカストロ峡谷をこちとらさんざん歩き廻されたんだ。褒美ぐらい男爵から直接もらったつて罰は当たらねえだろう？」

「ふふん、あんたにしてはずいぶん大きく出たもんだね？ 結婚式の前日とはいえ、お嬢さんを無事に連れ帰った功績は褒めてやつてもいいが、高望みしすぎると痛い目に遭うよ？」

「高望みしてるのはどっちだ、ゲラさんよ？ どうしても男爵が出てこねえと言うのなら、俺はこのまま引き返したつていいんだぜ？ そつちから丁寧に引き取りに来てもらうまで俺はマッセナ家で待つからよ」

ゲラはカノープスを見定めるように眺めた。

「前のあんたにそれだけの気概があれば、お嬢さんを追いかけるなんて貧乏くじはほかの奴に引かせてやつたのにさ。いいよ、ついておいで。アプローズさまにはあたしが取りなしてやろう。だがあんたもこれを機に、いつまでも盗賊だの賞金稼ぎなんて割の合わ

ない仕事をしていないでアプローズさまのところでもっと楽な仕事をするこどもも考えたらどうなんだい、ええ？」

「そいつはうまい誘いじゃねえな。男爵の約束した賞金があれば、俺は一生遊んで暮らせるんだぜ？ 何を好きこのんで汗水垂らして働くものか」

「へえーつ、故郷にでも帰ろうつて言うのかい？」
それまでカノープスに身をすり寄せていたゲラが離れ、オドアケルについた。

「冗談だろう？ 故郷に錦を飾るなんて趣味はねえよ。ゼテギネアにでも行つて気楽に暮らすさ」

オドアケルは引つづいた。ゲラの両腕をつかんだが、相変わらず視線は明後日の方を向いている。だが彼女が右手をねじり上げると突然うなり声を発し、目つきまで変わつて一行を睨みつけた。

グランディーナが飛び出したのはその時だ。彼女はゲラの肩を引つつかむと片手で繰り出した曲刀で二人を串刺しにして切つ先をねじつた。

ゲラはおそらく心臓を貫かれたものと見え、口から大量の血を吐き出したが、彼女より背の高いオドアケルはその一撃で絶命しなかつた。

「ゲ、ゲラーツ!!」

「グランディーナ、どいて！」

自由になるのにラウニーは手間取らなかつた。彼女は放り出されたオズリックスピアを拾い上げると、躊躇することなくオドアケルの顔面にその先端をたたき込んだ。魔術師に呪文を唱えさせないためには先制攻撃が重要なのだ。さんざん繰り返した動きがこれほど滑らかに再現できようとは彼女も思いも寄らぬことであつた。

「アプローズを見つけろ！ 離れるな！」

グランディーナに続き、ラウニー、カノープス、ケイン、ランスロットの順で廊下を疾走した。行く手を阻んだ者は曲刀の餌食となり、三階まで駆け上がる。

「あの扉よ！」

ラウニーが指したのは豪華な両扉でいちばん奥にあつた。

「脇に避けていろ！」

扉を開けたのはグランディーナだ。だがその中は暗く、空気も澁んでいる。しかしアプローズの待ち伏せはなかつた。

ラウニーの顔から血の気が引き、ランスロットたちも初めて彼女やコールマンの言葉を理解した。確かにそれは説明しがたい雰囲気だ。ふつうの人間ならば

発するはずのない何か、それは得体の知れないものであつた。

ケインは冷や汗が全身から吹き出すように思つた。

どこかで似たような雰囲気を持つた者と対峙したはずだが思い出せない。それよりも足がすくむ。魔法の使い手は自分だけなのだ、アプローズの魔法に對抗できるのは自分だけだと言ひ聞かせても足が動かない。

その時、肩に手が置かれた。

「無理もねえ。俺だつて足が動かねえ。ここに立っているのがやつとだ」

カノープスの声に被さるように部屋の中から冷たい声が響く。

「お入りなさい、反乱軍の皆さん。わたしを討ちに來たんじゃありませんか？ ここまで来て怖じ気づきましたか？」

「遠慮などしない。入らせてもらうぞ」

そう言つてグランディーナが入つてゆく。その横顔はいつもの冷静さとは異なるようだ。

遅れて自分のありつたけの勇気を奮い起こしたラウニーとランスロットが続き、それでカノープスと最後にケインも部屋に入った。

室内は暗く、アプローズを照らす灯りしかない。

「しばらくお会いしないうちに何やら人間離れしたものを身につけられたようね、アプローズ男爵？」

「おや、わかっつてしまえますか？ ラシュディさまにいただいた力がね、こうあふれ出すのですよ。わたしたちに、いいえ、わたしに逆らう愚か者たちを殺せ殺せ、と内なる声が囁いていますね、あなたたちが来るのを、あなたが帰ってくるのをわたしはいまかいまかと待ち焦がれていたのですよ！ ですがせっかく仕掛けた罠をあなた方に見てもらいたいですよ！」

「そうやってボグロムの森での虐殺も引き起こしたのか？ なぜだ、アプローズ男爵？ ゼノビア王国でそれなりの地位にあったあなたが、なぜそんなことをしたんだ？」

「ふ、ふふ、ふふふふ、はははははははは！」

ランスロットの言葉にアプローズが狂ったように笑い出す。そんな反応をされると思っていなかった彼も、悪意に満ちた哄笑に剣の柄を握り締めた。

「おやおや、反乱軍にはゼノビアの連中がいるとは聞いていましたがまさかこのようなところでお会いしようとはね！ わたしがゼノビアでそれなりの地位にあったですって？ これが笑わずにいられますか！ 王に何らこねを持たない三流貴族のわたしがあの神帝

陛下の下でどれだけ苦勞を舐めさせられたかご存じありませんまい？ ゼノビア王国に恨み辛みは数々あれど恩義などいささかも感じたことはありませんよ！」

「だからといって避難民には何の罪もあるまい？ なぜ彼らを殺したんだ？」

「うるさいですねえ。ゼノビアゼノビアって何を正義感取ってるんですか？ もういいですよ、あなたたちの話なんか聞いたって退屈なだけなんですから。ここでわたしの素晴らしい力と罠を味わって死んでくださいよ！」

「ゲラ！ ゲラ、オドアケルに命令をしない！」

「二人とも我々が殺した。少し遅かったようだな」

「何ですって?!」

「それに私が帰ってきたのはあなたに永久にお別れを言うためよ。賢者ラシュディからあなたがどのような力をいただいたのかは知らないし知りたくもないけれど、そんな物騒なものを持ち出さないうちに消えてちょうだい！」

ラウニイーは槍を振りかざしたが、グランディーナに首根っこを引つ張られた。そのまま突っ込んでいけば、いきなり発せられたアプローズの魔法の直撃を受けていただろう。

「ふふふ、そんなことを仰らずにせっかく来たんですから味わつていつてくさいよ！ 諸々の悪しき靈よ、我に楯突く愚か者を討ち滅ぼせ!!」

「きゃあああーっ!!」

襲われたのは彼女らばかりではなかった。

領主の部屋に駆けつけた部下たちも、飛び出した悪靈の余波を受けて倒れていった。

ランスロットはガレス皇子のイービルデッドを思い出す。二人とも賢者ラシュデイに師事したという共通点がある。それならば、目指すラシュデイの魔力はこの比ではないということだ。

「どうですか、ラシュデイさまからいただいた私の力は？ ラウニイー、考え直すならいまでもですよ。あなたが悔い改め、わたしの花嫁になつてくださると言うのなら、あなただけは見逃してあげましょう」

「冗談ならば休み休みお言いなさい。あなたの花嫁になるなんてまっぴら、お父さまの目が覚めるようにあなたの首をたたききつてザナドゥに送り返してあげる！ いまの帝国に正義のないことはあなたの存在が証明しているわ」

「婚約者に何て口を。あなたのお父上はゼテギネア帝国に並ぶ者なき武人と言われていますがただ一つ、

娘の教育だけは間違つたようですね」

「あなたの口からお父さまについて語らないで、汚らわしい。お父さまは立派な騎士だけれどあなたは卑劣な裏切り者よ！」

「では死になさい。立つてはいるがさつきわたしの魔法であなたはさつきぶん打撃を受けたはずですよ。あなたにはもう一発耐えることはできませんまい！」

「それはどうかな？」

アプローズ男爵はその時になつて、初めてグランディーナを視界に入れた。

反乱軍の首領はただいま三万ゴートの賞金首だ。その特徴は赤銅色の髪、傭兵上がりの女剣士、名はグランディーナ。

「き、貴様！」

「遅い！」

ラウニイーに気を取られていたせいかアプローズの反応は遅れた。次の呪文を詠唱する間も後ろに下がる間もなく、曲刀が己を串刺しにするのを彼は見た。

部屋中に満ちていた不快さがアプローズが倒れ、絶命するに従つて消える。

グランディーナは刀を引っこ抜いたが、念を入れて男爵の首をはね飛ばした。

「大丈夫か？」

「何とか、な」

「わたしはカノープスに庇ってもらったので」

ランスロットとラウニイーも頷いた。

「本当にアプロロズ男爵は倒したの？」

「そのはずだ。あなたは本気で父親に首を送るつもりか？」

「あれは言葉の綾というものよ。いまでも尊敬するお父さまにそんなことをする気はないわ。それにお父さまは正義ではなく騎士道を選んだのよ。いまのゼテギネア帝国に正義がないことぐらい知らないはずがないわ」

「それならばいい。帰るとするか」

「これで終わったのか？」

「マラノに残っている帝国軍の掃討も必要だろうが、将も魔術師も倒した。駐留部隊の士気も低そうだしそう手間取るまい。罍の除去は十三人会に任せる」

「じゃあ、俺はこの染め粉を落としてもいいんだな？ それにしてもどうしてあのゲラって女にばれちまったんだろうな？」

「あの女はアーレスを直接知っていたのだろう。だがあなたは少ししゃべりすぎだ」

「ラウニイーものつてきたからな。ついこのりになつちまったんだよ。それにおまえだつてあんなに早くゲラとオドアケルつてのが出てくるとは思つてなかつただろう？」

「あら、私はあれがあなたの本性かと思つただけど、違つたのかしら？」

「そんなわけねえだろう。俺は由緒正しきバルタンの末裔だぞ、あんなこと演技に決まってるだろう、演技。まあ、いつもより悪のりしたことは認めるけどな」

「いいや、君は盗賊や賞金稼ぎになつてもいけるとわたしは思つたがね」

「何だと？ おまえ、舎弟のくせに生意気だぞ、ランスロット！」

解放軍がマラノ市を制圧したのは炎竜の月二四日のこと、町中に潜伏していた帝国軍の魔法使いたちは自分たちが魔法を唱えれば何が起きるのか、正式に理解していた者はなかつた。

マラノ市ではその後、十三人会の一人、職人組合長ラモラックⅡノルレンドルフの名において、町中に仕掛けられた罍の大々的な除去のための工事が始まり、終了までには数ヶ月を要したとも伝えられる。

そして、ヴォルザーク島以来、ずっと移動と戦闘を繰り返してきた解放軍はここで初めての休養を取るこ
とになったが、風竜の月二日、グランディーナに率い
られたグリフォンの一隊がマラノ市を発ち、北上して
いったことは解放軍のなかでもごく一部の者しか知ら
ないことであつた。

「そりゃあ、昨日は初めての完全休養日でのんびり
したから疲れなんか飛んじまったが、俺たちだけでど
こへ行こうっていうんだ？ それにこの面子を選んだ
理由がよくわからねえんだけど」

一行はグランディーナを先頭にデネブ、アイーシャ、
ランスロット、それにカノープスだ。

「あたしがいなければ意味がないし、アイーシャは
あたしの要望、グランディーナには腕の立つ者を二人
ぐらいつてお願いしただけよ」

「それで目的地は？」

「バルモアだ」

「というと、サラディン殿を助けようというのか。」

ならば、余計にこの人数では不安がないか？」

「大勢で乗り込んで下手にアルビレオを刺激したく
ない。私が名乗りを上げた時点で奴に気づかれたかも

しれない」

「あなたが出てきただけで石像を壊すぐらいなら最
初から石になんかしないでしょ。石にしたのはもつと
別の理由があるからよ。まあ、あの陰険男だったら、
サラディンの石像を十体ぐらい並べて本物を当てろな
んて言い出しそうだけれど」

「おまえ、アルビレオを知ってるのか？」

「あたしは一応帝国軍にいたんですもの。それに魔
法使いは魔法使い同士で、顔をつき合わせることも多
かったのよね。でもあたしはアルビレオって嫌いな
自己陶醉家で自分勝手に陰険だし残忍だし趣味悪いし
第一！ いちばん許せないのはあたしのカボちゃんた
ちを馬鹿にしたのよ、あの男！」

「それだけ聞いてると誰かさんに似てるって気がす
るし、俺もそんなに反対しねえけど？」

しかしカノープスの言い分は見事に無視された。

「私もアルビレオについていい話は聞いていない。

ラシュディとは別の意味で危険だと言われたが、自分
の力と考えに酔いやすいから逆に倒しやすいと」

「誰がそんなことを言っただ？」

一瞬の沈黙、焚き火のはぜる音がはっきりと響く。
ランスロットもカノープスも、答えが予想できて喉が

鳴った。

「サラデインだ。私は十年前までバルモアにいた。彼が石化されていたことも知っているし、各地を放浪したのはその解除手段を探すためでもあった」

「見つかったのか？」

「あたしが教えてあげるって言ったの。そうしたら解放軍に連れてきてくれたのよ」

「それなら何でバルカス殿に聞いた時にバルモアに廻らなかつたんだ？」

「あたしができるって言わなかつたからよ。でもあたしたちだけじゃそろそろ限界、アプローズだからその程度で済んでるけれど、ラシュデイドつたら為す術もなく倒されちゃうわ。おじいちゃんも物知りな方だけれど、物足りなさが残るのよねえ」

アプローズから受けた傷はまだ治りきつておらず、三人とも包帯を巻いたままだ。

「私は十年待った。バルモアを後回しにしようといままで待った月日に比べれば些細なものだ。だが行くからには必ず助けてみせる。絶対にサラデインを助け出す」

「その面子にわたしを選んでくれるとは光栄だね、グランデイーナ。力の及ぶ限り君の助けになろう」

「お、おう。俺だっていまさらそんなこと言うまでもねえだろう」

「二人とも、ありがとう」

彼女はそう言つて、かすかな笑みを浮かべた。

旧ドヌーブ王国の首都バルモアは十年前の帝国軍の侵攻で壊滅的な打撃を受け、現在はバルモア遺跡と揶揄されるほど倒壊してしまつてゐる。元々海抜〇バームの地帯であつたために海からの浸食も激しく、バルハラ同様に復興が危ぶまれる土地だ。

その支配者は賢者ラシュデイの一番弟子、妖術師アルビレオ、バルモアは現在も帝国軍の支配下にあつた。